「がんと仕事に関する意識調査」報告書

“がんと共に働く”を応援するために～3,166名の声

2022年8月

一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所
法政大学 キャリアデザイン学部 松浦民恵

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

目次

Ⅰ.はじめに～“がんと共に働く”を応援するために……P２

Ⅱ.調査の概要～「がんと仕事の意識調査」……P５
1.目的や方法……P６

2.分析・解釈上の留意点……P７

3.回答者の概要
(1)回答者の属性と当時の状況<がん経験者>……P８
(2)回答者の属性と身近ながん経験者の属性<がん経験者以外>　……P10

Ⅲ.調査結果のポイント……P12
1.がんに対する不安・印象と情報経路
(1)がん経験者のがんに対する不安……P13
(2)がん経験者以外のがんに対する印象……P14
(3)がん経験者ががんについて不安に思った理由……P15
(4)がんと仕事に関する収集情報と有益だった情報……P17
(5)身近にがん経験者がいたことによる影響……P19

2.がんに対する周囲の考え方や対応
(1)働き方に関する周囲の考え方と本人への影響……P21
(2)がん経験者が受けた対応とうれしかった対応……P25
(3)がん経験者以外が行った配慮……P26
(4)がん経験者が「イヤだった」、「うれしかった」上司や家族の言動……P29
(5)がん経験者、がん経験者以外の「がんと仕事」に関する意見……P34
(6)仕事と治療の両立にあたって大切なもの……P38

3.がんと診断された後の意思決定や働き方
(1)がんと診断されたことに関する報告……P42
(2)働き方に関する意思決定プロセス……P45
(3)働き方に対する評価・満足度……P54

Ⅳ.提言～がんと共に働く……P58
1.アンコンシャスバイアスとは
(1)アンコンシャスバイアスとアンコンシャスバイアス・マネジメント……P59
(2)アンコンシャスバイアスの上書き事例：
「がん」と診断を受けた本人の場合……P61
(3)アンコンシャスバイアスの上書き事例：
部下から「がんと診断をされた」と報告を受けた上司の場合……P62

2.“がんと共に働く”を応援するために
(1)がんと診断を受けた人への提言……P63
(2)がんと診断を受けた人の周囲の人への提言……P67

Ⅴ.本調査報告書についてのお問合せ……P73

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅰ．はじめに
～“がんと共に働く”を応援するために

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅰ．はじめに

一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所と、法政大学 キャリアデザイン学部の松浦民恵が共同研究として2022年1～2月にかけて実施した「がんと仕事に関する意識調査」には、3,166名もの声が寄せられました。ご回答いただいた皆さまに、心より御礼申し上げます。

三大疾病の一つであるがんの罹患者は年々増加しており、「がんと仕事」はがん経験者にとっても、がん経験者を取り巻く周囲の人にとっても、より身近で重要なテーマになっています。一方、がん経験の内容は実に多様で、病状や治療方針、当事者の考え方や周囲のサポート等によって「がんと仕事」のあり方は大きく変わります。

その一例として、「がんになったら働けない」といったがん経験者本人や周囲の人のアンコンシャスバイアス（無意識の思い込み）が、十分な検討を経ない段階での早急な退職判断（※）や、本人が望まない形での働き方の変更や退職につながるという問題があげられます。

※がんと診断を受けて退職・廃業した人は就労者の約2割で、そのうち初回治療までに退職・廃業した人は半数以上にのぼっています。
（国立がん研究センター がん対策情報センター（2020）「患者体験調査報告書 平成30年度調査」（厚生労働省委託事業）より。）

こうした事態を回避し、がんになっても働き続けたい人が、なるべく本人の望む形で働き続けられるようにするためにはどうすれば良いのでしょうか。本調査は、人の「意識」の面からこの問いに向き合うものです。具体的には以下の点を明らかにすべく、「がんと診断されたことがあり、当時働いていた人」（がん経験者）だけでなく、「家族、上司、同僚などがん経験者の周囲の人」（がん経験者以外）にもアンケート調査を行いました。

・がん経験者や周囲の人は、がんに対してどのような不安や印象を持っているのか。
・がん経験者は、周囲の人にどのような対応や配慮を求めているのか。
・周囲の人は、がんと仕事に対してどのような意識を持ち、どのようにがん経験者に対応しているのか。
・がん経験者は、どのようなプロセスを経て、がんと診断された後の働き方について意思決定したのか。
・がん経験者の働き方に関する意思決定に、上司をはじめとする周囲の人はどのように関わったのか。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅰ．はじめに

なお、この調査報告書では、「がんになっても治療しながら働き続けることが、何よりも良いことなのだ」と主張したいわけではありません。がんになって働き続けるかどうか、どのように働くかに正解などあるわけはなく、それぞれの人がそれぞれの状況に応じて納得のいく決断をし、それを実現できることが望ましいと考えております。

あくまでも、がんになっても働き続けたい人が働き続けられる社会になってほしいという思いのもとで実施した調査であり、そうした社会の実現に向けた調査報告書であることを、はじめに申し上げておきたいと思います。また、今回の調査は「がん」を切り口としたものですが、治療と仕事の両立は、がんだけの課題ではありません。この調査報告書が、他の病気、けが、障がいなど、人々が置かれる多様な状況に思いを巡らせていただくきっかけとなれば幸いです。

この調査の趣旨にご賛同いただき、調査協力をよびかけていただいた32団体（企業、NPO法人、がん患者支援団体、患者会）の皆さま、回答にご協力をいただいた3,166名の皆さまに心より御礼を申し上げます。

また、調査票作成にあたりアドバイスをいただいた認定NPO法人キャンサーネットジャパン 常務理事 古賀真美氏、一般社団法人CSRプロジェクト 代表理事 桜井なおみ氏、本調査報告書に貴重なコメントをお寄せいただいた国立研究開発法人国立がん研究センター がん対策研究所 事業統括 若尾文彦氏、日本医科大学武蔵小杉病院 腫瘍内科教授 勝俣範之氏、がん経験者でもあり、人事の立場としても「がん治療と仕事の両立」に長く携わられているカルビー株式会社常務執行役員 武田雅子氏をはじめ、ご尽力いただいたすべての皆さまに、心より御礼を申し上げます。

すべてのがん経験者とその周囲の人が改めて「がんと仕事」について考えていただけること、そして、がんと共に働くを応援する社会に一歩でも、二歩でも近づくことを願い、『「がんと仕事に関する意識調査」報告書』をここに公表します。

2022年8月
一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所
法政大学 キャリアデザイン学部 松浦民恵

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅱ. 調査の概要
～「がんと仕事に関する意識調査」

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅱ. 調査の概要　1.目的や方法

◆調査の目的
「がんと仕事」に関するがん経験者と周囲の人の意識や行動、がんになっても働き続ける上での課題や示唆を明らかにすること。

◆調査期間
2022年1月20日（木）～2月19日（土）

◆調査の方法
がん経験者とがん経験者以外を対象とするインターネットによるアンケート調査
［調査協力32団体（企業、NPO法人、がん患者支援団体、患者会）及び実施主体のネットワークを通じたスノーボールサンプリング方式］

◆2つのアンケート調査

	がん経験者に対する調査	**がん経験者以外に対する調査**
調査対象	2020年以前にがんと診断され、 かつ診断時に働いていた方	がんと診断されたことのない方
有効回答	1,055件	2,111件
回答時間	約25分	約10分

◆調査実施主体
一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所と、法政大学 キャリアデザイン学部 松浦民恵が共同研究として実施。
なお、本調査は、法政大学大学院キャリアデザイン学研究科・研究倫理審査委員会で承認を得たうえで実施した。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅱ. 調査の概要　2.分析・解釈上の留意点

	がん経験者に対する調査	がん経験者以外に対する調査
サンプルの特性	協力団体経由も含め、スノーボールサンプリング方式で回答を収集していることから、回答サンプルが母集団を代表しているとはいえない。回答者の居住地域は一都三県が多く、がん経験者については「女性が多い」、「50代が多い」、「がんの種類は乳がんが多い」といったサンプル特性がある。がん治療と仕事の両立に関心の高い方からの回答が多い等、サンプルの偏りも想定される。また、勤務先の業種が「医療・福祉」である回答者のなかには、専門的知識を持つ医療従事者と推測されるサンプルも含まれる。示唆に富んだ調査結果ではあるが、だからこそこの点にもご留意いただいた上で、調査結果をご高覧いただきたい。	
設問の仕方	初めてがん（初発のがん）と診断された時のことを、回想して回答してもらうように依頼している。	身近ながん経験者（がんと診断された当時働いていた人）から、がんと診断されたことについて、報告や相談を受けた当時のことを、回想して回答してもらうように依頼している。
設問の分岐	・全員を対象とする設問が多いが、働き方に関する設問は、雇用者と自営・個人事業主で内容が異なるため、基本的には両者を分岐させて、それぞれに別の内容でたずねている。 ・また、上司や家族に関する設問については、初めてがんと診断された時に、そのことを上司や家族に報告した人を対象としている。 ・全体1,055件のうち、雇用者は948件である。	・これまで身近（家族・親族、友人・知人、勤務先の部下、部下以外の勤務先関係者、自分（医療従事者）の患者、自分（ピアサポーター等）が支援している相手等）にがん経験者がおり、その方ががんと診断された当時働いていて、なおかつその方から、がんと診断されたことについて報告や相談を受けた人に対する設問が大半を占めている。 ・全体2,111件（うち雇用者は1,827件）のうち、身近にがん経験者がいた人は1,938件、その方が当時働いていた人は1,560件、その方からがんと診断されたことについて報告や相談を受けた人は961件（うち雇用者は786件）である。
その他	四捨五入のため、単数回答でも%の合計が100.0%にならない場合や、選択肢を合体させた%がそれぞれの%を足し合わせた数値と合致しない場合がある。	

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅱ. 調査の概要　3.回答者の概要

(1)回答者の属性と当時の状況<がん経験者>

	調査数（n）	がん経験者の構成比（%）
性別	1,055	「男性」22.4、「女性」77.3、「答えたくない」0.3
年齢	1,055	「39歳以下」5.0、「40～49歳」25.6、「50～59歳」49.3、「60歳以上」20.1 平均年齢53.20歳
居住地域	1,055	「一都三県」53.3、「近畿」16.7、「東海」10.0、「それ以外」20.1
最終学歴	1,055	「高校」15.5、「専門学校・専修学校」10.2、「高専・短大」18.0、 「大学・大学院」54.5、「その他」0.2、「答えたくない」1.6
初めてがんと診断された時期	1,055	「2009年まで」16.4、「2010～2014年」21.7、「2015～2019年」49.4、 「2020年」12.5 平均的な時期は2014年
当時の就業形態	1,055	「正社員（役員を含む）・正職員」66.0、「契約社員」7.7、「嘱託社員」2.4、 「派遣社員」3.4、「パート・アルバイト」10.4、「自営・個人事業主」8.9、「その他」1.2
当時の勤務先規模	948	「99人以下」35.9、「100～999人」26.2、「1000人以上」36.2、 「わからない・覚えていない」1.8

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅱ. 調査の概要　3.回答者の概要

	調査数 （n）	がん経験者の構成比 （%）
当時の勤務先業種	948	「製造業」17.8、「情報通信業」6.3、「卸売・小売業」8.0、 「金融・保険・不動産・物品賃貸業」9.2、「医療・福祉」17.5、 「サービス業（教育・学習支援業を含む）」26.6、「公務」6.6、「それ以外」7.9
当時の職種	948	「経営・管理職」16.1、「専門・技術職」31.9、「事務職」33.2、「営業職」7.2、 「販売・サービス・生産工程・輸送・建設・運搬等」9.6、「それ以外」2.0
当時の役職	948	「代表・役員」4.6、「本部長・部長クラス」6.8、「課長クラス」12.1、 「課長代理・係長・主任クラス」22.3、「役職なし」54.2
当時のステージ	1,055	「ステージ0」5.7、「ステージI」31.0、「ステージII」28.5、「ステージIII以上」27.4、 「わからない」6.6、「答えたくない」0.8
当時のがんの種類 （複数回答）	1,055	「大腸がん」6.6、「胃がん」3.3、「肺がん」3.2、「乳がん」51.8、「前立腺がん」1.6、 「食道がん」1.1、「肝臓がん」0.5、「すい臓がん」1.6、「胆のうがん」0.0、 「甲状腺がん」1.6、「子宮がん」4.7、「子宮頸がん」3.8、「皮膚がん」0.6、 「咽頭がん」0.9、「脳腫瘍」0.7、「白血病」3.3、「悪性リンパ腫」5.0、 「その他のがん」12.5、「わからない」0.1、「答えたくない」0.4

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅱ. 調査の概要　3.回答者の概要

(2)回答者の属性と身近ながん経験者の属性<がん経験者以外>

	調査数 (n)	がん経験者以外の構成比 (%)
性別	2,111 (961)	「男性」45.9(34.9)、「女性」52. 5(63.4)、「その他」0.3(0.5)、 「答えたくない」1.2(1.2)
年齢	2,111 (961)	「39歳以下」25.0(16.0)、「40～49歳」29.0(29.7)、「50～59歳」34.9(39.4)、 「60歳以上」11.1(14.9) 平均年齢47.13(49.60)歳
居住地域	2,111 (961)	「一都三県」45.5(49.1)、「近畿」26.2(21.0)、「東海」8.7(8.9)、 「それ以外」19.6(20.9)
最終学歴	2,111 (961)	「中学」0.4(0.3)、「高校」13.7(11.9)、「専門学校・専修学校」5.9(6.6)、 「高専・短大」10.5(12.8)、「大学・大学院」68.3(67.5)、「その他」0.3(0.4)、 「答えたくない」0.9(0.5)
現在の就業形態	2,111 (961)	「正社員(役員を含む)・正職員」75.9(70.1)、「契約社員」3.3(3.1)、 「嘱託社員」2.3(2.9)、「派遣社員」1.1(1.4)、「パート・アルバイト」3.9(4.3)、 「自営・個人事業主」10.3(14.6)、「その他」0.7(0.7)、「働いていない」2.4(2.9)

注：(　)は多くの設問で対象となっている、身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けた人に関する構成比。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅱ. 調査の概要　3.回答者の概要

	調査数 （n）	がん経験者以外の構成比 （%）
現在の勤務先規模	1,827 （786）	「99人以下」16.1（17.8）、「100～999人」22.6（24.0）、 「1000人以上」59.3（56.1）、「わからない」2.0（2.0）
現在の勤務先業種	1,827 （786）	「製造業」41.4（35.9）、「情報通信業」8.5（6.9）、「卸売・小売業」6.5（6.2）、 「金融・保険・不動産・物品賃貸業」7.8（9.7）、「医療・福祉」8.0（11.6）、「サービス業（教育・学習支援業を含む）」20.4（22.5）、「公務」2.4（2.3）、「それ以外」4.9（5.0）
現在の職種	1,827 （786）	「経営・管理職」21.0（22.3）、「専門・技術職」32.2（29.8）、「事務職」30.7（32.4）、 「営業職」8.9（8.9）、「販売・サービス・生産工程・輸送・建設・運搬等」7.3（6.6）
現在の役職	1,827 （786）	「代表・役員」4.6（6.7）、「本部長・部長クラス」8.5（10.3）、「課長クラス」14.8（15.1）、 「課長代理・係長・主任クラス」24.4（21.5）、「役職なし」47.7（46.3）
当時の身近ながん経験者の属性	1,560 （961）	「配偶者・パートナー」4.7（7.6）、「自分の子ども」0.4（0.7）、「自分の親」14.7（23.8）、 「配偶者・パートナーの親」2.1（3.3）、「兄弟姉妹」3.3（5.3）、 「配偶者・パートナーの兄弟姉妹」0.4（0.7）、「それ以外の親族・親戚」2.8（4.5）、 「友人・知人」15.1（24.6）、「勤務先の上司」3.0（4.9）、「勤務先の同僚」7.7（12.5）、 「勤務先の部下」3.7（5.9）、「上司・同僚・部下以外の勤務先の人」1.9（3.1）、 「自分（医療従事者）の患者」1.3（2.1）、「自分（ピアサポーター等）が支援している相手」0.2（0.3）、「その他」0.4（0.6）、「報告や相談を受けたことがない」38.4（ー）

注：（　）は多くの設問で対象となっている、身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けた人に関する構成比。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

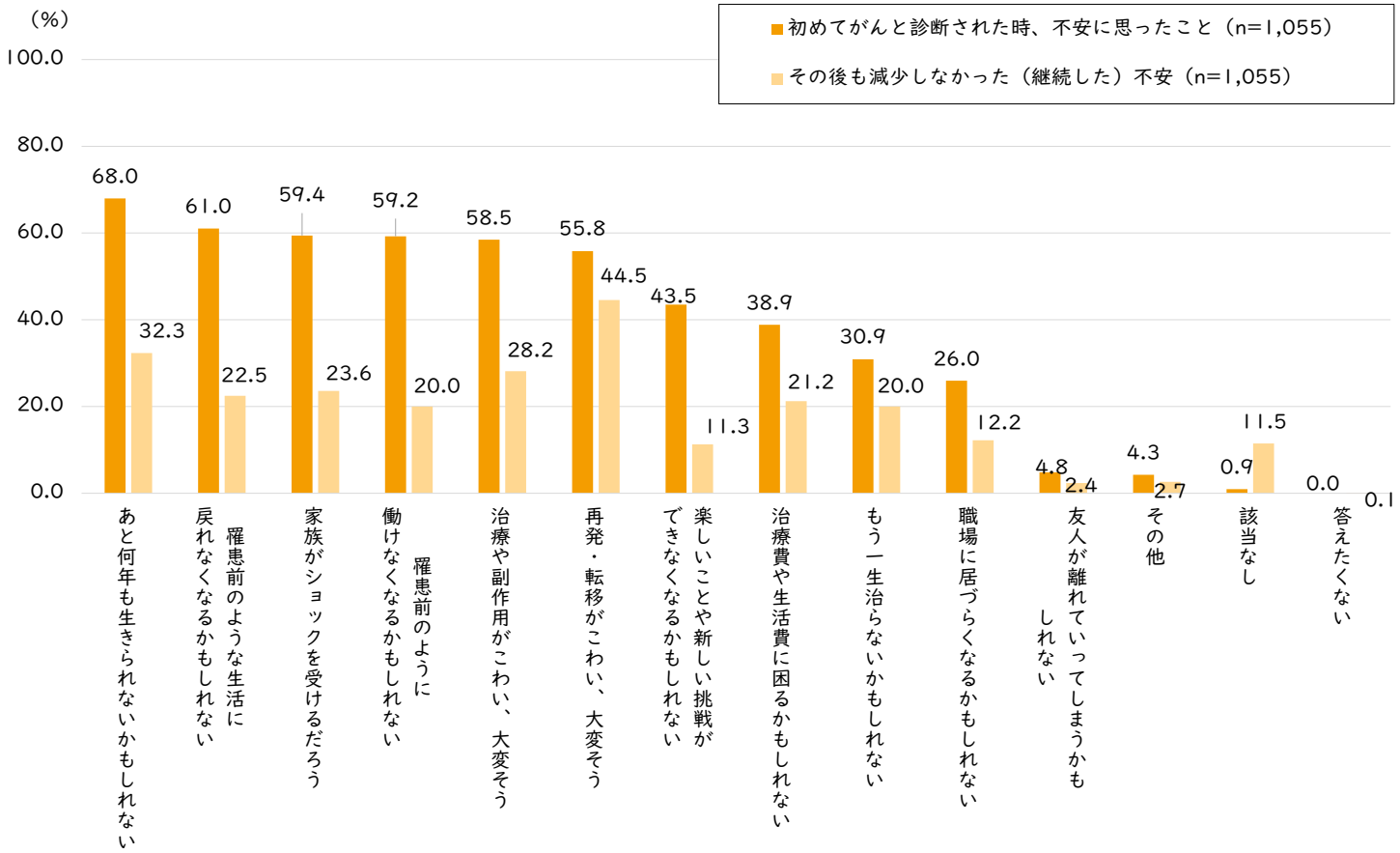
Ⅲ. 調査結果のポイント　1.がんに対する不安・印象と情報経路

(1)がん経験者のがんに対する不安

- がん経験者が、初めてがんと診断された時に不安に思ったことは、「あと何年も生きられないかもしれない」(68.0%)、「罹患前のような生活に戻れなくなるかもしれない」(61.0%)、「家族がショックを受けるだろう」(59.4%)、「罹患前のように働けなくなるかもしれない」(59.2%)、「治療や副作用がこわい、大変そう」(58.5%) が上位5位だが、これらの不安はその後大きく(30~40ポイント程度)減少している。
- 一方、「再発・転移がこわい、大変そう」(55.8%)や「もう一生治らないかもしれない」(30.9%)といった不安は、他に比べると、その後の減少幅が小さい(10ポイント強)。

がん経験者のがんに対する不安については、初めてがんと診断された当初に比べれば、時間と共に減少する傾向がみられる。

初めてがんと診断された時不安に思ったこと、その後も減少しなかった(継続した)不安<がん経験者>



注1：複数回答。「初めてがんと診断された時、不安に思ったこと」の回答率が高い順に項目を並べている。
注2：設問では、「そのうち時間と共に軽減された不安」についてたずねているが、「該当なし」と「答えたくない」以外の項目については、その回答率を不安とした回答率から差し引いて逆転させ、「その後も減少しなかった（継続した）不安」として表示している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

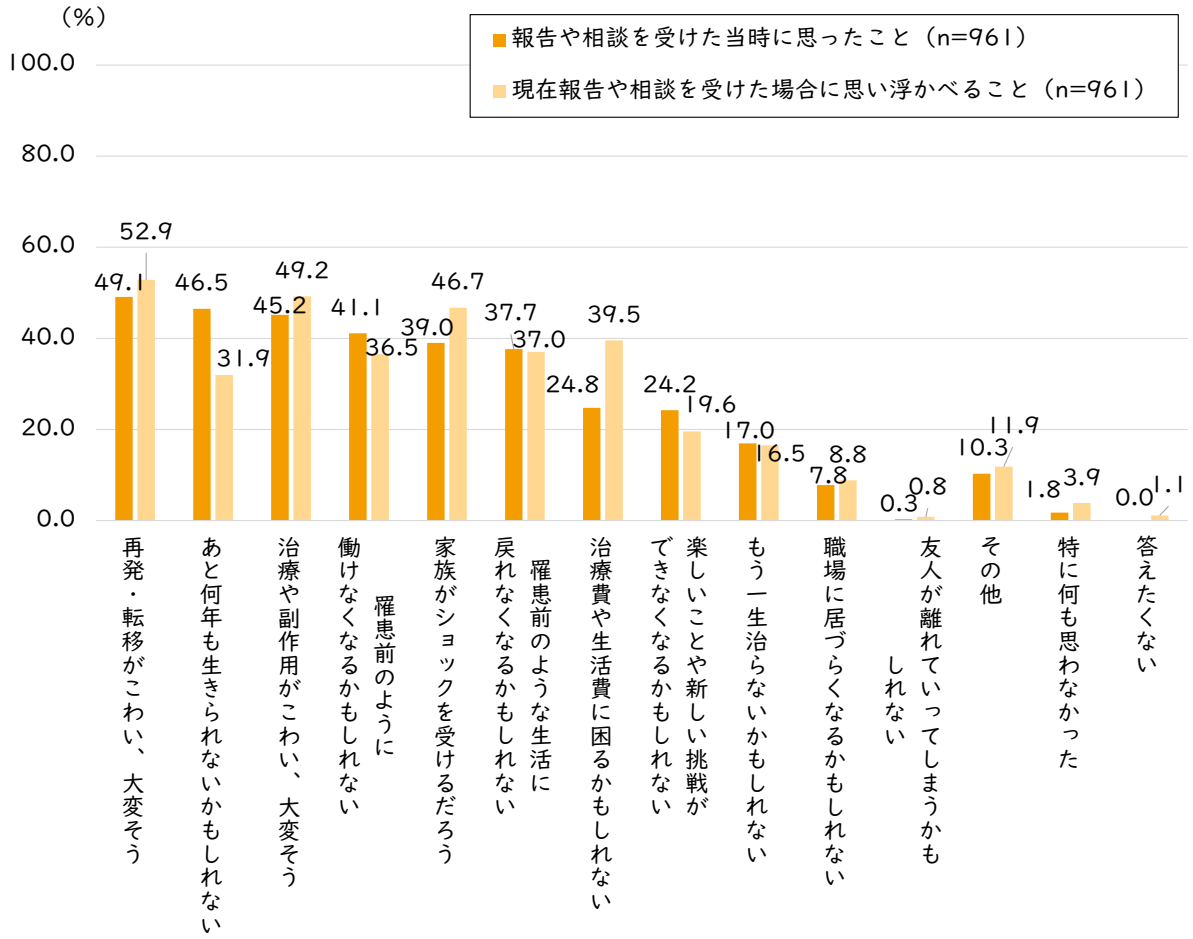
Ⅲ. 調査結果のポイント　1.がんに対する不安・印象と情報経路

(2)がん経験者以外のがんに対する印象

- がん経験者以外が、身近ながん経験者からがんについて報告や相談を受けた当時に思ったこととしては、「再発・転移がこわい、大変そう」(49.1%)、「あと何年も生きられないかもしれない」(46.5%)、「治療や副作用がこわい、大変そう」(45.2%)、「罹患前のように働けなくなるかもしれない」(41.1%)、「家族がショックを受けるだろう」(39.0%)が上位5位。
- がん経験者本人に比べれば全般に回答率が低いが、上位5位に「罹患前のような生活に戻れなくなるかもしれない」のかわりに「再発・転移がこわい、大変そう」が入っている以外は、がん経験者本人と同じ項目が並んでいる。なお、当時と現在で、がん経験者ほどには大きな変化がみられない。

がんに対する印象の内容は、がん経験者以外もがん経験者と類似。
ただし、がん経験者以外については当時と現在で大きな印象の変化はみられない。

過去にがんについて報告や相談を受けた当時に思ったこと、現在報告や相談を受けた場合に思い浮かべること<がん経験者以外>



注1：「報告や相談を受けた当時に思ったこと」は、身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けたことがある人に対する設問。
注2：複数回答。「報告や相談を受けた当時に思ったこと」の回答率が高い順に項目を並べている。
注3：「現在報告や相談を受けた場合に思い浮かべること」は全員に対する設問だが、比較のため、身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けたことがある人に限定して集計。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　1.がんに対する不安・印象と情報経路

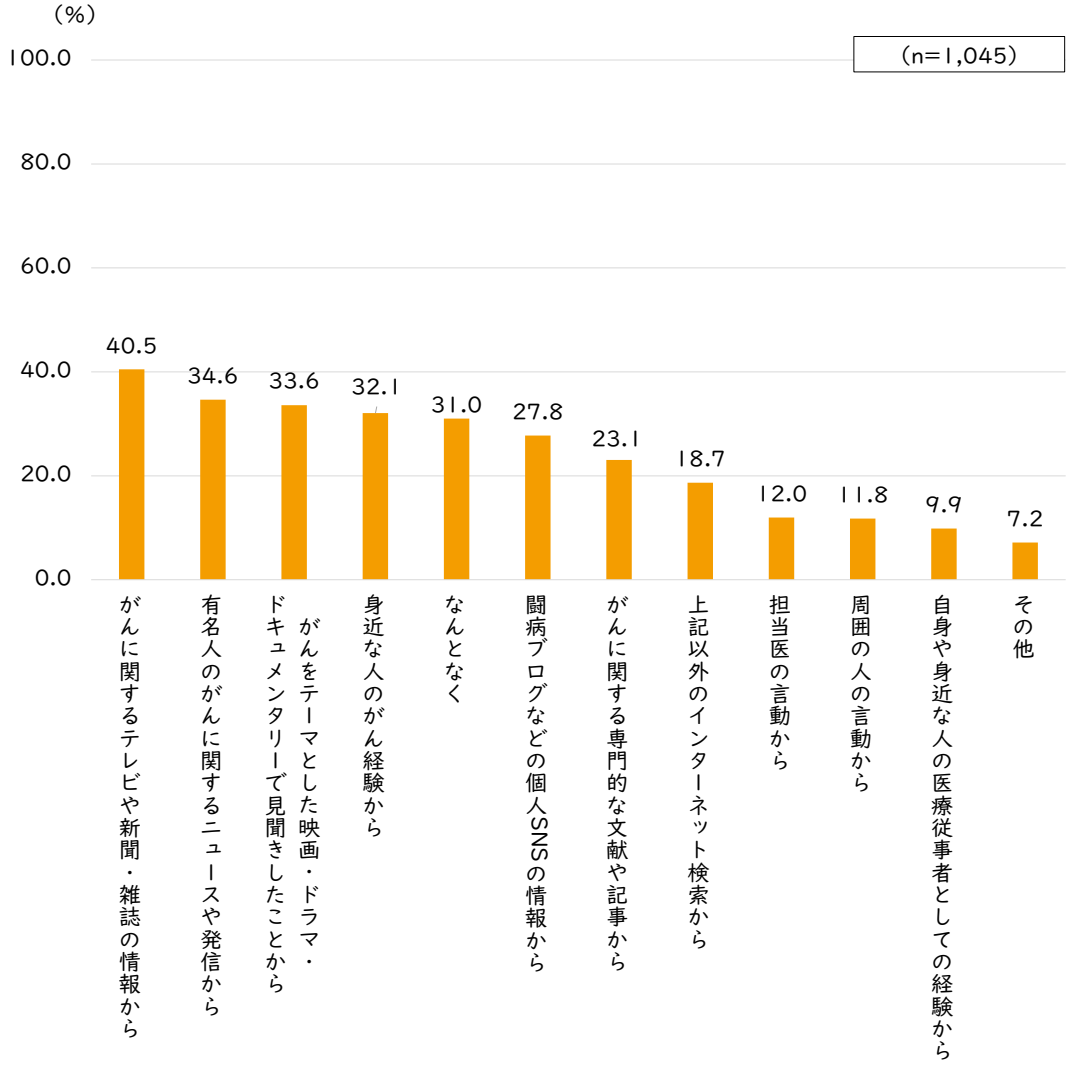
(3)がん経験者ががんについて不安に思った理由

- がん経験者が、初めてがんと診断された時にがんについて不安に思った理由としては、「がんに関するテレビや新聞・雑誌の情報から」(40.5%)、「有名人のがんに関するニュースや発信から」(34.6%)、「がんをテーマとした映画・ドラマ・ドキュメンタリーで見聞きしたことから」(33.6%)が上位3位。
- 理由別に不安の内容みると、「がんに関するテレビや新聞・雑誌の情報から」、「有名人のがんに関するニュースや発信から」、「がんをテーマとした映画・ドラマ・ドキュメンタリーで見聞きしたことから」、「闘病ブログなど個人SNSの情報から」、「上記以外のインターネット検索から」、「周囲の人の言動から」で回答率が高い項目が特に多くなっている。
- 「担当医の言動から」では、「楽しいことや新しいことに挑戦できなくなるかもしれない」(59.2%)や「もう一生治らないかもしれない」(43.2%)が高い。

がんに対する不安は、特定の媒体や周囲の人の言動に起因する面が大きい。
特定の情報経路の情報が、がんに対する不安を固定化・増幅させている懸念がある。

注1：初めてがんと診断された時不安に思ったことについて「該当なし」と回答した以外の人に対する設問。
注2：複数回答。「初めてがんと診断された時、不安に思った理由」の回答率が高い順に項目を並べている。

初めてがんと診断された時、がんについて不安に思った理由<がん経験者>



(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　1.がんに対する不安・印象と情報経路

初めてがんと診断された時、がんについて不安に思った理由別不安の内容<がん経験者>

（%）

	調査数(n)	計	あと何年も生きられないかもしれない	罹患前のような生活に戻れなくなるかもしれない	家族がショックを受けるだろう	罹患前のように働けなくなるかもしれない	治療や副作用がこわい、大変そう	再発・転移がこわい、大変そう	楽しいことや新しい挑戦ができなくなるかもしれない	治療費や生活費に困るかもしれない	もう一生治らないかもしれない	職場に居づらくなるかもしれない	友人が離れていってしまうかもしれない	その他	該当なし	平均値(項目)
計	1,055	100.0	68.0	61.0	59.4	59.2	58.5	55.8	43.5	38.9	30.9	26.0	4.8	4.3	0.9	5.06
がんに関するテレビや新聞・雑誌の情報から	423	100.0	76.6	74.0	70.0	69.3	72.3	66.2	56.7	46.1	37.1	31.9	7.3	2.6	0.0	6.08
有名人のがんに関するニュースや発信から	362	100.0	77.3	74.3	68.5	68.5	73.5	68.5	55.8	45.9	42.0	30.1	7.7	3.6	0.0	6.12
がんをテーマとした映画・ドラマ・ドキュメンタリーで見聞きしたことから	351	100.0	81.2	74.6	68.7	69.8	74.1	63.2	57.5	45.3	40.2	32.5	6.6	5.4	0.0	6.14
身近な人のがん経験から	335	100.0	69.6	65.4	66.3	63.9	65.1	60.9	48.7	40.3	36.1	29.3	6.0	3.0	0.0	5.51
なんとなく	324	100.0	71.9	65.4	61.7	57.7	60.8	56.2	47.2	36.7	35.5	24.7	6.2	5.9	0.0	5.24
闘病ブログなどの個人SNSの情報から	290	100.0	78.6	76.2	67.2	71.4	76.6	72.8	54.8	48.6	44.5	32.8	5.5	3.4	0.0	6.29
がんに関する専門的な文献や記事から	241	100.0	79.7	69.3	64.7	67.2	64.7	68.0	56.4	44.0	39.4	28.6	3.7	3.3	0.0	5.86
上記以外のインターネット検索から	195	100.0	75.9	78.5	70.3	78.5	73.8	66.7	59.5	49.2	42.6	41.0	5.1	5.1	0.0	6.41
担当医の言動から	125	100.0	71.2	64.8	59.2	64.8	60.0	57.6	59.2	45.6	43.2	34.4	8.8	7.2	0.0	5.69
周囲の人の言動から	123	100.0	75.6	75.6	69.9	77.2	71.5	65.9	50.4	51.2	47.2	40.7	11.4	5.7	0.0	6.37
自身や身近な人の医療従事者としての経験から	103	100.0	68.9	64.1	71.8	68.0	58.3	67.0	52.4	41.7	35.9	29.1	5.8	5.8	0.0	5.63
その他	75	100.0	61.3	40.0	53.3	52.0	44.0	38.7	33.3	30.7	21.3	32.0	5.3	10.7	0.0	4.12

注1：表側・表頭ともに複数回答。「初めてがんと診断された時、不安に思ったこと」の回答率が高い順に項目を並べている。
注2：表頭の「答えたくない」は回答ゼロだったため掲載していない。平均値は不安に関する項目（「その他」を除く）の選択数の平均値。
注3：囲みは計と比べて10ポイント以上高い項目。

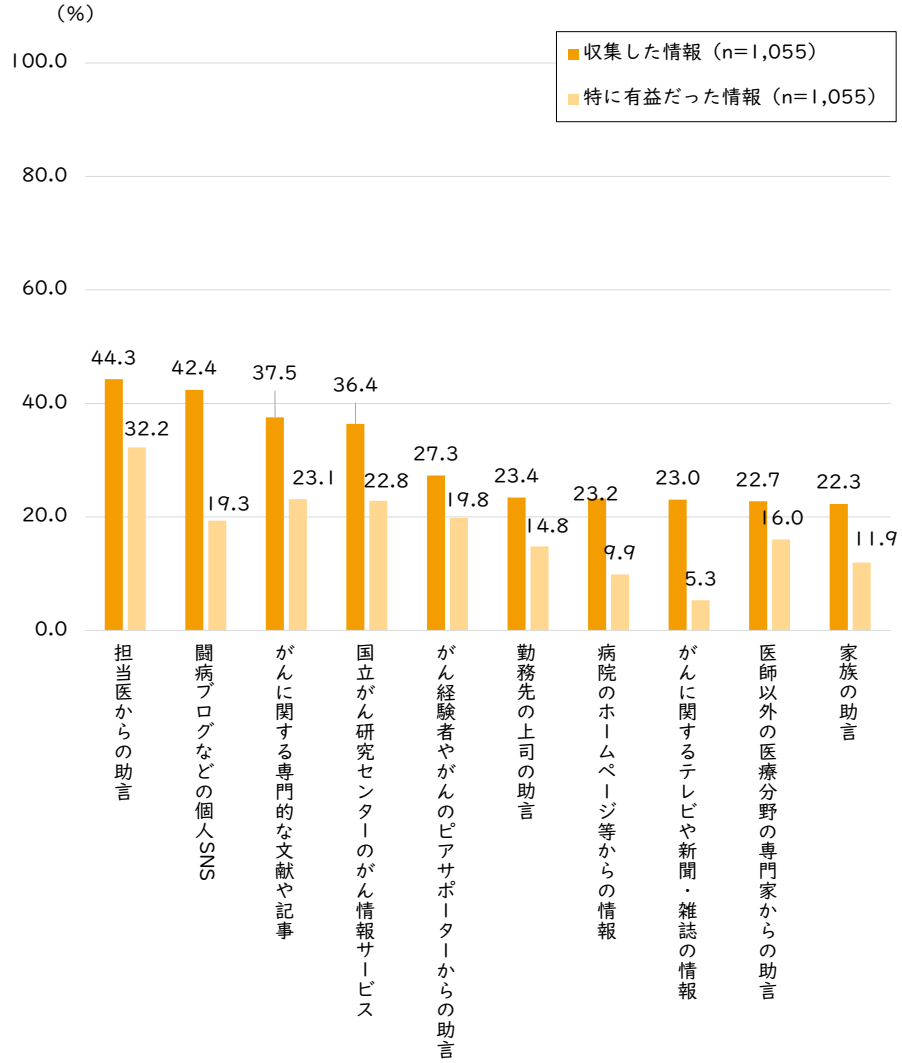
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　1.がんに対する不安・印象と情報経路

(4)がんと仕事に関する収集情報と有益だった情報

- がん経験者の収集情報は「担当医からの助言」(44.3%)、「闘病ブログなどの個人のSNS」(42.4%)、「がんに関する専門的な文献や記事」(37.5%)が上位3位だが、特に有益だった情報としては「担当医からの助言」(32.2%)、「がんに関する専門的な文献や記事」(23.1%)、「国立がん研究センターのがん情報サービス」(22.8%)が上位3位。
- なお、図表中には収集情報の上位10項目までしか掲載していないが、11位以下の項目は、「患者会からの情報」(21.4 %)、「それ以外のインターネット検索」(20.9 %)、「友人・知人の助言」(19.8 %)、「キャンサーネットジャパンからの情報」(15.5 %)、「有名人のがんに関するニュースや発信」(13.6 %)、「学会からの情報」(9.4 %)、「担当医以外の医師からの助言(セカンドオピニオン等)」(9.3 %)、「勤務先の人事からの情報・助言」(9.3 %)、「勤務先の同僚や部下の助言」(8.8 %)、「日々の医療情報(自身や身近な人が医療従事者)」(8.0 %)、「がんをテーマとした映画・ドラマ・ドキュメンタリー」(6.7 %)、「勤務先の産業医療スタッフ(産業医等)からの情報・助言」(6.4 %)、「医療分野以外の専門家(就労支援・生活設計等)の助言」(4.3 %)、「勤務先の相談窓口(健康保険組合を含む)の助言」(0.9 %)となっている。

がんと診断されてから収集した情報、そのうち特に有益だった情報<がん経験者>



注：複数回答。「がんと診断されてから収集した情報」の回答率が高い順に、上位10項目を掲載している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　1.がんに対する不安・印象と情報経路

- がん経験者以外の収集情報については、「がんに関する専門的な文献や記事」（28.8%）、「がんに関するテレビや新聞・雑誌の情報」（22.9%）、「それ以外のインターネット検索」（19.9%）が上位3位。
- 特に有益だった情報としては「がんに関する専門的な文献や記事」（18.2%）が最も高く、次に「担当医からの助言」（12.4%）、「国立がん研究センターのがん情報サービス」（11.6%）が続いている。

「がんに関する専門的な文献や記事」は、がん経験者、がん経験者以外ともに、収集したとする割合、特に有益だったとする割合の双方が、比較的高くなっている。
「国立がん研究センターのがん情報サービス」も有効に活用されている様子がうかがえる。
一方、「担当医以外の医師からの助言（セカンドオピニオン等）」による情報収集は、がん経験者の1割弱にとどまっている。

がんについて報告や相談を受けてから収集した情報、そのうち特に有益だった情報<がん経験者以外>

注1：身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けたことがある人に対する設問。
注2：複数回答。「がんについて報告や相談を受けてから収集した情報」の回答率が高い順に、上位10項目を掲載している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　1.がんに対する不安・印象と情報経路

(5)身近にがん経験者がいたことによる影響

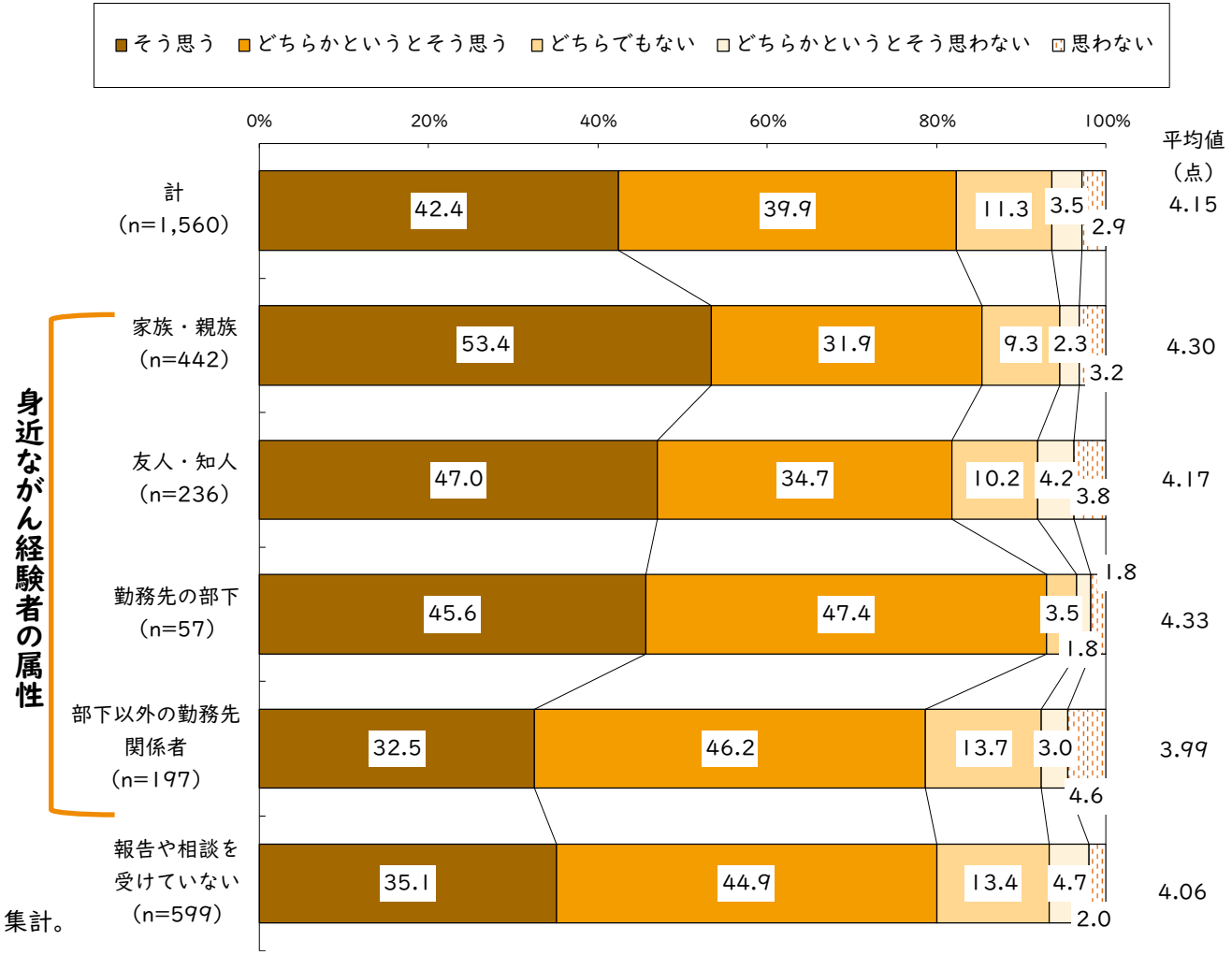
- 身近にがん経験者（当時働いていた人）がいた人について、身近にがん経験者がいたことが、がんに対する印象や理解に重大な影響を与えたかをたずねた結果をみると、あわせて8割強が影響を与えたと回答している。
- 身近ながん経験者が「勤務先の部下」であった場合、つまり当時の上司の回答をみると、影響を与えたとする割合は9割を超えている。

身近にがん経験者がいたことによる、治療と仕事の両立に対するイメージの変化<がん経験者以外>

（%）

		調査数（n）	計	ポジティブに変化計	どちらともいえない（「答えたくない」を含む）	ネガディブに変化計	特に変化しなかった	平均値（点）
計		1,560	100.0	36.5	32.1	13.7	17.8	3.30
身近にがん経験者がいたことによる、がんに対する印象や理解への重大な影響の有無別	影響あり計	1,284	100.0	41.0	31.5	14.9	12.6	3.34
	どちらでもない	176	100.0	15.9	43.8	8.5	31.8	3.08
	影響なし計	100	100.0	15.0	19.0	7.0	59.0	3.09

身近にがん経験者がいたことは、がんに対する印象や理解に重大な影響を与えたと思うか<がん経験者以外>



注1：身近ながん経験者がいた人に対する設問。身近ながん経験者が、当時働いていた人に限定して集計。
注2：それ以外の身近ながん経験者は29件と、サンプル数が限られるため掲載していない。
注3：平均値は「そう思う」を5点、「どちらかというとそう思う」を4点、「どちらでもない」を3点、「どちらかというとそう思わない」を2点、「思わない」を1点として得点化。

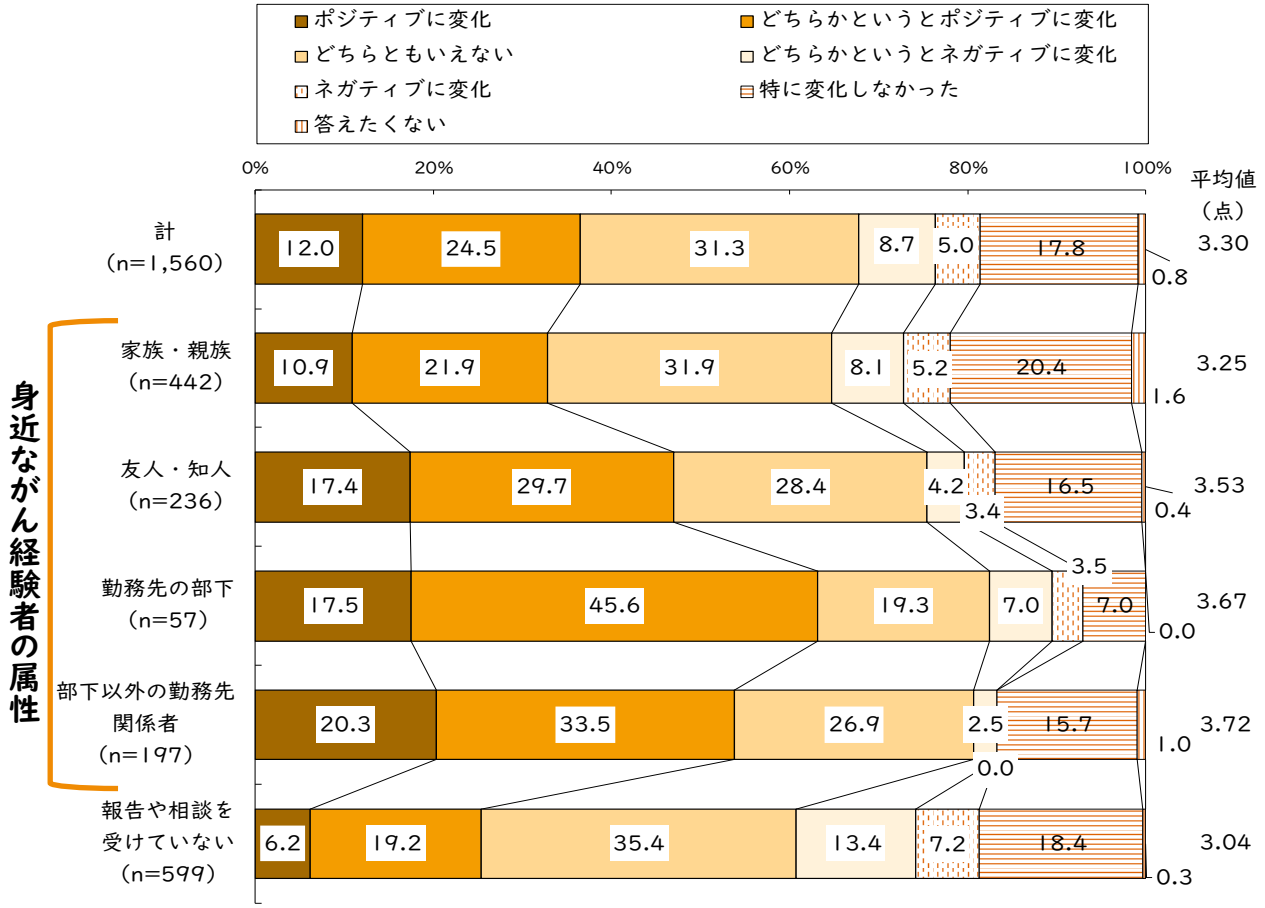
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　1.がんに対する不安・印象と情報経路

- 身近にがん経験者がいたことで、がんの治療と仕事の両立に対するイメージがポジティブに変化したとする割合はあわせて36.5%、ネガティブに変化したとする割合は13.7%と、ポジティブへの変化傾向がみてとれ、特に上司はあわせて6割強がポジティブに変化したと回答している。
- 一方、身近ながん経験者から報告や相談を受けていない場合は、ポジティブに変化があわせて25.4%にとどまる。
- 身近にがん経験者がいたことによる、がんに対する印象や理解に重大な影響の有無別にこの結果をみると（P19）、「影響あり計」で、がんの治療と仕事の両立のイメージがポジティブに変化する傾向がより顕著になる。逆に、「影響なし計」では、「特に変化しなかった」が59.0%を占める。

身近ながん経験者の存在は、当時の上司も含め、がんの治療と仕事の両立のイメージをポジティブに変化させる効果がみてとれる。ただし、この効果は、身近ながん経験者から報告や相談を受けなかった場合や、身近ながん経験者から影響を受けなかった場合には小さくなる。

身近にがん経験者がいたことによる、治療と仕事の両立に対するイメージの変化<がん経験者以外>



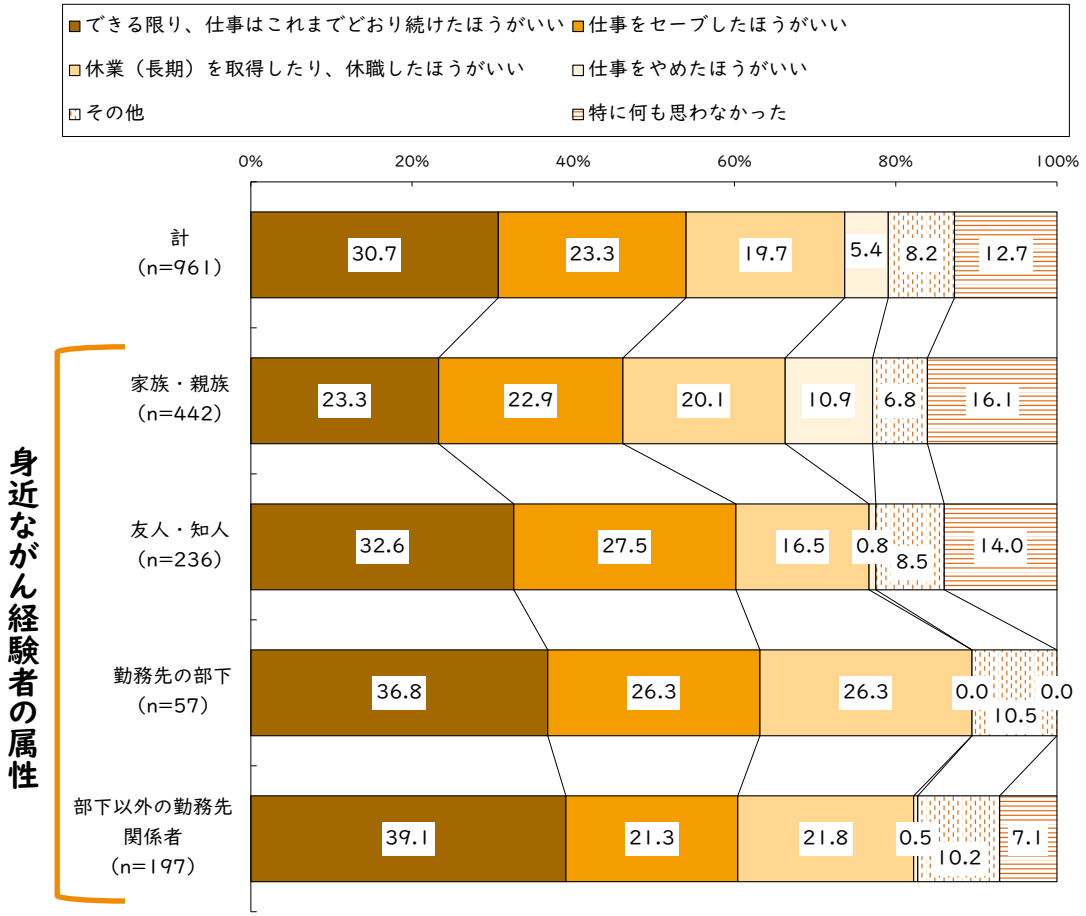
注1：身近ながん経験者がいた人に対する設問。身近ながん経験者が、当時働いていた人に限定して集計。
注2：それ以外の身近ながん経験者は29件と、サンプル数が限られるため掲載していない。
注3：平均値は「ポジティブに変化」を5点、「どちらかというとポジティブに変化」を4点、「どちらともいえない」「特に変化しなかった」「答えたくない」を3点、「どちらかというとネガティブに変化」を2点、「ネガティブに変化」を1点として得点化。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

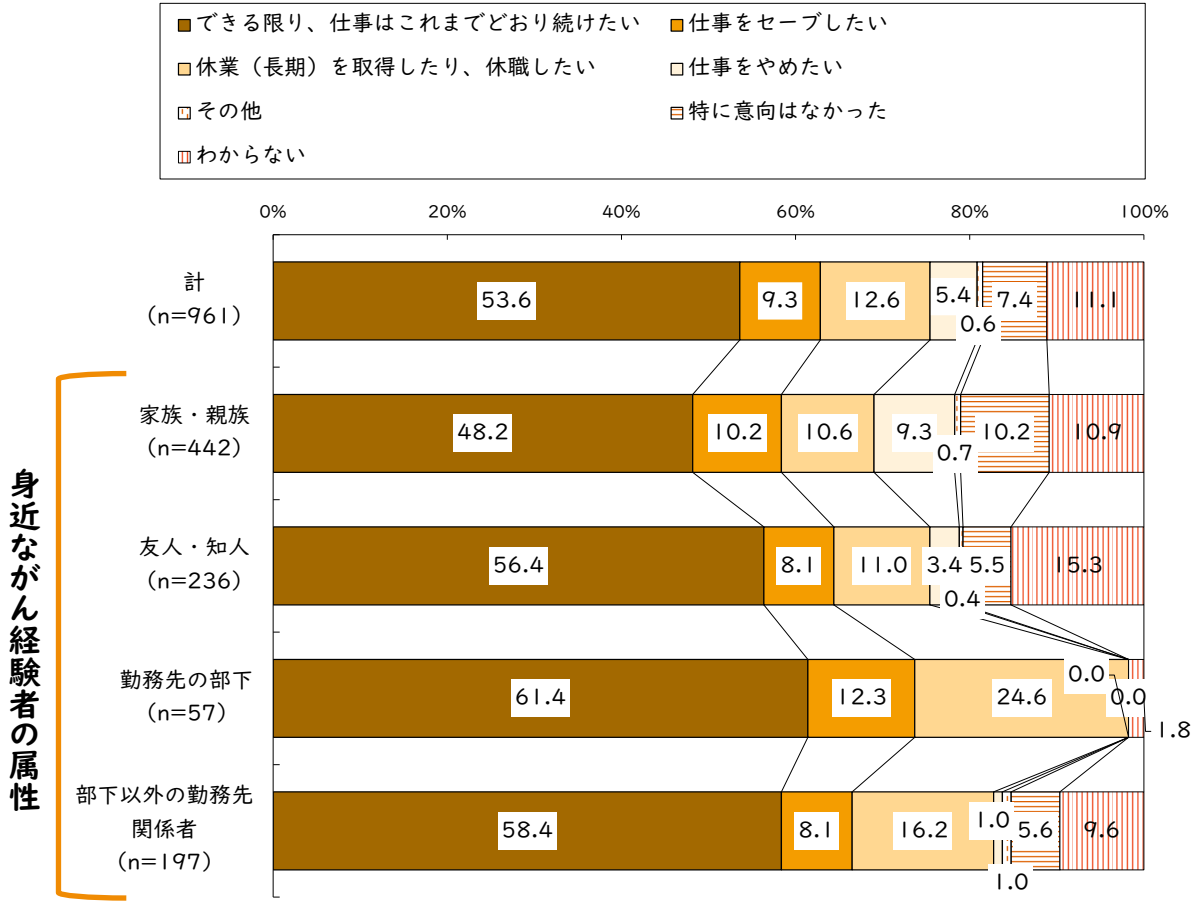
Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

(1)働き方に関する周囲の考え方と本人への影響

がんと診断されたことについて報告や相談を受けた時に、その方の仕事について最初に思ったこと<がん経験者以外>



がんと診断されたことについて報告や相談を受けた時の、その方の意向<がん経験者以外>



注1：身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けたことがある人に対する設問。
注2：それ以外の身近ながん経験者は29件と、サンプル数が限られるため掲載していない。

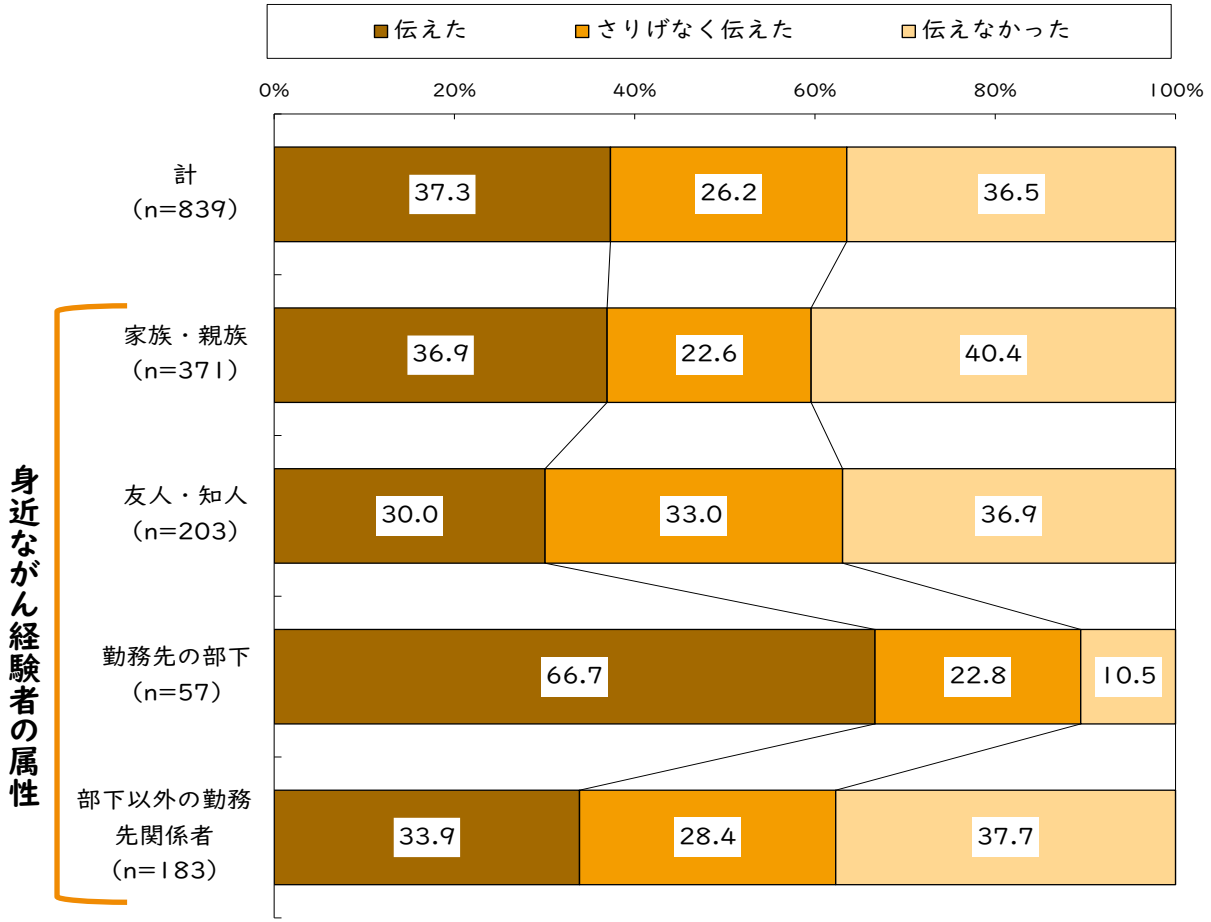
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

- がん経験者以外が、がんと診断されたことについて報告や相談を受けた時に、その方の仕事について思ったことは「できる限り、仕事はこれまでどおり続けたほうがいい」が30.7%、「仕事をセーブしたほうがいい」が23.3% 、「休業（長期）を取得したり、休職したほうがいい」が19.7%である。身近ながん経験者が「家族・親族」の場合は「これまでどおり続けたほうがいい」が23.3%と特に低い。
- 一方、その方本人の意向は「できる限り、仕事はこれまでどおり続けたい」が53.6%と過半数を占めている（P21）。
- がん経験者以外が、仕事について思ったことを本人に伝えたかどうかについては、「伝えた」が37.3%、「伝えなかった」が36.5%、「さりげなく伝えた」が26.2%と拮抗している。身近ながん経験者が勤務先の部下である場合は、「伝えた」が66.7%にのぼる。

がん経験者本人に比べて、周囲（特に家族・親族）のほうが、仕事の継続に慎重な考えを持っている。こうした考えについて、「さりげなく伝えた」も含めると、周囲の人の過半数ががん経験者本人に伝えており、特に上司は大部分が何らかの形で伝えている。

がんと診断されたことについて報告や相談を受けた時に、その方の仕事について思ったことを伝えたか<がん経験者以外>



注1：身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けたことがある人のうち、その時に「特に何も思わなかった」と回答した以外の人に対する設問。
注2：それ以外の身近ながん経験者は29件と、サンプル数が限られるため掲載していない。

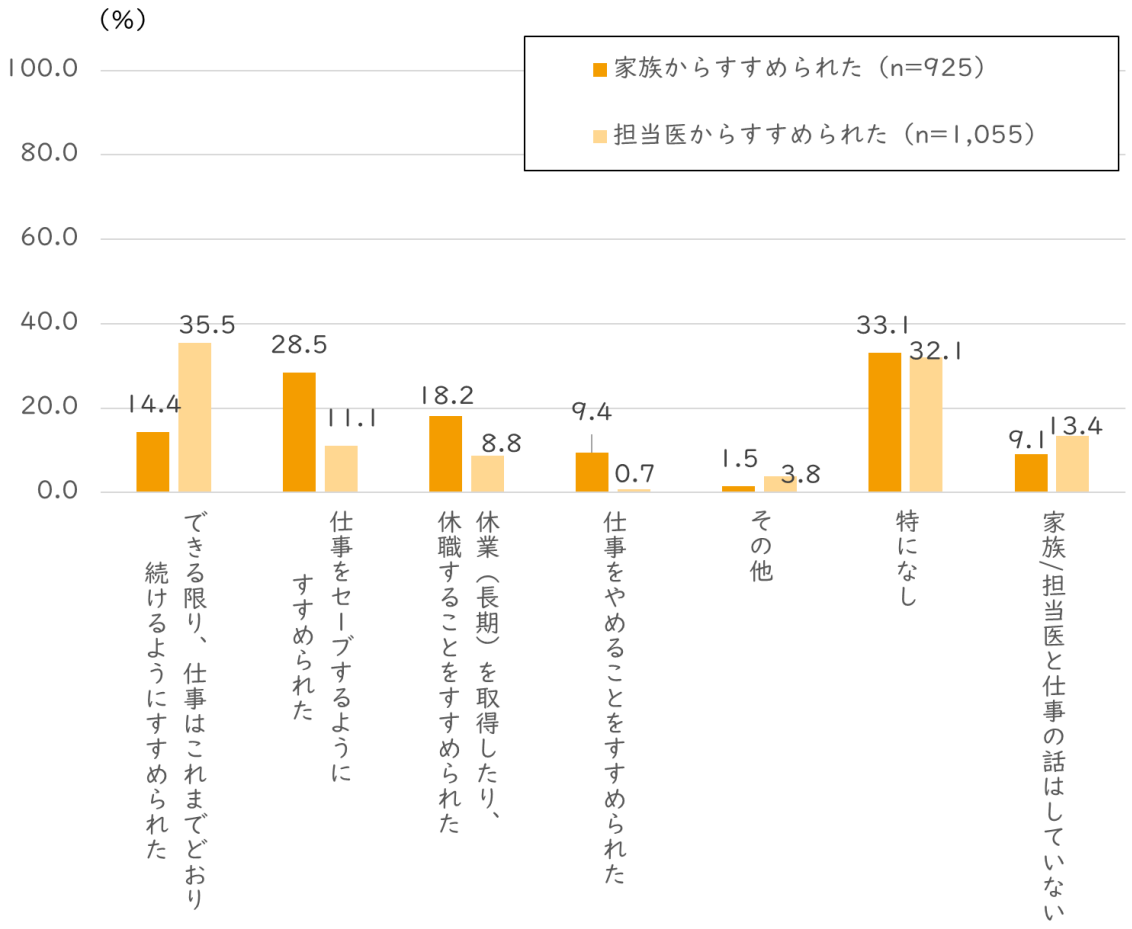
(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

- がん経験者に対する調査結果をみても、家族からすすめられたこととして、「仕事をセーブするようにすすめられた」（28.5%）が「特になし」（33.1%）に続いて高く、「休業（長期）を取得したり、休職することをすすめられた」も18.2%と2割弱にのぼる。
- 一方、担当医からすすめられたこととしては、「できる限り、仕事はこれまでどおり続けるようにすすめられた」が35.5%と最も高く、次に「特になし」（32.1%）が続いている。
- なお、割合は低いものの、「家族と仕事の話はしていない」、「担当医と仕事の話はしていない」もそれぞれ9.1%、13.4%と1割前後みられる。

家族については、がん経験者を特に心配するあまり、仕事に対してより慎重な姿勢をとり、仕事をセーブするようにすすめている可能性がある。
一方、担当医については、家族に比べれば仕事の継続に肯定的な考えを持っている傾向がみてとれる。
仕事の継続について、専門的な見地から担当医のアドバイスを求めることも有益だと考えられるが、「担当医と仕事の話をしていない」とする割合が1割強みられる。

初めてがんと診断された時、仕事に関して周囲からすすめられたこと<がん経験者>



注1：「家族からすすめられた」はがんのことを家族に報告した人に対する設問。
注2：複数回答。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

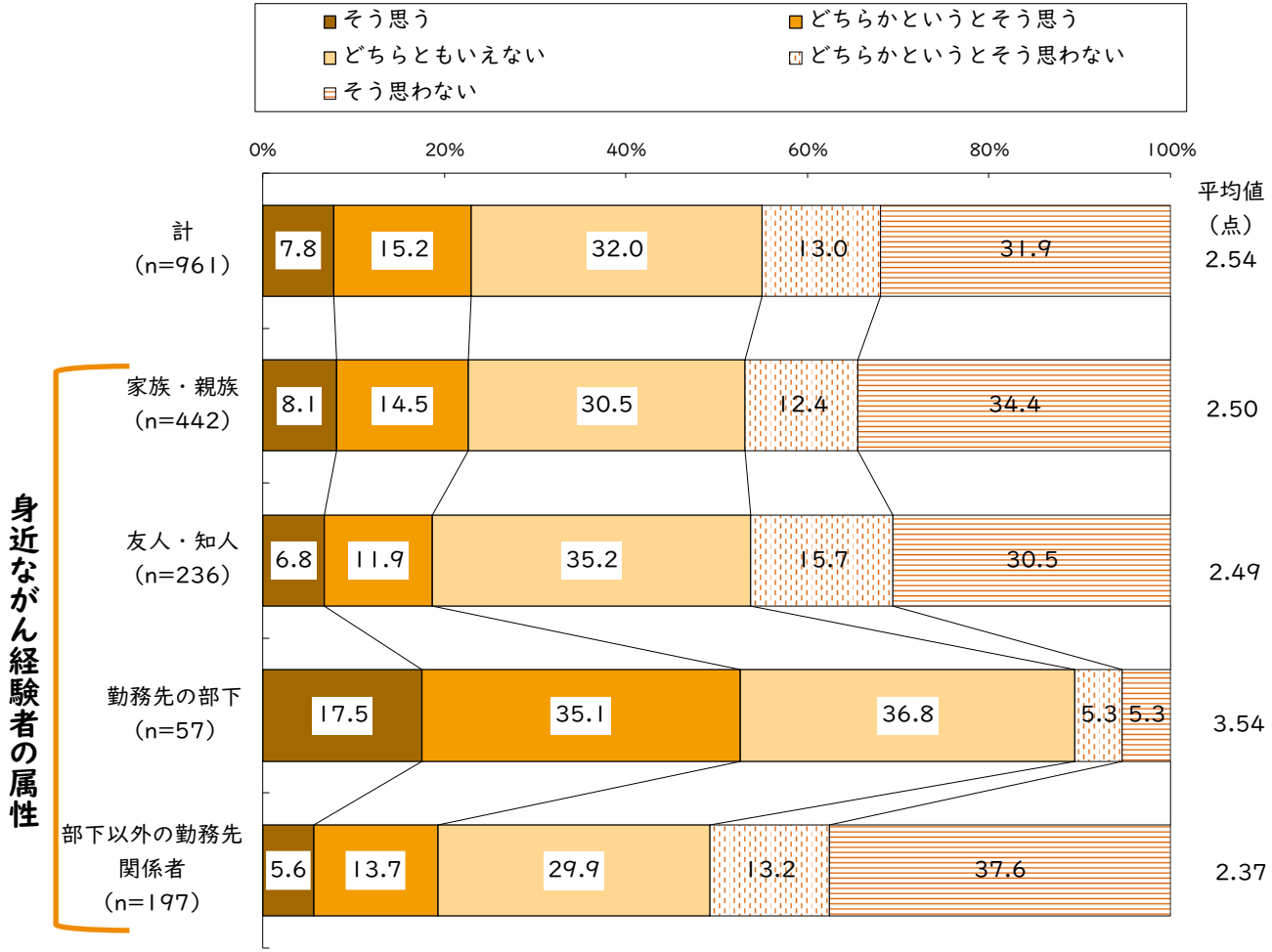
Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

- がんについての報告や相談に対する自分（がん経験者以外）の言動が、報告や相談をした本人の仕事についての意思決定に、何らかの影響を与えたかをたずねた結果をみると、「そう思わない」があわせて45.0%、「どちらともいえない」が32.0%、「そう思う」があわせて23.0%となっている。
- 一方、身近ながん経験者が「勤務先の部下」である場合は、「そう思う」があわせて52.6%と過半数を占める。

がん経験者以外の多くは、自分の言動が、がん経験者の仕事に関する意思決定にさほど大きな影響を及ぼしたとは考えていない。ただ、これはがん経験者以外に対する調査結果であることから、がん経験者がその言動をどう受け取ったかまではわからない。
身近ながん経験者が「勤務先の部下」である場合は、影響があったとする割合が過半数を占め、がんと診断された部下に対する、上司の影響力の大きさが垣間見える結果となっている。なお、前述（P21）のとおり、上司と部下本人で仕事に対する意向に異なる傾向がみられていたことも、気にかかるところである。

注1：身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けたことがある人に対する設問。
注2：それ以外の身近ながん経験者は29件と、サンプル数が限られるため掲載していない。

がんについての報告や相談に対する自分の言動が、その方の仕事についての意思決定に何らかの影響を与えたと思うか
＜がん経験者以外＞



(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

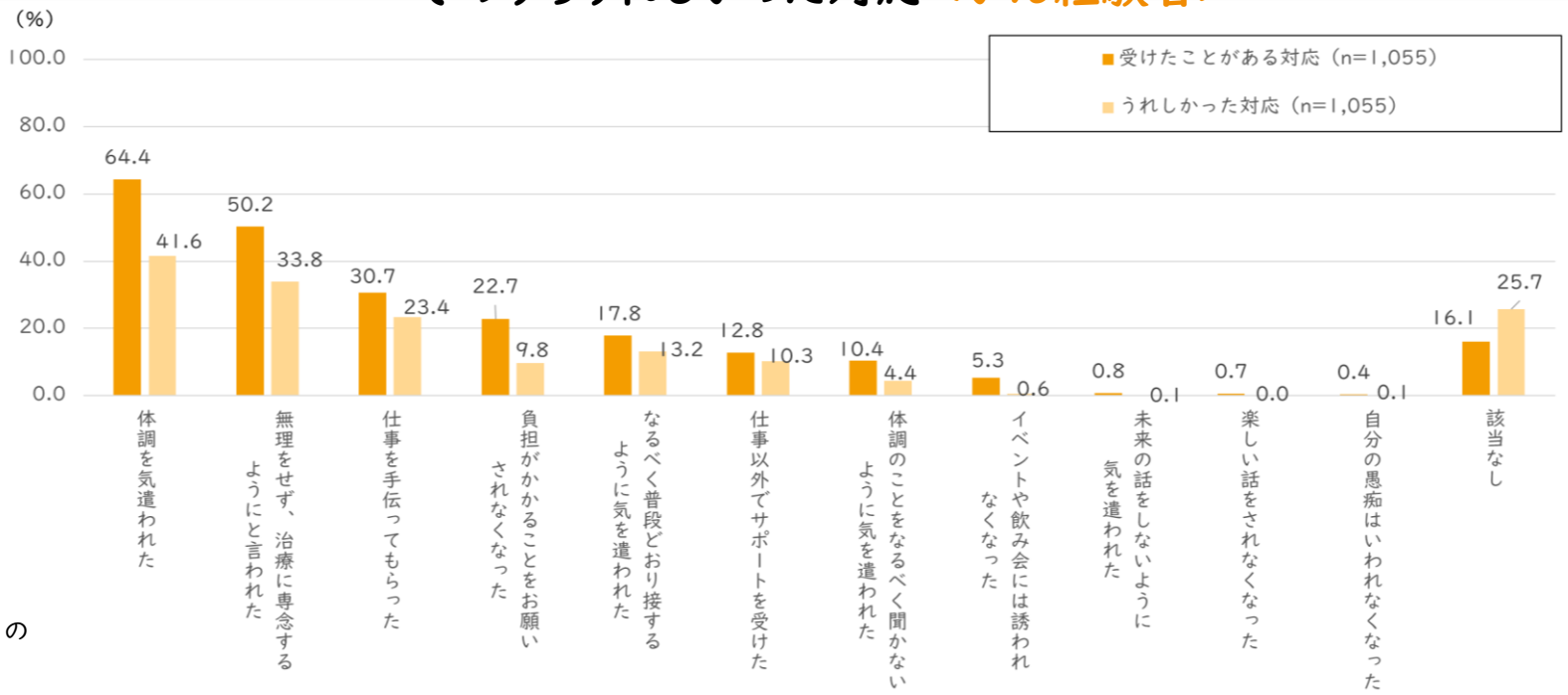
Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

(2)がん経験者が受けた対応とうれしかった対応

- がん経験者に対して、初めてのがんの治療と仕事の両立において、職場で受けたことがある対応をたずねた結果をみると、「体調を気遣われた」(64.4%)、「無理をせず、治療に専念するようにと言われた」(50.2%)、「仕事を手伝ってもらった」(30.7%)、「負担がかかることをお願いされなくなった」(22.7%)、「なるべく普段どおり接するように気を遣われた」(17.8%)が上位5位となっている。
- ただし、そのうちうれしかったとする割合をみると、「体調を気遣われた」は41.6%まで、「無理をせず、治療に専念するようにと言われた」は33.8%まで、「仕事を手伝ってもらった」は23.4%まで、「負担がかかることをお願いされなくなった」は9.8%まで、「なるべく普段どおり接するように気を遣われた」は13.2%まで低下する。

がん経験者は職場で受けた対応の上位2位は「体調を気遣われた」、「無理をせず、治療に専念するように言われた」で、それぞれ2/3程度は、そうした対応がうれしかったと回答している。
言い換えると、同じ対応であっても、うれしくなかった場合がそれぞれ1/3程度存在し、がんと診断された人にはこう対応すれば良い、という汎用的な対応を示すことは難しいことがうかがえる。

初めてのがんの治療と仕事の両立において、職場で受けたことがある対応、そのうちうれしかった対応<がん経験者>



注：複数回答。「初めてがんと診断された時、受けたことがある対応」の回答率が高い順に項目を並べている。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

(3)がん経験者以外が行った配慮

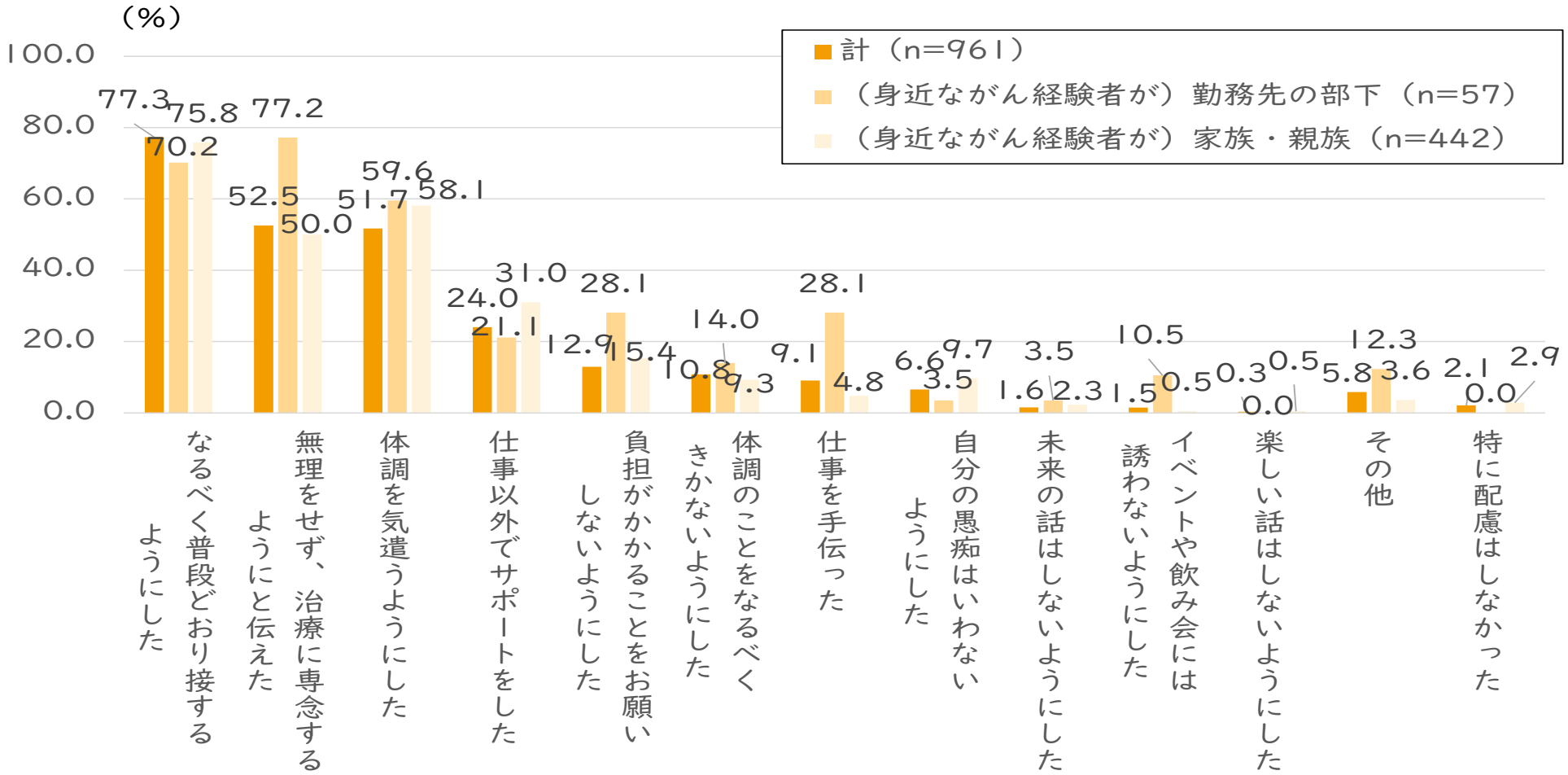
- がん経験者以外に対して、がんについて報告や相談を受けた時に、その方に対して行った配慮をたずねた結果をみると、「なるべく普段どおり接するようにした」（77.3%）、「無理をせず、治療に専念するようにと伝えた」（52.5%）、「体調を気遣うようにした」（51.7%）が上位3位となっている。
- 身近ながん経験者が「勤務先の部下」（つまり回答者が上司）である場合は、「無理をせず、治療に専念するように伝えた」が77.2%と最も高く、次に「なるべく普段どおり接するようにした」（70.2%）、「体調を気遣うようにした」（59.6%）が続いている。
- 身近ながん経験者が「家族・親族」の場合も上位3位は同様だが、「なるべく普段どおり接するようにした」が75.8%と最も高く、次に「体調を気遣うようにした」（58.1%）、「無理をせず、治療に専念するように伝えた」（50.0%）が続いている。

がん経験者以外が行った配慮として、「なるべく普段どおりに接するようにした」は77.3%とトップにあげられている。身近ながん経験者が勤務先の部下の場合も、「なるべく普段どおりに接するようにした」は70.2%にのぼる。一方、「なるべく普段どおり接するように気を遣われた」は、職場でがん経験者が受けた対応としては5位・17.8%にとどまっている。
双方の結果を勘案すると、「普段どおり接する」というがん経験者以外の配慮が、がん経験者には配慮として認識されていない可能性が高い。
上司からすると、実際には心配も気遣いもしているけれど、それを見せないように「普段どおりに接するようにした」つもりが、がん経験者本人には単に心配も気遣いもされていないと受け取られるというボタンの掛け違いが、職場で起こっていることが懸念される。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

がんについて報告や相談を受けた時、その方に対して行った配慮<がん経験者以外>



注1：身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けたことがある人に対する設問。
注2：複数回答。回答率が高い順に項目を並べている。

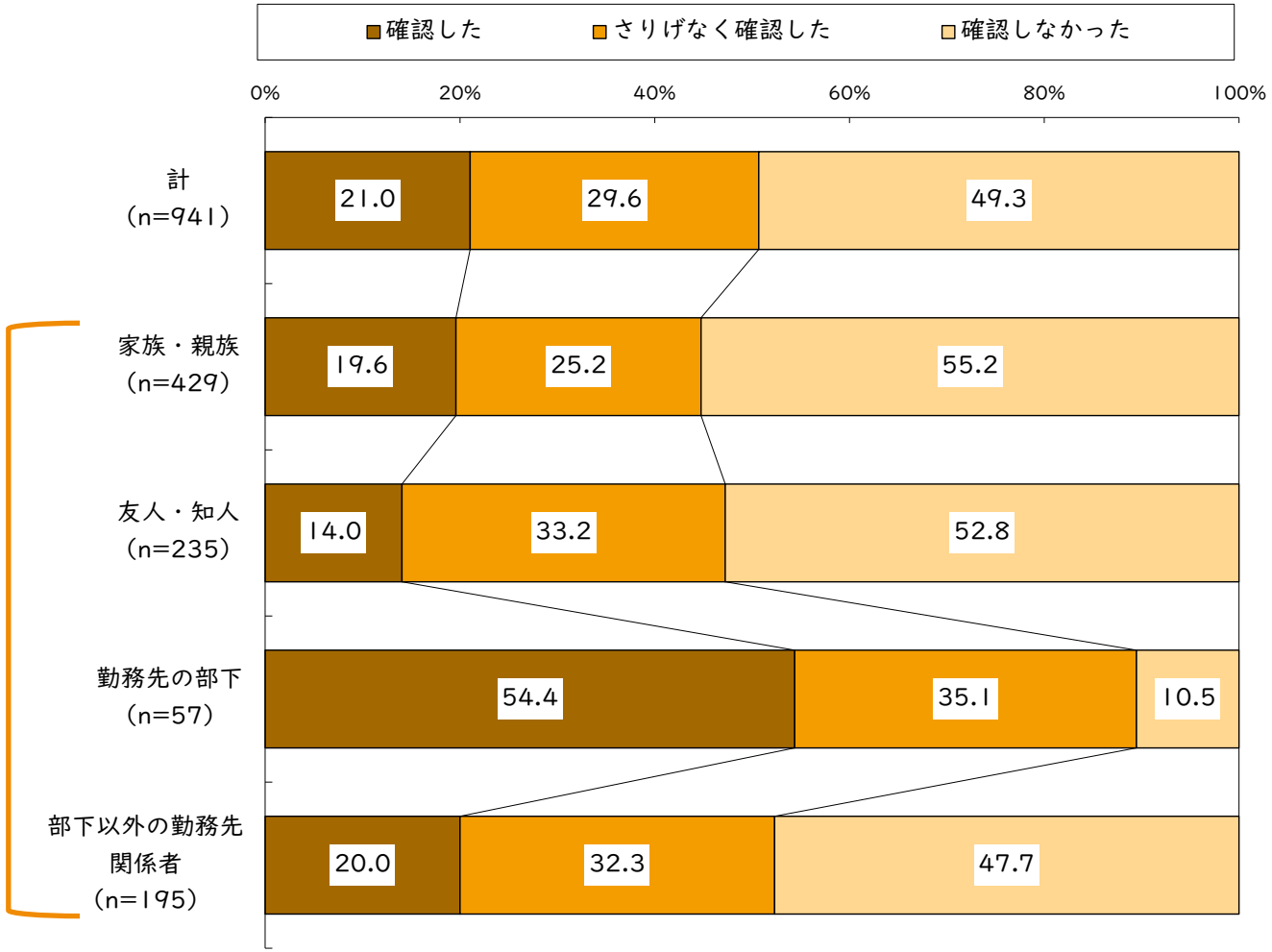
(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

- がん経験者以外が配慮を行うにあたって、報告や相談をしてきた本人の意向を確認したかをたずねた結果をみると、「確認した」が「さりげなく」をあわせて50.7%、「確認しなかった」が49.3%とほぼ半々になっている。
- 一方、身近ながん経験者が「勤務先の部下」の場合は、「確認した」（54.4%）、「さりげなく確認した」（35.1%）があわせて9割弱を占める。

前述（P26-27）のとおり、職場で同じ対応を受けても、がん経験者がうれしいと感じる場合とそうでない場合がある。
この点を解決するための策として、配慮を行うにあたって本人の意向を確認することが考えられるが、身近ながん経験者が「勤務先の部下」である場合を除けば、がん経験者以外の半数程度は本人に確認せずに配慮を行っている。

配慮を行うにあたって、事前にその方本人の意向を確認したか<がん経験者以外>



注1：身近ながん経験者（当時働いていた人）から報告や相談を受けたことがある人のうち、その方に対して「特に配慮はしなかった」と回答した以外の人に対する設問。
注2：それ以外の身近ながん経験者は29件と、サンプル数が限られるため掲載していない。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

(4)がん経験者が「イヤだった」、「うれしかった」上司や家族の言動

- 「上司の言動でイヤだったこと」は、「人事上の不利益」（55件）、「人権侵害」（42件）、「寄り添わない」（111件）から構成され、特に件数が多かった具体的な内容としては、「寄り添わない」の中の「体調や副作用の影響への無理解」（46件）や「心無い言動」（34件）があげられる。
- 「上司の言動でうれしかったこと」は「心理的支援」（187件）、「就労支援」（170件）、「受容姿勢」（51件）から構成される。「心理的支援」の中の「励ましや勇気づけ」（111件）や「就労支援」の中の「復帰・継続を望む言動」（99件）がうれしかったとする回答者が多い。一方、がん経験者以外の調査で、多くの回答者が行ったとしている「なるべく普段どおり接するようにした」に近い「あえていつもどおりの対応」は18件にとどまる。

がん経験者が「イヤだった」上司の言動には、がん経験者を深く傷つけ、記憶にとどまるような暴言もみられる。知識や想像力の不足などによるものであったとしても、こうした言動が繰り返されることがないよう、多くの方々に内容（P30-31）をご確認頂きたい。
「うれしかった」上司の言動は、受け手によって評価が変わる可能性が残るが、がんと診断された人への自身の言動について考える上での参考にはなるだろう。

がんと仕事に関する上司の言動<がん経験者>

上司の言動でイヤだったこと		計	
1.人事上の不利益	1-(1)退職勧奨・誘導/雇い止め	28	
	1-(2)休職指示・誘導	9	
	1-(3)不本意な異動、降格や減給	18	小計: 55
2.人権侵害	2-(1)病名の勝手な公表	22	
	2-(2)存在意義の否定	14	
	2-(3)容姿/身体変化の揶揄	6	小計: 42
3.寄り添わない	3-(1)体調や副作用の影響への無理解	46	
	3-(2)心無い言動	34	
	3-(3)就労継続に対する嫌味	14	
	3-(4)関心を持とうとしない姿勢	13	
	3-(5)的外れな配慮	4	小計:111
	コメント計	208	

上司の言動でうれしかったこと		計	
1.心理的支援	1-(1)励ましや勇気づけ	111	
	1-(2)体調への気遣い	51	
	1-(3)不安への寄り添い	15	
	1-(4)役立つ情報の提供	10	小計:187
2.就労支援	2-(1)復帰・継続を望む言動	99	
	2-(2)就労継続のための調整・支援	38	
	2-(3)体調や治療を考慮した調整・支援	33	小計:170
3.受容姿勢	3-(1)本人意思の尊重	27	
	3-(2)あえていつもどおりの対応	18	
	3-(3)ありのままの受け止め	6	小計: 51
	コメント計	408	

注1：自由記述の分析結果。
注2：「特になし」や設問の回答ではない自由記述の内容については、カウントの対象外としている。
注3：1つのコメントに複数の要素がある場合は、重複計上している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

「上司の言動でイヤだったこと」の例<がん経験者>

1.人事上の不利益	退職勧奨とそれを口外しない約束をさせられたこと。
	「切っても治るものではない　人様に迷惑をかけているのに、なぜ辞めないのか　みんなに謝れ」
	告知を受け、翌勤務日に上司に報告したら、返事が退職で、そのまま契約終了せざるを得なかった。
	以前と同内容の仕事に戻るも、基本給が初任給レベルまで（10年以上以前の金額まで勝手に）落とされていた。…
	給料が極端に下がったので相談したが、「使ってもらえるだけありがたく思え」と言われた。
2.人権侵害	上司が私の許可なく、職場の人にがんであることを話した。
	「がんなのに、なぜ転勤してきたのか」と転勤２日目に言われて大変傷ついた。
	相談した上司の上の上司から、先入観念にとらわれたハラスメント的な言動があった。 「もうSEXはできないのか」「もう男としての機能はダメなのか」…
	「死ぬと思ったら帰ってきた」「もうまともに働けないから転勤しろ」「がんになるような生活していた方が悪い」
	同僚からは頭髪が抜けて痩せ枯れた私を見て「女として終わったと思わない？」と言われて悲しく思いました。
3.寄り添わない	復職後、副作用があると言ったのに仕事の手を抜いているといわれ、しばらく眠れなかった。…
	上司は大病を患ったことがなく健康オタクで健康に良いことを沢山取り入れている人で、がん＝不摂生を沢山していたと認識している。そのため、不摂生がたたったのでは？と言われて本当に嫌な気持ちになった。そんな生活してないし、他に様々な理由があるはず。決めつけるな、と思った。
	癌になったのだから、もう頑張らなくていい。会社制度で守られているし、給与の補償もあるから、楽な会社生活が待ってるね。
	…私から治療中の症状と配慮してほしいことを伝えると「それは自分でコントロールして」の一言で終わった。
	過剰に体調を配慮されること。

注：「…」は略の意。誤字脱字については修正している。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

「上司の言動でうれしかったこと」の例<がん経験者>

1.心理的支援	一時的な困難は、人生誰にでもある。心配するな。先ずは治療に専念して戻ればいい。
	辛い時は、休んでいい。働きたくなったら、いつでもベストな状態で活躍できるよう手配するから、心配しないで。
	「誰かが困っている時に助け合えない組織は、組織ではない、こういう時にみんなが助け合わないといけない」と言ってもらえたこと。…
	がん告知を受けたことを報告したとき「まずはご自身の治療を最優先で。仕事はなんとかなるから」と言ってもらえて、安堵し涙した。
	…治療実績の高い病院リストをプリントして持ってきてくれた。 『情報が大事だ。冷静に現実を直視し後悔しない治療を選べ』と励ましてくれた。
2.就労支援	治療に必要な時間はどれだけ使っても構わないから必ず戻ってこい。それが休職の条件だ。と言ってくれたこと。
	がんと告知されて「辞める」と言ったが「今決めないで、治療が終わってから決めよう。 休職してゆっくり考えて欲しい、とても必要な人材だから今まで通りにここにいて欲しい」と打診されたこと。
	勤務形態変更してまでも、私の事を雇用継続してくれようとしてくれた事。
	通院や心身辛い時は、会社の規定の休みに捉われず、客先への直行直帰等をうまく使って構わないからな、と言ってくれてとても心強かった。
	以前から言われていた「契約社員から正社員にならないか」と、がんの報告にもかかわらず変わらずに言ってもらえた。 外出は全てチーム内で代行し、100%在宅勤務にしてくれた。
3.受容姿勢	私の意志と健康を一番に尊重してくれ、復帰後も病気を理由に業務内容や扱いを変えることが無かったこと。 一方で、放射線治療に通院必要な期間は時短勤務を認めてくれたり、融通の利いた対応をして下さった。
	同僚や他の社員に病気のことを「伝えたかったら伝えていいし、別にムリして言うことはない」と言ってくれた。 その判断をすべて委ねてくれた。
	前後で態度が変わらなかったことがよかった。 治療で早退などが必要な場合も淡々と了解してくれた。差別や特別扱いがなかったことがよかった。
	特に言動に変わりなく接してくれたことが一番うれしかったです。
	必要以上に詮索されなかったこと。聞く姿勢に徹してくれたこと。

注：「…」は略の意。誤字脱字については修正している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

- 「家族の言動でイヤだったこと」については、「働くことへの干渉」（31件）、「寄り添わない」（131件）に区分された。
- 「家族の言動でうれしかったこと」は「心理的支援」（295件）、「受容姿勢」（62件）から構成される。「心理的支援」の中では「励ましや勇気づけ」（152件）や「気遣いや労い」（119件）が特に多く、「受容姿勢」の中では「本人意思の尊重」がうれしかったという記述が39件みられている。

「家族の言動でイヤだったこと」として、「働くことへの干渉」が抽出されたのは、がん経験者がこれまでどおり仕事を続けることに対して、家族が慎重な考えを持っているという調査結果（P21）と関係している可能性がある。
心配であるがゆえに干渉してしまう面があるのかもしれないが、それが「寄り添わない」の中の「がんに対する（家族の）私見の押しつけ」や「『私（がん経験者本人）の気持ち』を置き去りにした言動」につながる懸念も大きい。
逆に「うれしかった家族の言動」には「本人意思の尊重」が含まれており、本人の意思を尊重しながら寄り添うことの重要性が示唆されている。

がんと仕事に関する家族の言動<がん経験者>

家族の言動でイヤだったこと		計	
1.働くことへの干渉	1-(1)退職･休職や仕事のセーブを勧める発言	20	
	1-(2)働くことの強要	11	小計: 31
2.寄り添わない	2-(1)心無い言動	52	
	2-(2)がんに対する私見の押しつけ	23	
	2-(3)「私の気持ち」を置き去りにした言動	18	
	2-(4)体調を気遣わない言動	18	
	2-(5)病名の勝手な公表	11	
	2-(6)過剰な心配	9	小計:131
	コメント計	162	

家族の言動でうれしかったこと		計	
1.心理的支援	1-(1)励ましや勇気づけ	152	
	1-(2)気遣いや労い	119	
	1-(3)金銭的な不安への寄り添い	17	
	1-(4)役立つ情報の提供	7	小計:295
2.受容姿勢	2-(1)本人意思の尊重	39	
	2-(2)あえていつも通りの対応	16	
	2-(3)ありのままの受け止め	7	小計: 62
	コメント計	357	

注1：自由記述の分析結果。
注2：「特になし」や設問の回答ではない自由記述の内容については、カウントの対象外としている。
注3：1つのコメントに複数の要素がある場合は、重複計上している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

「家族の言動でイヤだったこと」の例<がん経験者>

1.働くことへの干渉	結婚しているんだから無理に働く必要はない、体のことを考えて仕事は辞めなさい、命が助かったんだからよかったじゃない（元のように働きたかったので無理解が辛かった）
	もう仕事をしなくてもいいと言われた。心配しすぎてその言葉がうっとうしかった。
	「もう復帰するの？」と言われたのはイヤだった。好きな仕事なのに、やってはいけないと言われてるような気がした。
	「働くなんて事は諦めた方がいい。命があればそれで充分」私の社会性はどこに？
	収入が減ると治療費に困るから、と義母と旦那に言われたから少し辛くても仕事に行った。結局は健全な人に副作用は伝わらない。
2.寄り添わない	働かなくて気が楽だろ？
	義理の父に「がんなのに痩せないな」といわれたこと。「なぜそんなに働くことにこだわるのか」といわれること。知識や現在の医療状況を知らないがゆえのコメントが多かった。…
	深夜まで仕事をしているなど、いまの仕事の過酷な労働環境がその病の原因を作った、というようなことを（心配からですが）言われて、こたえました。
	仕事ばっかりして子どもを産まなかったからがんになったのよ。（義母）
	帰宅時間が遅くなると心配されたり、怒られました。 課された業務は身体に応えない範囲でやりたかったので、職場の人にも迷惑掛けたくなかったですし、でも家族はそこまでは想定し難いとは思いました。

「家族の言動でうれしかったこと」の例<がん経験者>

1.心理的支援	私が働くことを、家族が当たり前に受け止めてくれたこと。家のことは、私以外の家族で回るようにしてくれたこと。
	だいぶ体調が良くなった頃、息子が「お母さん今までの仕事はもうしないの？」と、聞かれ「どうしてそんな事言うのかな？」と、聞いたら「お母さんはしんどかったかもしれないけどお母さんの輝いている姿を又見たいなと思って」と、言われた時に、私は息子からみたら、あの時は(仕事ガンガンしていたので)輝いていたのか？と思うと涙が溢れて止まりませんでした。
	私自身は仕事がうまくいくか心配していたが、 仕事を続けた方が気が紛れて体調的にも良いのではないか、と母から言われて嬉しかった。
	公共交通機関での通勤だけでも疲れるので、車で送迎してくれた。優先席が利用しやすいように役所にヘルプマークをもらいに行ってくれた。
	経済的な支援をするので、身体のことを第一に考え、仕事は決して無理をしないようにと言ってくれたこと。
2.受容姿勢	自分の働き方の考えをそのまま受け入れてくれたことが嬉しかったことです。
	好きなように働けばいい、と言ってくれたこと。
	仕事はマイペースで続ければ良い、辞めたいと思えば辞めてもいいし、続けたいならそれも尊重する、と言ってもらえた事。
	仕事を再開するにあたって、反対しなかった。
	がんと言われる前と変わらなく接してくれたこと。

注：「…」は略の意。誤字脱字については修正している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

(5)がん経験者、がん経験者以外の「がんと仕事」に関する意見

- 調査では、がん経験者、がん経験者以外の双方に対して、「本人への意向確認」（確認の要否）、「治療中の接し方」（特別な気遣いや配慮の要否）、「治療との両立」（治療専念か両立か）、「職場復帰のタイミング」（治癒してから働くか、できる範囲で働くか）、「罹患の報告範囲」（なるべく報告するかどうか）、がん患者・経験者の働きやすさの現状（働きやすいか働きづらいか）に関する対照的なAとBの意見をあげ、どちらの意見に近いかをたずねている。
- 「本人への意向確認」についてはがん経験者、がん経験者以外ともに「配慮は、本人に意向を聞いたうえで行うほうが良い」を支持する割合が高いが、がん経験者のほうが支持傾向がより強い。
- 「治療中の接し方」については、がん経験者が「治療中も、仕事に対してなるべく普段どおり接してほしかった」を支持する一方で、がん経験者以外は「治療中は、仕事に対して特別な気遣いや配慮をしたほうが良い」と考える傾向にある。
- 「治療との両立」については、「がんになっても、治療と仕事を両立したほうが良い」を支持する割合（「Bに近い」「どちらかどいうとB」の計）は、がん経験者（60.3%）ががん経験者以外（39.9%）を大きく上回っている。
- 「職場復帰のタイミング」については、がん経験者、がん経験者以外ともにA（仕事に支障が出ないところまで治癒してから職場復帰したほうが良い）とB（仕事に支障が出る場合も、職場復帰してできる範囲で働けば良い）の支持割合が拮抗しているが、がん経験者でAを支持する割合（あわせて45.5%）が若干高い。
- 「罹患の報告範囲」については、「がんに罹患したら、そのことを仕事関係者になるべく報告したほうが良い」を支持する割合（「Aに近い」「どちらかというとA」の計）が、がん経験者（68.2%）、がん経験者以外（70.5%）ともに7割前後と高い。
- 「がん患者・経験者の働きやすさの現状」については、がん経験者、がん経験者のいずれも半数弱が「働きづらい社会」と評価しているが、がん経験者以外に比べてがん経験者のほうが、「働きやすい社会だ」とする割合がやや高い。

「治療中の接し方」（特別な気遣いや配慮の要否）、「治療との両立」（治療専念か両立か）で、がん経験者とがん経験者以外の意見が特に分かれており、がん経験者は「普段どおり接してほしかった」、「治療と仕事を両立したほうが良い」と考える傾向が強い。前述（P26-27）のとおり、がん経験者以外は普段どおりに接する配慮を行ったとする割合が高いが、この結果をみてもその配慮がうまく伝わっていないことが懸念される。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

がんと仕事に関する意見：AとBのどちらに近いか<がん経験者・がん経験者以外>

（%）

	調査数（n）	Aの意見	Aに近い計	Aに近い	どちらかというとA	どちらでもない	どちらかというとB	Bに近い	Bに近い計	Bの意見	平均値（点）
がん経験者	1,055	配慮は、本人に意向を聞いたうえで行うほうが良い	88.3	61.0	27.3	5.4	4.6	1.6	6.3	配慮は、本人に意向を聞かずに、意向を察して行うほうが良い	4.42
がん経験者以外	2,111		84.9	50.9	34.0	8.7	5.2	1.2	6.4		4.28
がん経験者	1,055	治療中は、仕事に対して特別な気遣いや配慮をしてほしかった/したほうが良い	32.7	11.8	20.9	22.6	24.5	20.2	44.7	治療中も、仕事に対してなるべく普段どおりに接してほしかった/接したほうが良い	2.80
がん経験者以外	2,111		45.1	15.1	30.0	20.9	24.4	9.5	34.0		3.17
がん経験者	1,055	がんになったら、治療に専念したほうが良い	22.6	10.1	12.4	17.2	28.9	31.4	60.3	がんになっても、治療と仕事を両立したほうが良い	2.41
がん経験者以外	2,111		27.7	13.5	14.2	32.4	26.7	13.2	39.9		2.88
がん経験者	1,055	仕事に支障が出ないところまで治癒してから職場復帰したほうが良い	45.5	18.8	26.7	15.7	25.0	13.7	38.8	仕事に支障が出る場合も、職場復帰してできる範囲で働けば良い	3.12
がん経験者以外	2,111		38.3	15.4	22.9	22.4	28.5	10.8	39.3		3.04
がん経験者	1,055	がんに罹患したら、そのことを仕事関係者になるべく報告したほうが良い	68.2	36.8	31.4	22.0	6.7	3.1	9.9	がんに罹患したら、そのことを仕事関係者になるべく報告しないほうが良い	3.92
がん経験者以外	2,111		70.5	31.4	39.1	23.8	4.3	1.4	5.7		3.95
がん経験者	1,055	いまの日本はがん患者やがん経験者が働きやすい社会だ	18.7	3.9	14.8	35.5	26.2	19.6	45.8	いまの日本はがん患者やがん経験者が働きづらい社会だ	2.57
がん経験者以外	2,111		10.7	1.3	9.4	41.0	31.2	17.1	48.3		2.47

注1：がん経験者以外については、身近にがん経験者がいなかった人も含む。
注2：平均値は「Aに近い」を5点、「どちらかというとA」を4点、「どちらでもない」を3点、「どちらかというとB」を2点、「Bに近い」を1点として得点化。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

- がん経験者の当時の状況別に、がんと仕事に関する意見をみると、「正社員・正職員」や「ステージ0」は本人への意向確認を支持する傾向が強い。
- 「正社員・正職員以外」は「特別な気遣いや配慮」や「治療に専念」を支持する傾向が強い。「治療中の接し方」については、ステージが高くなるほど「特別な気遣いや配慮」の支持が強くなる。
- 「職場復帰のタイミング」に関する意見は「正社員・正職員」、「正社員・正職員以外」、「自営・個人事業主」の順に、また、ステージが高くなるほど「仕事に支障が出る場合も、職場復帰してできる範囲で働けば良い」にシフトするが、「罹患の報告範囲」になると「正社員・正社員以外」や「自営・個人事業主」は「報告しないほうが良い」と考え、逆にステージが高くなるほど「報告したほうが良い」と考える傾向がみてとれる。
- がん患者・がん経験者の働きやすさは、初めてがんと診断された時期が最近になるほど、また、「正社員・正職員以外」と「自営・個人事業主」で「働きづらい社会だ」だとされている。

働き方の選択肢が広い「正社員・正職員」や「ステージ0」の場合には、配慮の本人確認が特に求められる。ステージが高くなると、特別な気遣いや配慮の必要性はより高まる。

がん経験者の当時の状況別　がんと仕事に関する意見：AとBのどちらに近いかの得点<がん経験者>

（点）

		調査数（n）	本人への意向確認	治療中の接し方	治療との両立	職場復帰のタイミング	罹患の報告範囲	がん患者・経験者の働きやすさの現状
計		1,055	4.42	2.80	2.41	3.12	3.92	2.57
初めてがんと診断された時期	2009年まで	173	4.57	2.60	2.44	3.07	4.01	2.64
	2010～2014年	229	4.33	2.84	2.28	3.09	3.82	2.60
	2015～2019年	521	4.39	2.77	2.46	3.10	3.92	2.55
	2020年	132	4.44	3.07	2.42	3.30	3.96	2.54
当時の就業形態	正社員・正職員	696	4.45	2.77	2.39	3.14	3.98	2.64
	正社員・正職員以外	265	4.35	2.91	2.49	3.09	3.80	2.43
	自営・個人事業主	94	4.36	2.66	2.34	3.05	3.79	2.45
当時のがんのステージ	ステージ0	60	4.62	2.68	2.45	3.28	3.50	2.50
	ステージⅠ	327	4.44	2.73	2.38	3.14	3.87	2.68
	ステージⅡ	301	4.38	2.76	2.31	3.12	3.86	2.57
	ステージⅢ以上	289	4.42	2.93	2.47	3.03	4.11	2.44
	わからない・答えたくない	78	4.27	2.81	2.71	3.22	3.96	2.69

	Aの考え方	Bの考え方
本人への意向確認	配慮は、本人に意向を聞いたうえで行うほうが良い	配慮は、本人に意向を聞かずに、意向を察して行うほうが良い
治療中の接し方	治療中は、仕事に対して特別な気遣いや配慮をしてほしかった/したほうが良い	治療中も、仕事に対してなるべく普段どおりに接してほしかった/接したほうが良い
治療との両立	がんになったら、治療に専念したほうが良い	がんになっても、治療と仕事を両立したほうが良い
職場復帰のタイミング	仕事に支障が出ないところまで治癒してから職場復帰したほうが良い	仕事に支障が出る場合も、職場復帰してできる範囲で働けば良い
罹患の報告範囲	がんに罹患したら、そのことを仕事関係者になるべく報告したほうが良い	がんに罹患したら、そのことを仕事関係者になるべく報告しないほうが良い
がん患者・経験者の働きやすさの現状	いまの日本はがん患者やがん経験者が働きやすい社会だ	いまの日本はがん患者やがん経験者が働きづらい社会だ

注1：平均値は「Aに近い」を5点、「どちらかというとA」を4点、「どちらでもない」を3点、「どちらかというとB」を2点、「Bに近い」を1点として得点化。
注2：「正社員・正職員以外」には当時の就業形態「その他」を含む。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

- がん経験者以外の属性別に、がんと仕事に関する意見をみると、39歳以下で「治療に専念」や「治癒してから職場復帰」を支持する傾向が強い。
- 自分の現在の就業形態別には、「正社員・正職員」、「正社員・正職員以外」、「自営・個人事業主」の順に、配慮に関する本人への意向確認を支持する傾向、「がんになっても、治療と仕事を両立したほうが良い」とする傾向、「いまの日本はがん患者やがん経験者が働きづらい社会だ」とする傾向が強くなっている。
- 自分の現在の役職別には、本部長・部長クラス以下で「特別な気遣いや配慮」、「治療に専念」、「治癒してから職場復帰」を支持する傾向がみてとれる。

39歳以下や本部長・部長クラス以下で「治療に専念」や「治癒してから職場復帰」を支持する傾向が強いことには、「特別な気遣いや配慮」が必要だという意識が影響している可能性がある。
いまの日本を「正社員・正職員以外」や「自営・個人事業主」は、「がん患者やがん経験者が働きづらい社会」と捉える傾向が強く、罹患報告すらためらう様子（P36）がみてとれる。

がん経験者以外の属性別　がんと仕事に関する意見：AとBのどちらに近いかの得点<がん経験者以外>

（点）

		調査数（n）	本人への意向確認	治療中の接し方	治療との両立	職場復帰のタイミング	罹患の報告範囲	がん患者・経験者の働きやすさの現状
計		2,111	4.28	3.17	2.88	3.04	3.95	2.47
自分の現在の年齢	39歳以下	528	4.32	3.15	3.27	3.25	3.92	2.44
	40～49歳	612	4.27	3.20	2.80	2.96	3.97	2.43
	50～59歳	737	4.26	3.17	2.76	2.98	3.94	2.51
	60歳以上	234	4.29	3.12	2.58	2.94	3.97	2.47
自分の現在の就業形態	正社員・正職員	1,602	4.25	3.16	2.97	3.07	3.96	2.52
	正社員・正職員以外	240	4.35	3.26	2.70	3.10	3.92	2.34
	自営・個人事業主	218	4.44	3.14	2.52	2.77	3.89	2.26
	働いていない	51	4.35	3.04	2.57	2.82	4.00	2.39
自分の現在の役職	代表・役員	84	4.26	2.99	2.62	2.69	4.14	2.55
	本部長・部長クラス	155	4.16	3.20	2.85	2.98	4.06	2.55
	課長クラス	271	4.29	3.17	2.85	2.99	3.97	2.58
	課長代理・係長・主任クラス	446	4.18	3.11	2.97	3.07	3.95	2.53
	役職なし	871	4.31	3.23	2.99	3.16	3.91	2.44

	Aの考え方	Bの考え方
本人への意向確認	配慮は、本人に意向を聞いたうえで行うほうが良い	配慮は、本人に意向を聞かずに、意向を察して行うほうが良い
治療中の接し方	治療中は、仕事に対して特別な気遣いや配慮をしてほしかった/したほうが良い	治療中も、仕事に対してなるべく普段どおりに接してほしかった/接したほうが良い
治療との両立	がんになったら、治療に専念したほうが良い	がんになっても、治療と仕事を両立したほうが良い
職場復帰のタイミング	仕事に支障が出ないところまで治癒してから職場復帰したほうが良い	仕事に支障が出る場合も、職場復帰してできる範囲で働けば良い
罹患の報告範囲	がんに罹患したら、そのことを仕事関係者になるべく報告したほうが良い	がんに罹患したら、そのことを仕事関係者になるべく報告しないほうが良い
がん患者・経験者の働きやすさの現状	いまの日本はがん患者やがん経験者が働きやすい社会だ	いまの日本はがん患者やがん経験者が働きづらい社会だ

注1：平均値は「Aに近い」を5点、「どちらかというとA」を4点、「どちらでもない」を3点、「どちらかというとB」を2点、「Bに近い」を1点として得点化。
注2：「正社員・正職員以外」には当時の就業形態「その他」を含む。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

(6)仕事と治療の両立にあたって大切なもの

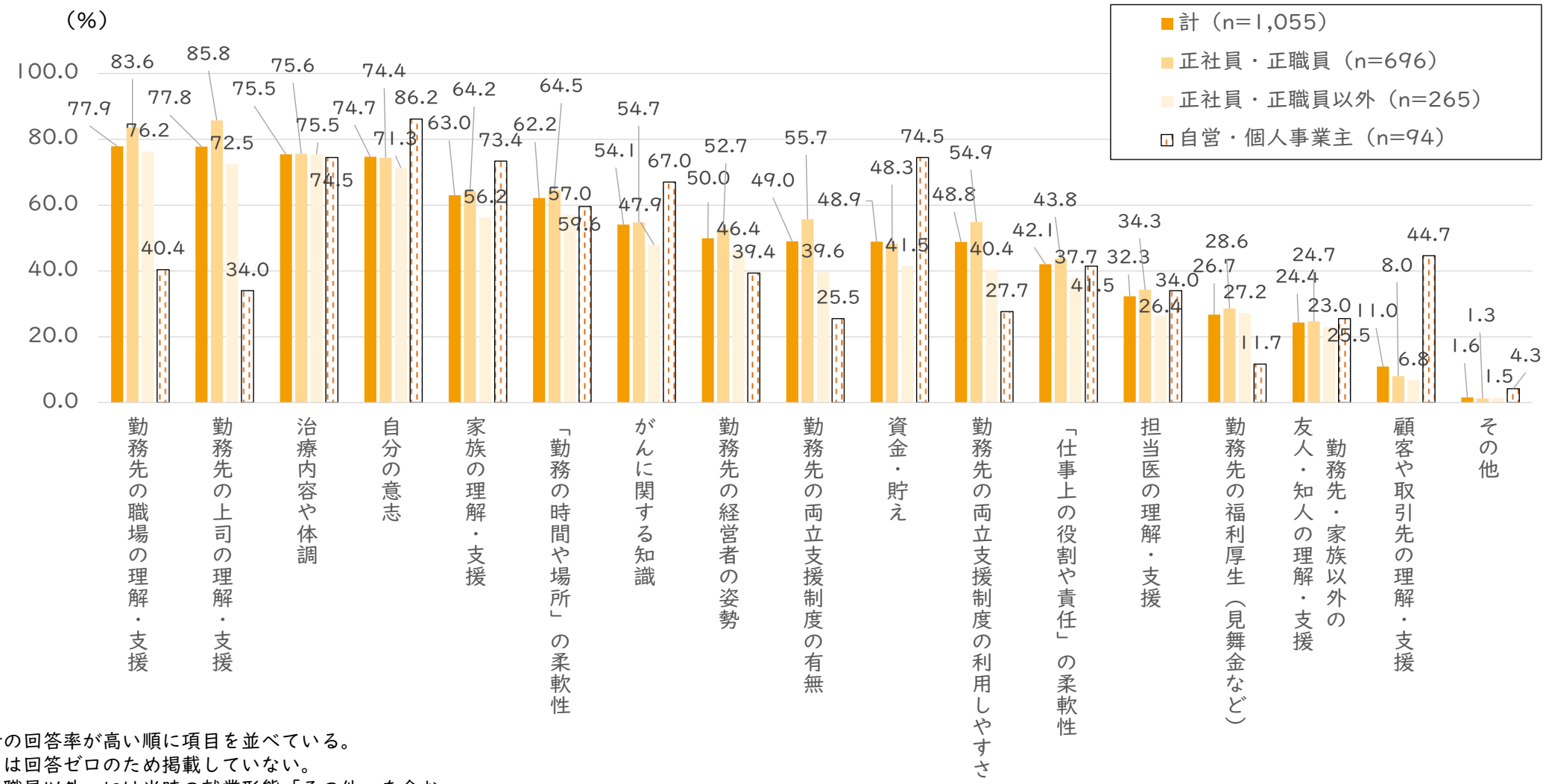
- がん経験者に対して、仕事と治療の両立にあたって大切なものをたずねた結果をみると、「勤務先の職場の理解・支援」（77.9%）、「勤務先の上司の理解・支援」（77.8%）、「治療内容や体調」（75.5%）、「自分の意志」（74.7%）、「家族の理解・支援」（63.0%）が上位5位となっている。
- がん経験者の当時の就業形態別にみると、「自営・個人事業主」では「自分の意志」（86.2%）が最も高く、「顧客や取引先の理解・支援」（44.7%、33.7ポイント）、「資金・蓄え」（74.5 %、25.6ポイント）、「がんに関する知識」（67.0%、12.9ポイント）、「家族の理解・支援」（73.4%、10.4ポイント）をあげた割合も計を大きく上回っている。

雇用者については、勤務先の職場や上司の理解・支援が、仕事と治療の両立にあたって特に大切である。
「治療内容や体調」はもちろん、「自分の意志」や「家族の理解・支援」が仕事と治療の両立のポイントとなっている点は、雇用者も自営・個人事業主も共通している。
特に、自営・個人事業主は、「自分の意志」を強く持って両立を図ろうとする姿勢が鮮明であり、そのための「武器」として、「資金・蓄え」や「がんに関する知識」の重要性が示唆されている。
また、自営・個人事業主については、仕事の場面において直接対峙する、「顧客や取引先の理解・支援」が大切とする割合も4割を超えており、自営・個人事業主ががんになっても働き続ける上で、「顧客や取引先の理解・支援」が切実に重要であることが示唆されている。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

当時の就業形態別　仕事と治療の両立にあたって大切なもの＜がん経験者＞



注1：複数回答。計の回答率が高い順に項目を並べている。
注2：「特にない」は回答ゼロのため掲載していない。
注3：「正社員・正職員以外」には当時の就業形態「その他」を含む。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

- 「がんの治療と仕事の両立」についての、がん経験者からの意見やアドバイスは、「周囲（職場・家族・医療機関など）に対する意見」（157件）、「社会に対する意見」（81件）、「がんと診断を受けた人、将来受ける人へのアドバイス」（244件）に大別される。
- 「周囲に対する意見」としては、「がんとともに働くことへの理解・支援」（44件）、「両立できる職場の環境整備・改善」（42件）、「本人意思の尊重と一人ひとりへの寄り添い」（38件）を求める意見が多い。
- 「社会に対する意見」は「希望する人ががんになっても働ける社会の実現」に関する意見が47件にのぼる。
- 「がんと診断を受けた人、将来受ける人へのアドバイス」としては、「周囲への相談・働きかけ・意思表示」（59件）、可能な限りの就労継続」（44件）、「治療・体調の優先」（41件）が上位3位となっている。

がんの治療と仕事の両立に対する、がん経験者からの実践的な意見・アドバイスとして、がんと診断を受けた（受ける）人はもちろん、周囲の人も是非参考にしていただきたい。

「がんの治療と仕事の両立」についての意見やアドバイス
＜がん経験者＞

がん経験者からの「仕事と治療の両立」における意見やアドバイス		計	
1.周囲に対する意見（職場・家族・医療機関など）	1-(1)がんとともに働くことへの理解・支援	44	
	1-(2)両立できる職場の環境整備・改善	42	
	1-(3)本人意思の尊重と一人ひとりへの寄り添い	38	
	1-(4)がんに対する「思い込み」への気づき	25	
	1-(5)医療機関の「働く患者」への寄り添い	8	小計:157
2.社会に対する意見	2-(1)希望する人ががんになっても働ける社会の実現	47	
	2-(2)がん教育	24	
	2-(3)相談相手・窓口の設置	10	小計: 81
3.がんと診断を受けた人、将来受ける人へのアドバイス	3-(1)周囲への相談・働きかけ・意思表示	59	
	3-(2)可能な限りの就労継続	44	
	3-(3)治療・体調の優先	41	
	3-(4)とらわれなき心でのがんとの共生	27	
	3-(5)診断直後の退職決断回避	23	
	3-(6)自分自身の意志の尊重	23	
	3-(7)就労継続のための情報収集・制度確認	12	
	3-(8)ある程度の自己開示を推奨	9	
	3-(9)慎重な自己開示を推奨	6	小計:244
	コメント計	482	

注1：自由記述の分析結果。
注2：「特になし」や設問の回答ではない自由記述の内容については、カウントの対象外としている。
注3：1つのコメントに複数の要素がある場合は、重複計上している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　2.がんに対する周囲の考え方や対応

「がんの治療と仕事の両立」についての意見やアドバイスの例<がん経験者>

1.周囲（職場･家族･医療機関など）に対する意見	仕事との両立では、職場の理解が必須。患者が勤務し続けることを希望する場合、受け入れる体制があることは好ましい。患者ごとに状態がちがうので、それらに合わせて、本人の希望に沿った柔軟な対応ができる世の中であるとありがたい。
	職場の受け入れ態勢が整っていると、自分がどうやって生きていくかという選択肢が広がると思います。治療に専念する（復帰出来る）、両立していく（治療の為の時間が優先出来る）など。治療にはお金もかかりますし、がんになって不安の中、仕事が無くなるという不安に襲われるのはとても辛く、苦しいです。
	罹患した人の環境や世代によって対応が変わることと、前提として誰一人として同じ病状の人はいないので、同じ部位のがんでも配慮することも異なるし、５年の目安に届かず、再発することも経験したので、一過性のものでなく、症状やプライベートの状況も加味するじっくりとした面談の必要が企業にはあると思っている。気にしないように今まで通り働きたい人もいるし、体調を優先した人もいるので、本人の希望を全て飲む必要もないが、企業努力は必須だと思う。あとはどんなに気丈な人でも、告知されたときは凹むので、自分の過去の治療などを公言する上司などがいるが、人それぞれなので、じっくり寄り添うマネジメント力が必要だと思う。
	がんになる事＝死と考えている人が多い気がします。がんになっても仕事や生きがい、先の事をもっと考えられる、考えても良いんだと思える制度やサポートを増やして欲しいし、それがある事をがんになっていない人にも知ってもらいたいです。
	主治医から、術後に出るであろう症状や後遺症について、説明があれば仕事を辞めずに済みました。相談をしても親身になって考えてくれなかった。やり甲斐のある仕事だったので、とても残念でした。
2.社会に対する意見	両立したい人が両立でき、両立したくない人が両立しなくて済むように、勤務先や職場と協力しその他の資源を活用して環境を整えることができると良いと思います。
	置かれている状況や環境に個人差のたいへん大きい問題だと思います。しかし、大人のがん教育だけは必要だと感じています。「がん」＝「亡くなる」と思っている社会人がたくさんいることを実感しています。
	お金、職場・仕事、家族、手術への不安、死への不安など、希望が見えない心理状況。かと言って弱音や相談も中々しづらい。気軽にでも専門的な方に寄り添ってもらえると助かると思います。
3.がんと診断を受けた人、将来受ける人へのアドバイス	まず最初に自分の意見や働き方についてはっきりと周囲に伝え、治療の段階によってできることとできない事を伝えていった方が良いのではないかと感じました。 周囲の方は個々の状態や気持ちについて察することはできないので、伝えることが相互にとって良いと思います。
	すぐに退職を選ばない。休職などで治療を進めて、続けられる方法を模索してほしい。がんとわかった直後は不安しかないが、情報を集めていくうちに自分の仕事と治療の方向性を冷静に考えていけると思います。
	ケースバイケースだとは思うが、仕事が続けられる環境が整っていれば続けた方が良い。生活の質を保つためにも、心の健康のためにも仕事は大切。
	体調第一、無理をしないことです。自分ができることと、できないこと。諦めることも大事だと思います。今はできなくても、諦めても、生きていれば、いつかできる日が来ると思っています。
	自分自身の病状をよく理解し、自分がどう生きたいのかを明確に理解して伝えることがとても重要だと思う。それを受けて、会社.職場は初めて本人が求める対応の準備ができると思う。
	職場の制度を知っておくことが、両立を考えるときに重要だと思います。
	無理せずにありのままの自分をみせることが大事だと思います。
	上司や同僚には、がんであることをなるべく　伝え、協力や理解を得る方が良いと思います。　１人で抱え込まないことが　大切。
	理解ある方が一人でもいれば仕事は続けていける。　ただ、がん罹患のことを話す相手は慎重に選んだ方がよい。

注：「…」は略の意。誤字脱字については修正している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

(1)がんと診断されたことに関する報告

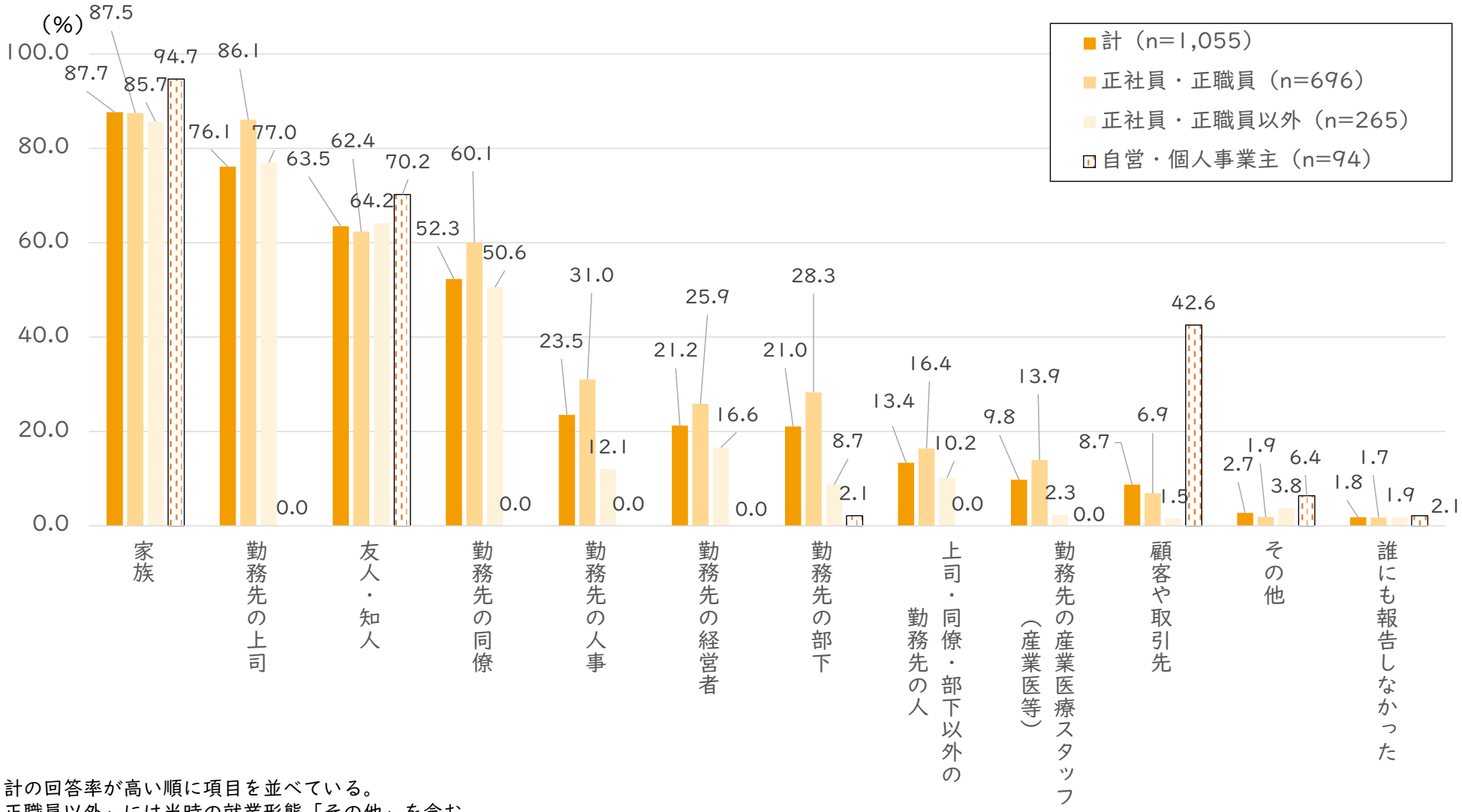
- がん経験者に対して、初めてがんと診断された時に、そのことを誰に報告したかをたずねた結果をみると、「家族」(87.7%)、「勤務先の上司」(76.1%)、「友人・知人」(63.5%)、「勤務先の同僚」(52.3%)が上位4位で半数を超えている。「勤務先の人事」、「勤務先の経営者」、「勤務先の部下」に報告した割合は2割強で、「正社員・正職員」でみても各31.0%、25.9%、28.3%にとどまる。
- 「自営・個人事業主」のがんに関する報告先としては、「家族」(94.7%)、「友人・知人」(70.2%)、「顧客や取引先」(42.6%)が上位3位となっている。
- 初めてがんと診断された時、そのことを誰かに報告する上での懸念や心配としては、「かわいそう、気の毒だと同情される」(50.2%)、「自分ががんだという噂が広がる」(39.0%)、「過度な配慮や特別扱いをされる」(38.4%)、「聞かれたくないことまで詮索される」(32.8%)、「評価や昇格など仕事上の不利益がある」(29.0%)が上位5位である。
- 当時の就業形態別にみると、「自営・個人事業主」は「かわいそう、気の毒だと同情される」(58.5%)、「特定の食事療法や治療法をすすめられる」(27.7%)が比較的高い。

前述(P34-36)のとおり、「がんに罹患したら、そのことを仕事関係者になるべく報告したほうが良い」という意見を、がん経験者の7割弱が支持していたが、初めてがんと診断された時の実際の報告先をみると、家族や勤務先の上司には大部分が報告しているものの、全体では「勤務先の同僚」が半数程度、勤務先の人事・経営者・部下は2割強、自営・個人事業主でも「顧客や取引先」に報告した割合は4割強にとどまっている。
この背景として、誰かに報告する上での、多岐に亘る懸念や心配が存在していることが明らかになった。「かわいそう、気の毒だと同情される」、「自分ががんだという噂が広がる」、「過度な配慮や特別扱いをされる」、「聞かれたくないことまで詮索される」というように、報告することでむしろ別の負担や心配が増えることを懸念して、報告を忌避している様子がみてとれる。
また、「評価や昇格など仕事上の不利益がある」という具体的な懸念は、おそらく「自分の状況・意向を説明しても、理解や支援をしてもらえない」という職場での信頼関係の欠如と連動している可能性がある。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

がんと診断されたことの報告先<がん経験者>

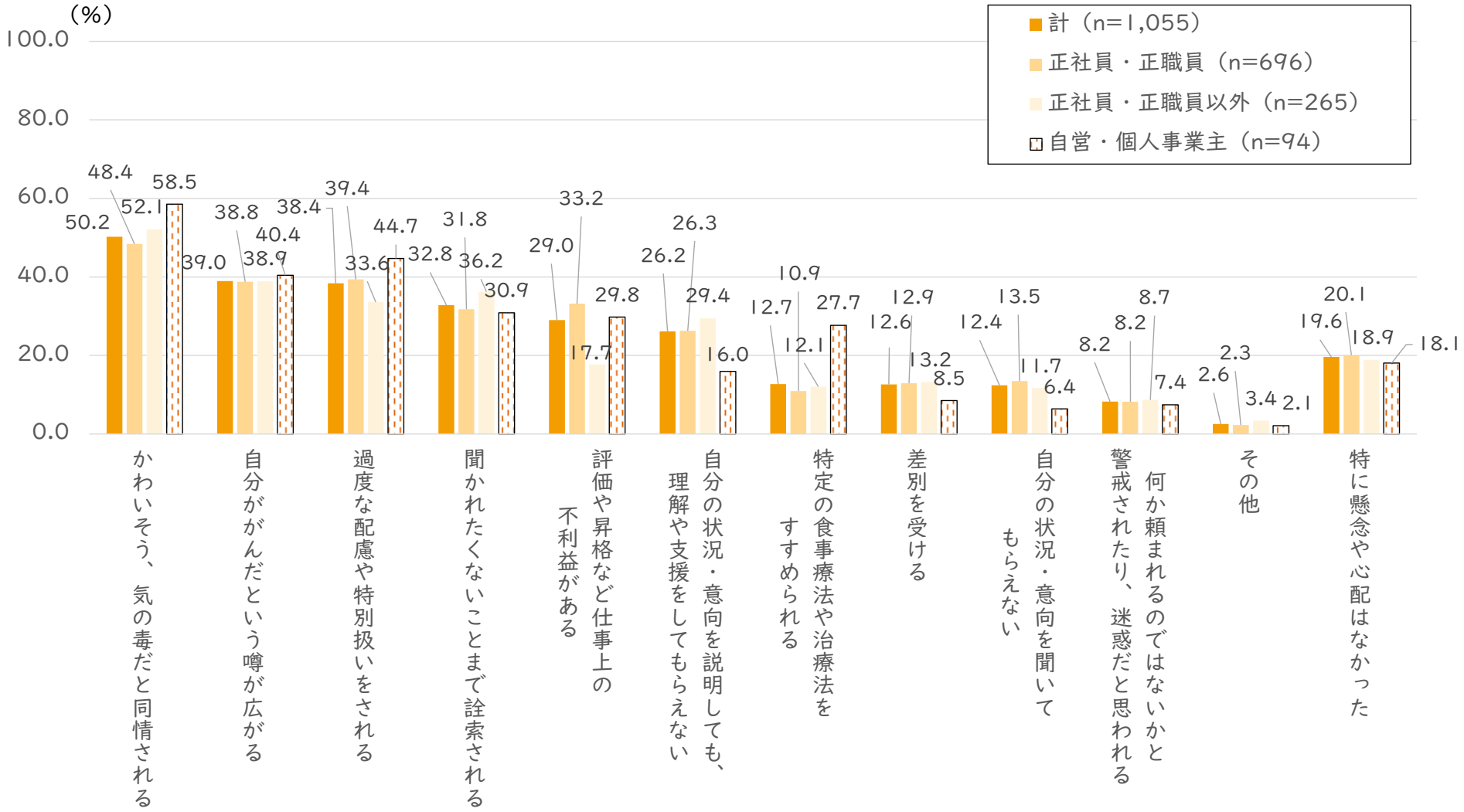


注1：複数回答。計の回答率が高い順に項目を並べている。
注2：「正社員・正職員以外」には当時の就業形態「その他」を含む。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

誰かに報告するにあたっての懸念や心配＜がん経験者＞



注1：複数回答。計の回答率が高い順に項目を並べている。
注2：「正社員・正職員以外」には当時の就業形態「その他」を含む。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

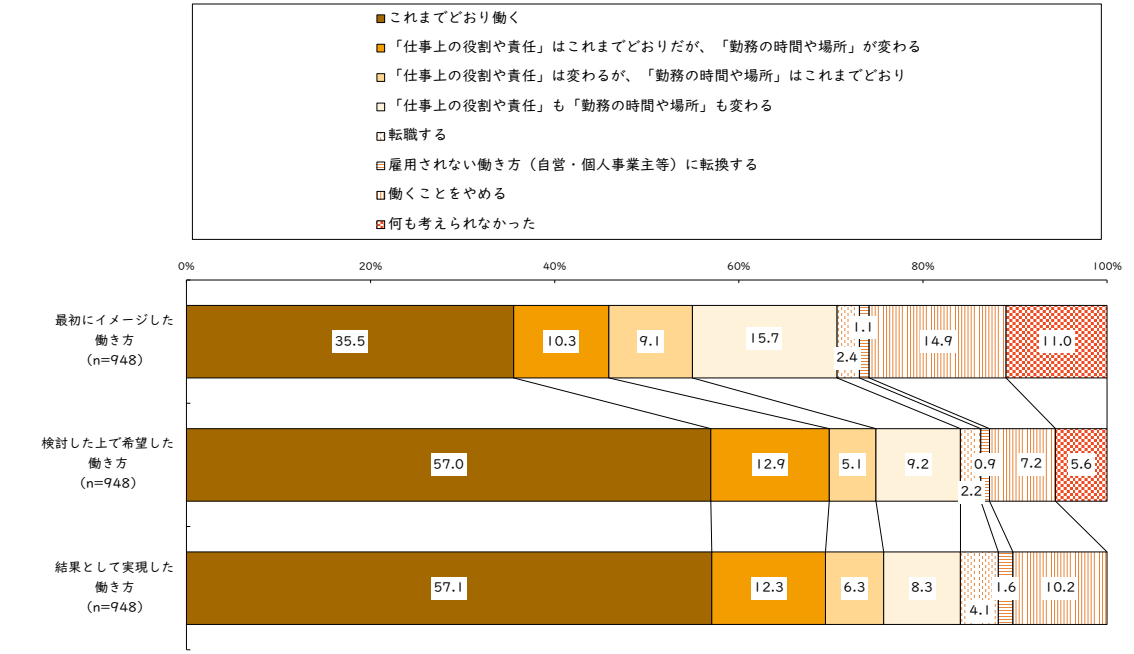
(2)働き方に関する意思決定プロセス

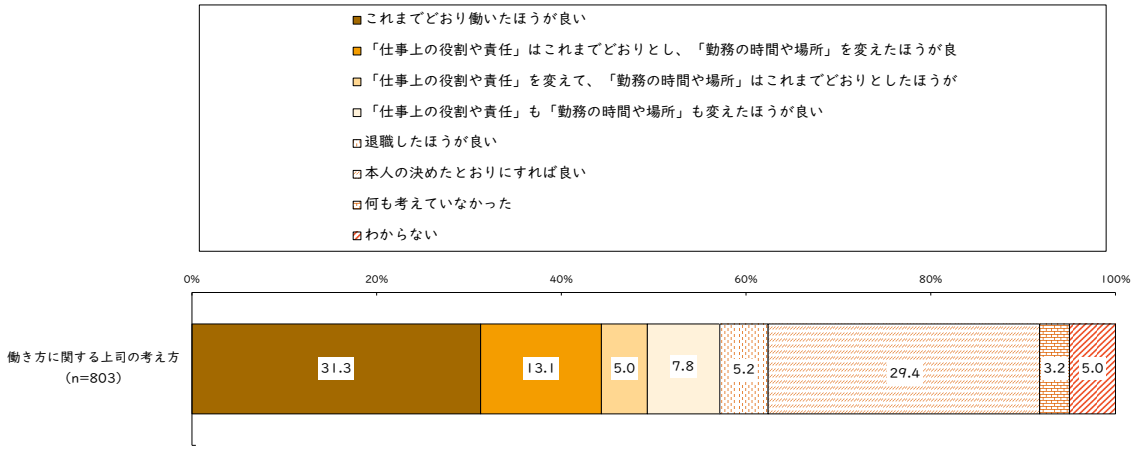
- がん経験者で当時雇用者だった人が「最初にイメージした働き方」をみると、「これまでどおり働く」が35.5%で、次に「『仕事上の役割や責任』も『勤務の時間や場所』も変わる」(15.7%)、「働くことをやめる」(14.9%)、「何も考えられなかった」(11.0%)が続いている。
- 「検討した上で希望した働き方」については、「『仕事上の役割や責任』も『勤務の時間や場所』も変わる」(9.2%)、「働くことをやめる」(7.2%)、「何も考えられなかった」(5.6%)のいずれも低下し、かわりに「これまでどおり働く」が57.0%と6割弱に上昇している。
- 「結果として実現した働き方」も、「検討した上で希望した働き方」と同じような回答分布になっている。
- 一方、がん経験者に対して、上司はあなたの仕事についてどのように考えていたと思うかをたずねた結果をみると、「これまでどおり働く」(31.3%)と「本人の決めたとおりにすれば良い」(29.4%)が拮抗している。

「検討した上で希望した働き方」は「最初にイメージした働き方」から大きく変化し、「これまでどおり働く」が増加している。上司の考えは「これまでどおり」か「本人の決めたとおり」が多い。

注1：最初にイメージした働き方、検討した上で希望した働き方、実現した働き方は、雇用者に対する設問。
注2：働き方に関する上司の考え方は、雇用者のうち、がんのことを上司に報告した人に対する設問。

イメージ・希望・実現した働き方と上司の考え<がん経験者>





(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- 「結果として実現した働き方」を、初めてがんと診断された当時の就業形態別にみると、「正社員・正職員以外」では「働くことをやめた」が25.8%と、「正社員・正職員」（4.6%）を大きく上回っている。
- 当時のがんのステージ別に「これまでどおり働いた」割合を比較すると、「ステージ0」では77.8%であるのに対し、「ステージⅢ以上」では45.3%と低くなっている。

「正社員・正職員以外」が「働くことをやめた」理由は、他の結果（P37）とあわせてみると、本人の意向によるものだけではないと推測される。「ステージⅢ以上」は「これまでどおり働いた」が相対的に低いが、「働くことをやめた」については計と比べて顕著な差がなく、何らかの形で働き続けている様子がうかがえる。

初めてがんと診断された時期や当時の状況別　実現した働き方<がん経験者>

（%）

		調査数（n）	計	これまでどおり働いた	「仕事上の役割や責任」はこれまでどおりだが、「勤務の時間や場所」を変えた	「仕事上の役割や責任」は変えたが、「勤務の時間や場所」はこれまでどおり	「仕事上の役割や責任」も「勤務の時間や場所」も変えた	転職した	雇用されない働き方（自営・個人事業主等）に転換した	働くことをやめた
計		948	100.0	57.1	12.3	6.3	8.3	4.1	1.6	10.2
初めてがんと診断された時期	2009年まで	155	100.0	55.5	11.0	7.7	7.1	4.5	1.9	12.3
	2010～2014年	207	100.0	54.1	12.1	6.8	10.1	3.4	1.9	11.6
	2015～2019年	462	100.0	60.0	11.5	5.8	7.1	4.8	1.5	9.3
	2020年	124	100.0	53.2	17.7	5.6	11.3	2.4	0.8	8.9
当時の就業形態	正社員・正職員	696	100.0	59.6	14.2	7.9	9.8	2.4	1.4	4.6
	正社員・正職員以外	252	100.0	50.0	7.1	2.0	4.4	8.7	2.0	25.8
当時のがんのステージ	ステージ0	54	100.0	77.8	9.3	3.7	0.0	5.6	0.0	3.7
	ステージⅠ	300	100.0	63.7	11.7	5.3	4.7	4.3	2.0	8.3
	ステージⅡ	265	100.0	55.1	11.3	7.2	9.1	4.5	2.3	10.6
	ステージⅢ以上	258	100.0	45.3	15.5	7.0	14.0	3.9	1.2	13.2
	わからない・答えたくない	71	100.0	63.4	9.9	7.0	7.0	1.4	0.0	11.3

注：雇用者に対する設問。

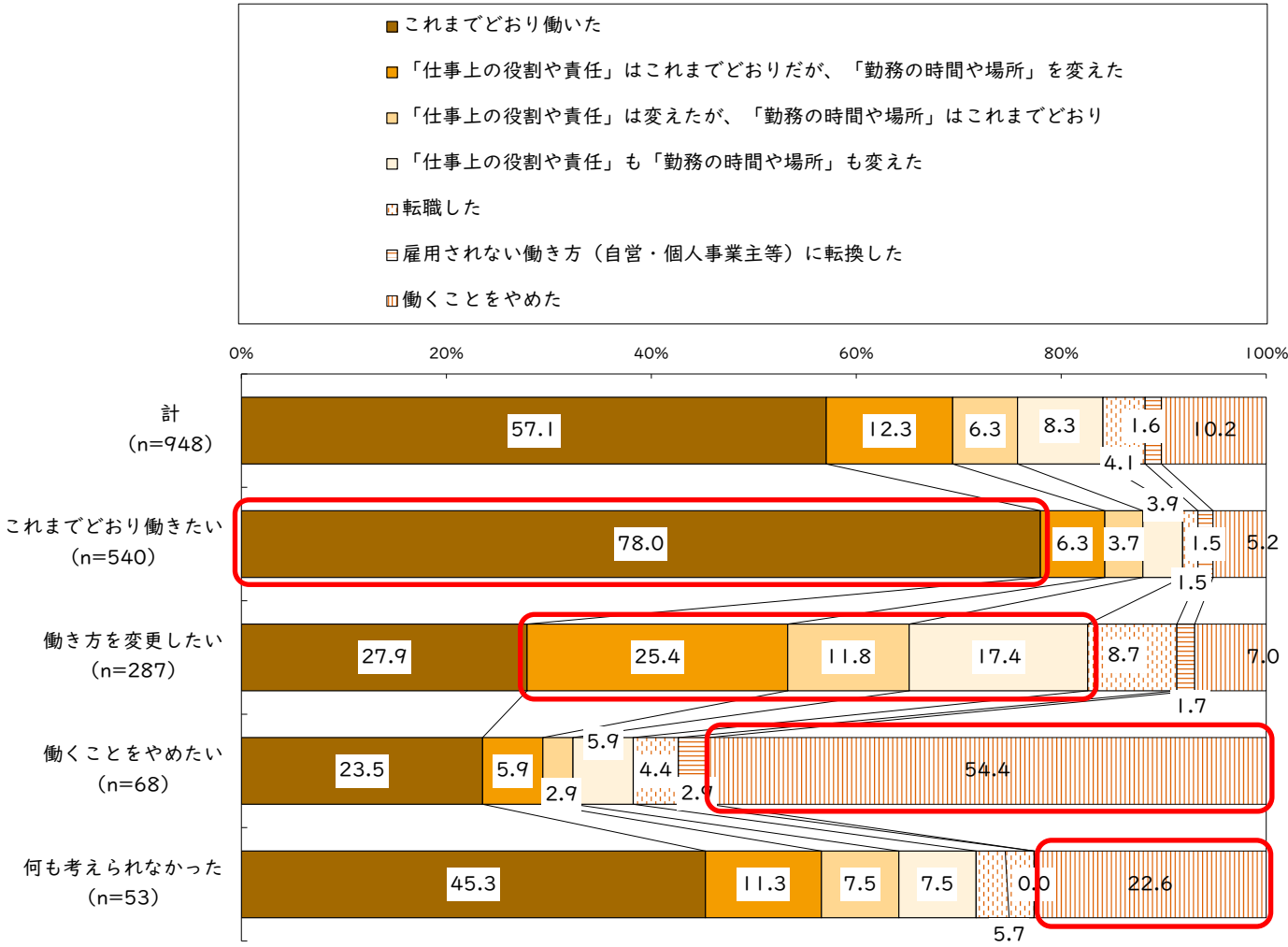
(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- がん経験者で当時雇用者だった人について、本人の「検討したうえで希望した働き方」別に「結果として実現した働き方」をみると、「これまでどおり働きたい」の78.0%、「働くことをやめたい」の54.4%は、結果として希望どおりの結果となっていることがわかる。
- 「働き方を変更したい」については、54.7%が同じ勤務先で働き方を変更している。転職や雇用されていない働き方への転換まで含めると、65.2%が広い意味で働き方を変更できている。
- 一方、希望する働き方について、「何も考えられなかった」人については、22.6%が「働くことをやめた」としている。

「これまでどおり働く」を希望した人の大部分、「働き方を変更する」もしくは「働くことをやめる」を希望した人の半数以上が、希望した働き方を実現できている。
一方、働き方の希望について「何も考えられなかった」場合は、2割強が働くことをやめている。

検討した上で希望した働き方別　実現した働き方<がん経験者>



注1：雇用者に対する設問。
注2：「希望した働き方」については、「転職したい」（21件）と「雇用されない働き方に転換したい」（9件）を「働き方を変更したい」に含めている。

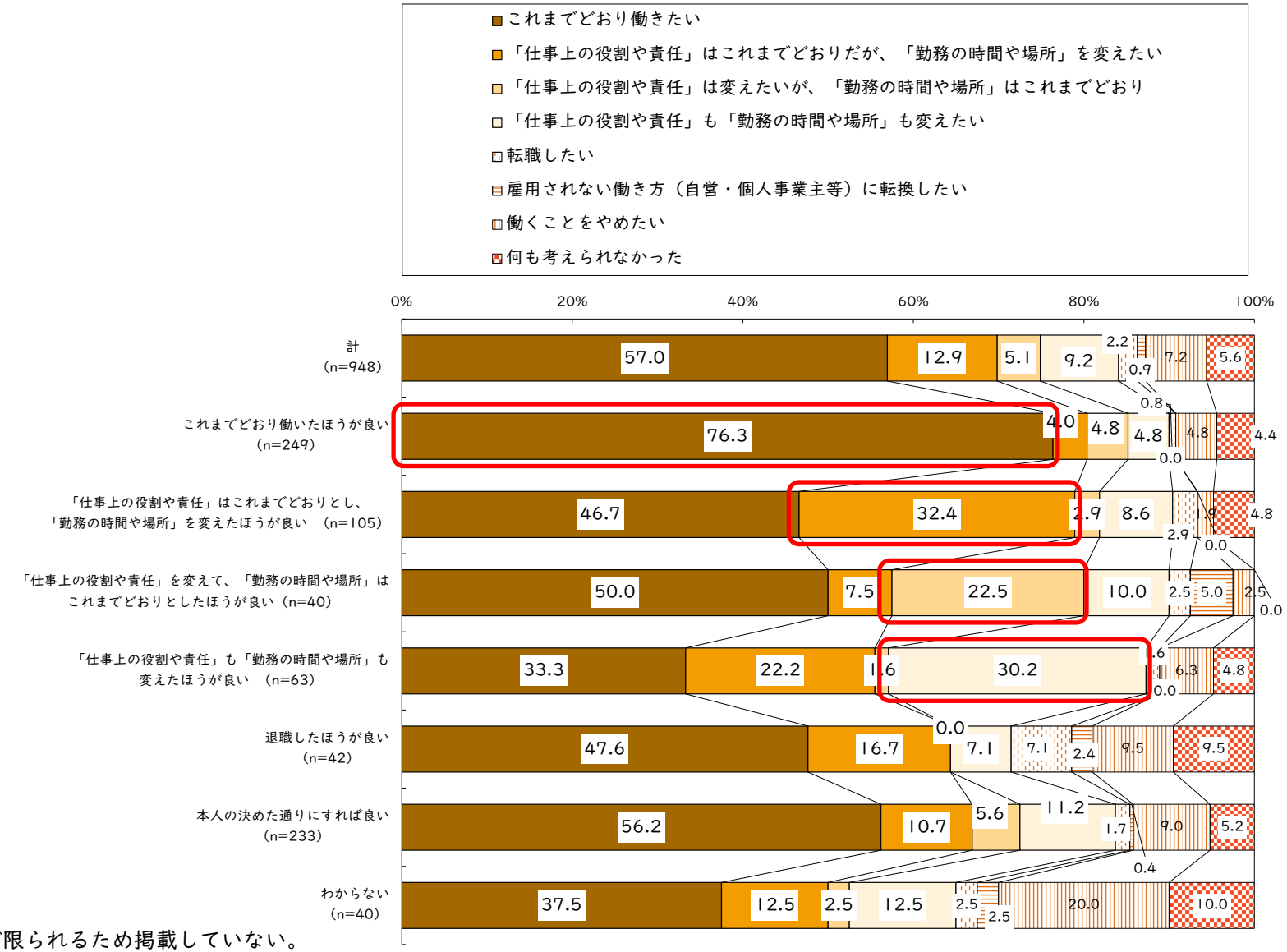
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- 初めてがんと診断された時に、がん経験者が「検討した上で希望した働き方」を、がん経験者が想像する、「当時の上司の自分の仕事に関する考え方」別にみると、上司が「これまでどおり働いたほうが良い」と考えていた場合には、がん経験者も「これまでどおり働く」ことを希望した割合が76.3%を占める。
- 「上司が働き方を変更したほうが良い」という考えを持っていた場合も、がん経験者が上司の意向と同じパターンの働き方を希望した割合が2～3割程度にのぼっている。

がん経験者が自分で「検討した上で希望した働き方」だとしても、当時の上司の意向と回答内容が合致する部分が少なくないことから、当時の上司の意向を踏まえ、あるいは反映して希望する働き方が決定された可能性がある。

上司の意向別　検討した上で希望した働き方<がん経験者>



注1：がんのことを上司に報告した雇用者に対する設問。
注2：上司の意向として「何も考えていなかった」は25件と、サンプル数が限られるため掲載していない。

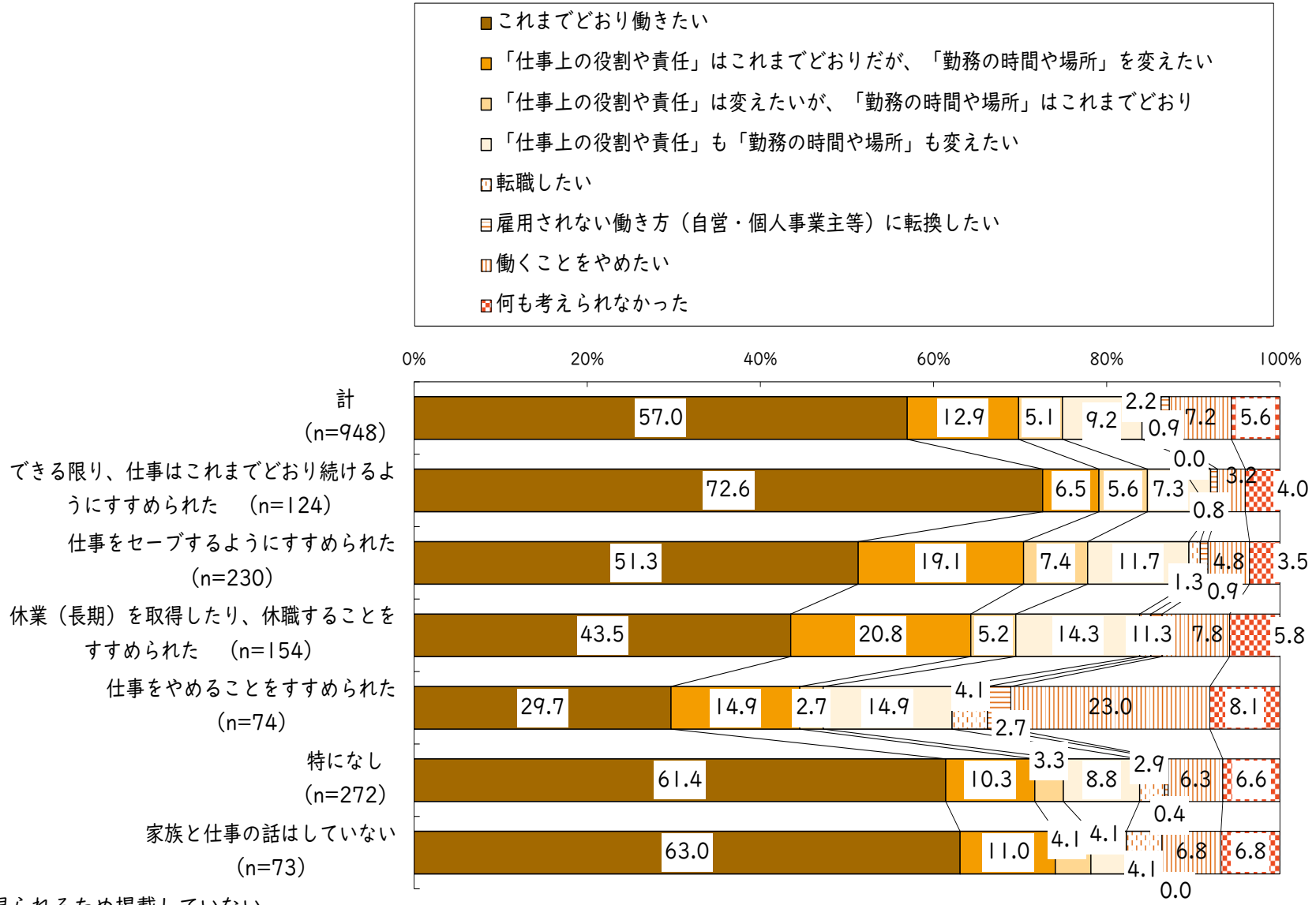
(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- 初めてがんと診断された時に、がん経験者が「検討した上で希望した働き方」を、当時家族にすすめられた内容別にみると、「これまでどおり続けるように」家族にすすめられた場合には、「これまでどおり働きたい」と希望した割合が72.6%を占める。
- 一方、家族から「仕事をやめることをすすめられた」場合には、「これまでどおり働きたい」は29.7%まで低下し、「働くことをやめたい」が23.0%にのぼる。

がん経験者が自分で「検討した上で希望した働き方」だとしても、当時家族にすすめられた内容別に結果をみると、家族がすすめた内容が、がん経験者の働き方に関する意思決定に大きな影響を与えていることがうかがえる結果となっている。

家族にすすめられた内容別　検討した上で希望した働き方<がん経験者>



注1：がんのことを家族に報告した雇用者に対する設問。
注2：家族にすすめられたこと（表側）は複数回答。
注3：家族にすすめられたことの「その他」は13件と、サンプル数が限られるため掲載していない。

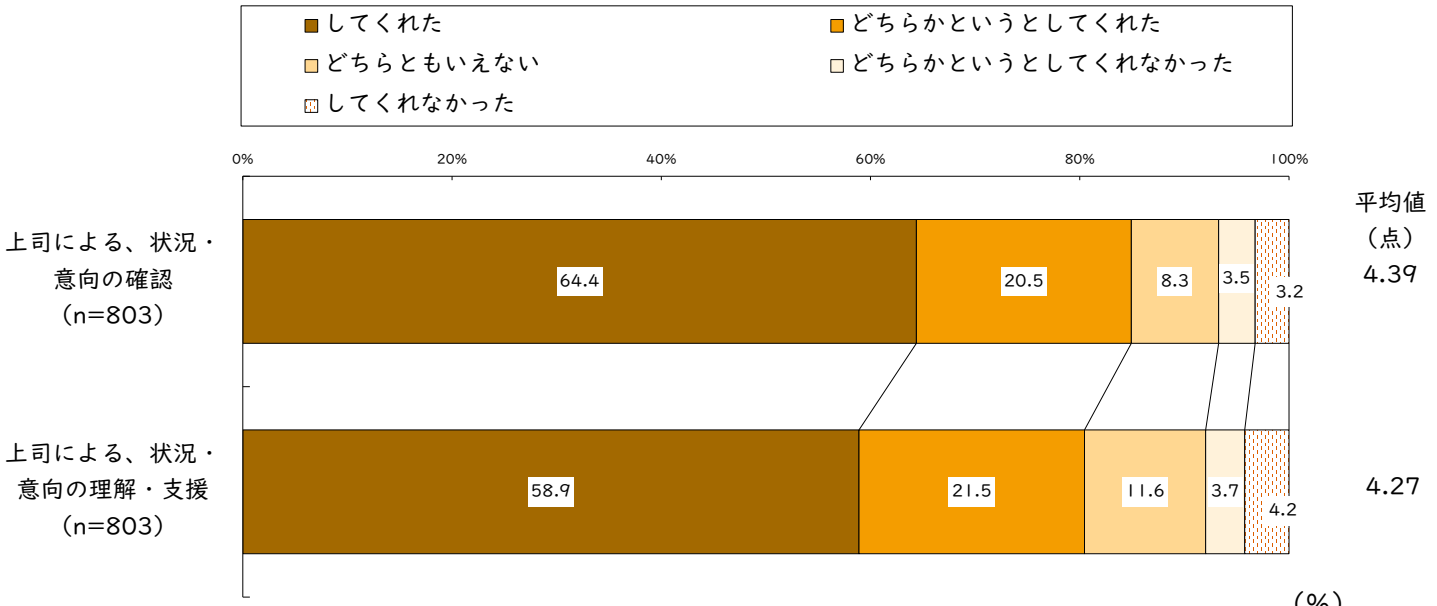
(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- 調査では、初めてがんと診断された時に、そのことを「勤務先の上司」に報告したがん経験者に対して、上司が自分の状況・意向を確認してくれたか、さらに状況・意向を理解し、支援してくれたかをたずねている。
- 上司が状況・意向を「してくれた」割合は64.4%で、「どちらかというとしてくれた」（20.5%）もあわせると84.9%を占める。
- 上司が状況・意向を理解・支援「してくれた」割合は58.9%で、「どちらかというとしてくれた」（21.5%）をあわせると80.4%を占める。
- 状況・意向の確認有無別に理解・支援の状況をみると、確認してくれた場合には理解・支援もしてくれた割合が92.8%となっている一方で、確認してくれなかった場合には理解・支援もしてくれなかった割合が92.6%となっている。

大部分の上司はがん経験者の状況・意向を確認し、理解・支援もしている。確認している上司は理解・支援も行っている傾向が顕著であり、両者が連動して実施されている様子がみてとれる。

上司による状況・意向の確認と理解・支援＜がん経験者＞



（%）

	調査数（n）	計	理解・支援してくれた計	どちらともいえない	理解・支援してくれなかった計	平均値（点）
計	803	100.0	80.4	11.6	8.0	4.27
状況・意向を確認してくれた計	682	100.0	92.8	6.5	0.7	4.61
どちらともいえない	67	100.0	17.9	68.7	13.4	3.04
状況・意向を確認してくれなかった計	54	100.0	1.9	5.6	92.6	1.50

注1：がんのことを上司に報告した人に対する設問。
注2：平均値は「してくれた」を5点、「どちらかというとしてくれた」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかというとしてくれなかった」を2点、「してくれなかった」を1点として得点化。

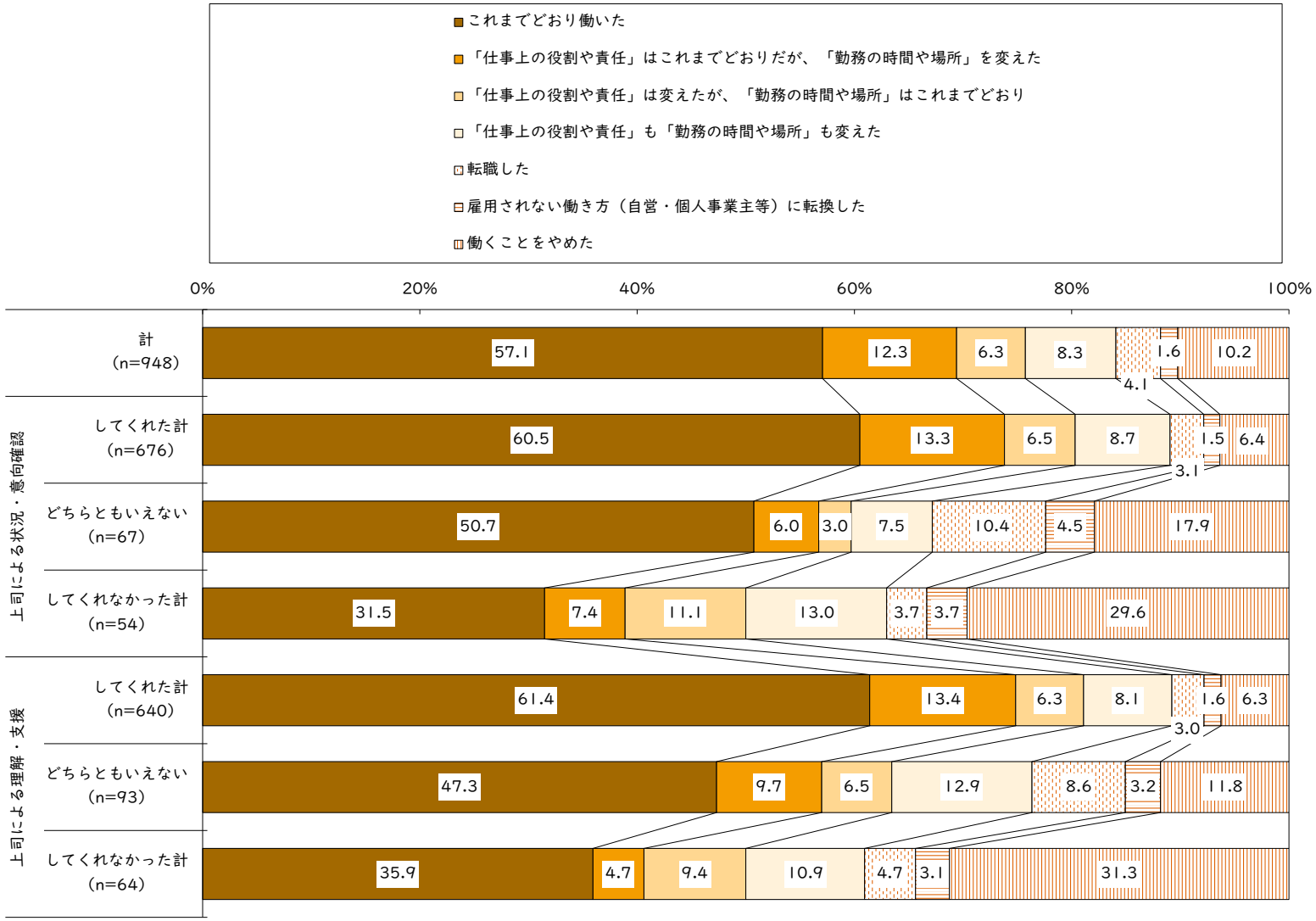
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- がん経験者のうち雇用者について、上司の確認及び理解・支援の有無別に、「結果として実現した働き方」をみると、確認、理解・支援のいずれについても、「してくれた計」、「どちらともいえない」、「してくれなかった計」の順に「これまでどおり働いた」割合が顕著に低下し、「働くことをやめた」割合が大きく上昇している。

これまでどおり働けるかどうかについては、勤務先の上司による状況・意向の確認、理解・支援が重要な要因となることが示唆された。
がんと診断された後、自分の希望する働き方を検討し、実現していくうえで、勤務先の上司がキーパーソンとなることが改めて確認されたといえよう。

上司の確認及び理解・支援別　実現した働き方<がん経験者>



注1：雇用者に対する設問。
注2：「上司による状況・意向確認」及び「上司による理解・支援」は、がんのことを上司に報告した雇用者に関する集計結果。

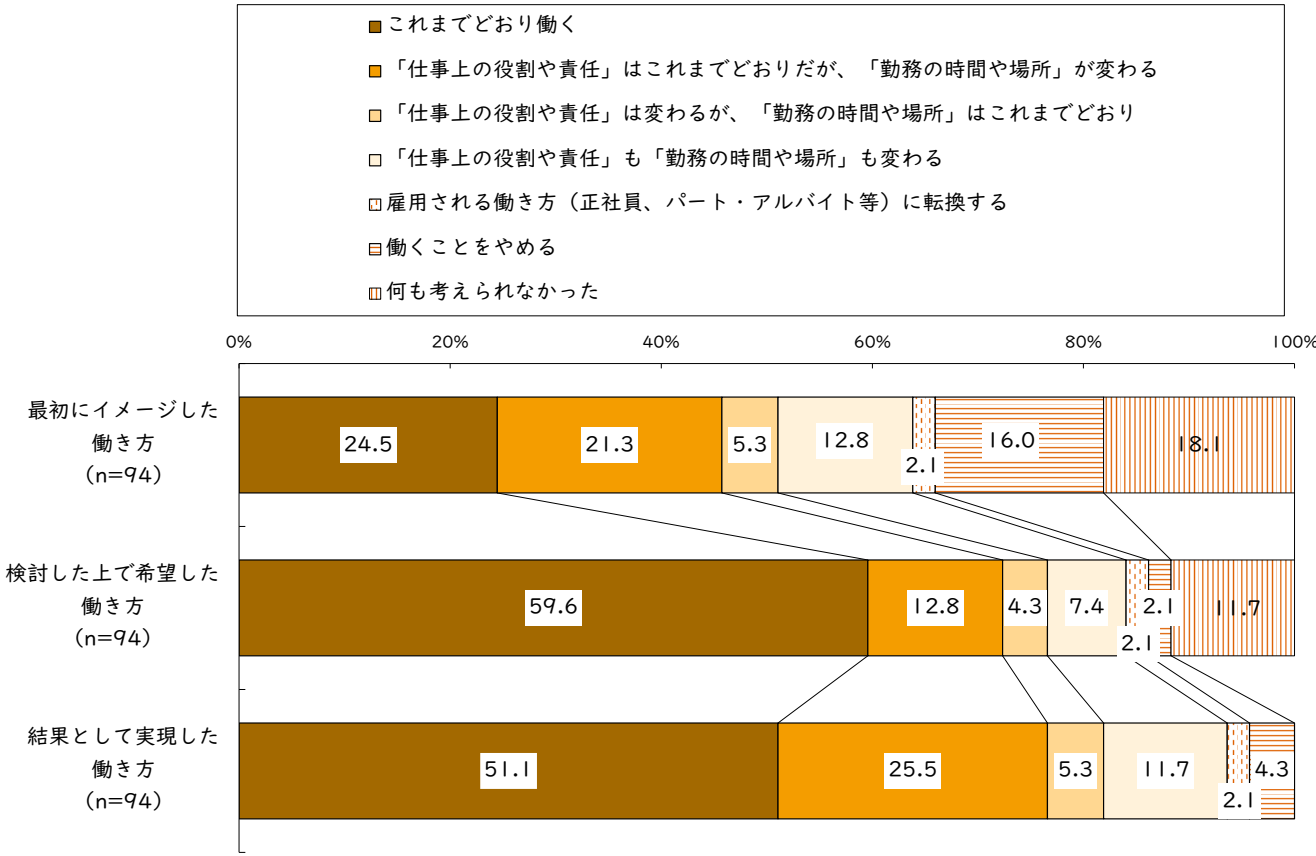
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- がん経験者のうち、がんと診断された当時自営・個人事業主だった人に対して、「最初にイメージした働き方」をたずねた結果をみると、「これまでどおり働く」は24.5%にとどまり、「何も考えられなかった」が18.1%、「働くことをやめる」が16.0%となっている。
- 「検討した上で希望した働き方」では「これまでどおり働く」が59.6%まで上昇するが、その後「結果として実現した働き方」になると51.1%に低下している。
- なお、前述（P45）のとおり雇用者については、「これまでどおり働く」が「検討した上で希望した働き方」で57.0%、「結果として実現した働き方」で57.1%とほぼ同水準だった。
- 一方、「結果として実現した働き方」について、「『仕事上の役割や責任』はこれまでどおりだが、『勤務の時間や場所』が変わる」は25.5%と、雇用者（12.3%）よりも高くなっている。

自営・個人事業主については、「最初にイメージした働き方」で「これまでどおり働く」をあげる割合が雇用者（35.5%）に比べて低い。
「結果として実現した働き方」については、雇用者では「これまでどおり働く」が6割、同一企業内での働き方の変更が3割だったが、自営・個人事業主では「これまでどおり働く」が5割、働き方の変更が4割という構成になっている。

自営・個人事業主がイメージ・希望・実現した働き方
＜がん経験者＞



注：自営・個人事業主に対する設問。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- がん経験者について、初めて診断された前後の週当たり労働時間を比較すると、診断前に比べて診断後は、「正社員・正職員」は7.36時間、「正社員・正職員以外」は4.40時間、「自営・個人事業主」は8.58時間減少している。
- 診断後の週当たり労働時間は、「正社員・正職員」が42.87時間、「正社員・正職員以外」が31.75時間、「自営・個人事業主」が35.78時間となっている。

どの就業形態も診断後には労働時間が減少しているが、これらはあくまでも診断前後で仕事を継続している人に関する比較であり、「働くことをやめた」人の中には労働時間が減少しなかった、あるいは減少を期待できなかった人が含まれている可能性がある。
また、労働時間の減少に伴う収入の減少も、特に「正社員・正職員以外」や「自営・個人事業主」で懸念されるところである。

初めてがんと診断された前後の週当たり労働時間の変化
＜がん経験者＞

（時間）

	週当たり労働時間の減少（診断前－診断後）	診断前の週当たり労働時間	診断後の週当たり労働時間
計	6.89 (n=941)	45.86 (n=1,055)	39.98 (n=941)
雇用者	6.71 (n=851)	46.22 (n=948)	40.43 (n=851)
正社員・正職員	7.36 (n=664)	50.20 (n=696)	42.87 (n=664)
正社員・正職員以外	4.40 (n=187)	35.16 (n=265)	31.75 (n=187)
自営・個人事業主	8.58 (n=90)	43.94 (n=94)	35.78 (n=90)

注1：「診断後の週当たり労働時間」については、雇用者と自営・個人事業主それぞれ別の設問でたずねた結果を掲載している。
注2：「診断後の週当たり労働時間」は、実現した働き方について「働くことをやめた」と回答した以外の人に対する設問。治療のために休業・休職した後で復帰した場合には復帰後の労働時間について、途中で経過観察期間に入った場合は入る前の労働時間をたずねている。
注3：正社員・正職員以外の「診断前の週当たり労働時間」には、当時の就業形態「その他」を含む。
注4：週当たり労働時間は、残業なども含めて実際働いている時間。設問では時間を選択肢でたずねているが、「20時間未満」を20時間、「20～25時間未満」を22.5時間、「25～30時間未満」を27.5時間、「30～35時間未満」を32.5時間、「35～40時間未満」を37.5時間、「40～45時間未満」を42.5時間、「45～50時間未満」を47.5時間、「50～55時間未満」を52.5時間、「55～60時間未満」を57.5時間、「60～65時間未満」を62.5時間、「65～70時間未満」を67.5時間、「70～75時間未満」を72.5時間、「75～80時間未満」を77.5時間、「80時間以上」を80時間として数値化。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

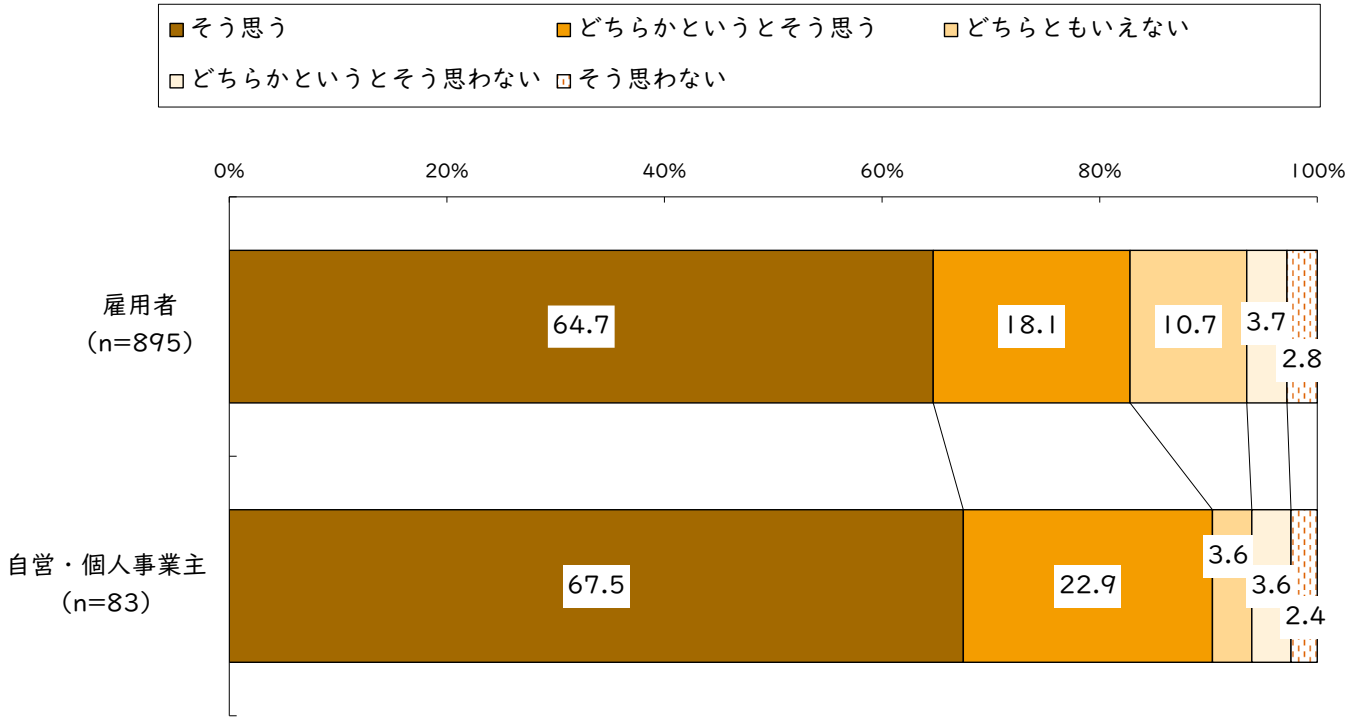
Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

(3)働き方に対する評価・満足度

- がん経験者に対する調査では、「検討した上で希望した働き方」が、いま振り返ってみて妥当な判断だったかどうかについて、当時雇用者だった人、自営・個人事業主だった人、それぞれに対してたずねている。
- 雇用者については、「そう思う」が64.7%、「どちらかというとそう思う」（18.1%）をあわせると、82.8%が妥当な判断だったと評価している。
- 自営・個人事業主についても、「そう思う」が67.5%、「どちらかというとそう思う」（22.9%）をあわせると、90.4%が妥当な判断だったと評価している。

当時雇用者だった人、自営・個人事業主だった人のいずれも、「検討した上で希望した働き方」は、「最初にイメージした働き方」から大きく変わっていた。その上で、「検討した上で希望した働き方」に対して、概ね妥当な判断だったと評価されている。

検討した上で希望した働き方に対する評価
＜がん経験者＞



注1：「働き方の希望（検討結果）に対する評価」については、雇用者と自営・個人事業主それぞれ別の設問でたずねた結果を掲載している。
注2：「検討の結果、仕事をどうしたいと思ったか」について、「何も考えられなかった」と回答した以外の人に対する設問。
注3：平均値は「そう思う」を5点、「どちらかというとそう思う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかというとそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点として得点化。

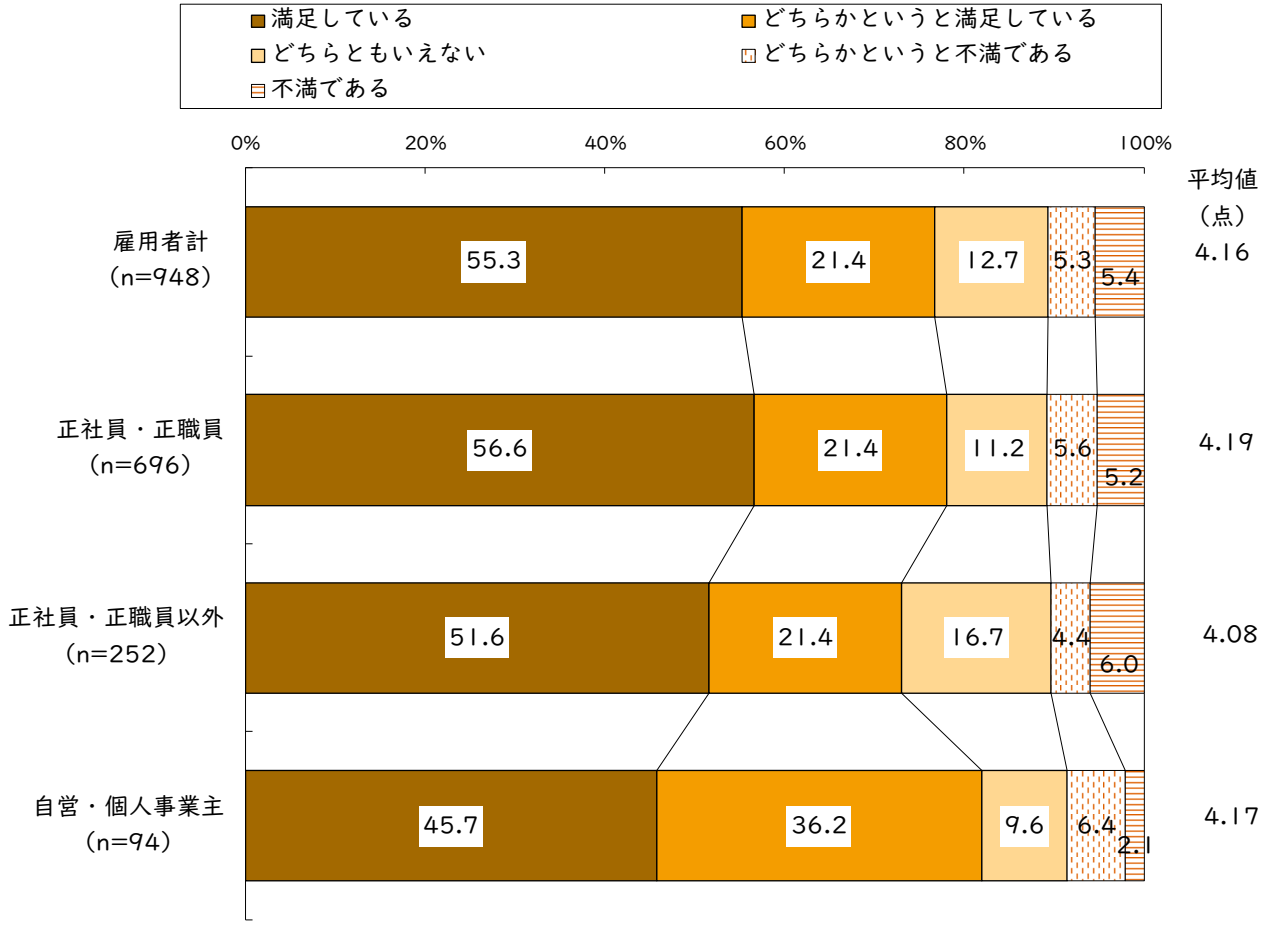
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- がん経験者に対する調査では、「結果として実現した働き方」にどの程度満足しているかを、当時雇用者だった人、当時自営・個人事業主だった人、それぞれに対してたずねている。
- 雇用者については、「満足している」が55.3%で、「どちらかというと満足している」（21.4%）をあわせると、76.7%が満足している。「正社員・正職員」と「正社員・正職員以外」を比較すると、満足計は各78.0%、73.0%と、「正社員・正職員以外」が若干低くなっている。
- 自営・個人事業主についても、「満足している」が45.7%で、「どちらかというと満足している」（36.2%）をあわせると、81.9%が満足している。

「結果として実現した働き方」に対しては、「どちらかというと」もあわせると、雇用者は8割弱が、自営・個人事業主は8割強が満足だとしている。

当時の就業形態別　実現した働き方に対する満足度
＜がん経験者＞



注1：「実現した働き方に対する満足度」については、雇用者と自営・個人事業主それぞれ別の設問でたずねた結果を掲載している。
注2：「正社員・正職員」、「正社員・正職員以外」は雇用者計の内訳（当時の就業形態「その他」を除く）。
注3：平均値は「満足している」を5点、「どちらかというと満足している」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかというと不満である」を2点、「不満である」を1点として得点化。

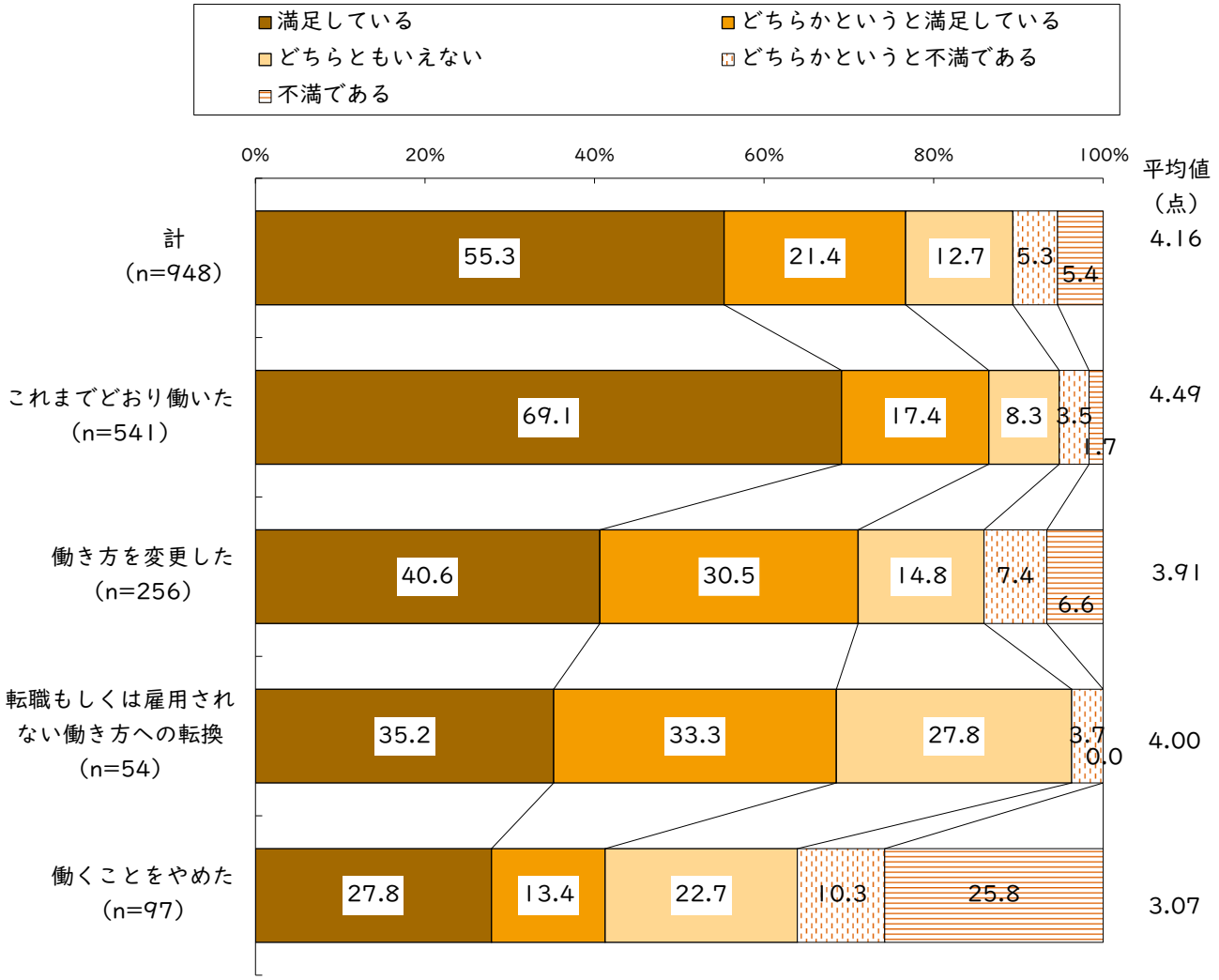
(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- がん経験者（雇用者）について、「結果として実現した働き方」別に、その働き方に対する満足度をみると、「これまでどおり働いた」では「満足している」が69.1%、「どちらかというと満足している」（17.4%）もあわせると86.5%が満足しているのに対して、満足計の割合は「働き方を変更した」が71.1%、「転職もしくは雇用されない働き方への転換」が68.5%、「働くことをやめた」が41.2%と低下していく。
- 「働くことをやめた」については、「不満である」（25.8%）と「どちらかというと不満である」（10.3%）があわせて36.1%にのぼっている。

実現した働き方別にみると、「これまでどおり働いた」場合は9割弱が満足しているのに対し、「働き方を変更した」や「働き方の転換」は7割前後、「働くことをやめた」は4割強の満足にとどまっている。「働くことをやめた」は、それを不満とする割合が他に比べて高く、がんになっても働き続けたかった人が、必ずしも働き続けられなかったがゆえの結果だと解釈できる。

実現した働き方別　実現した働き方に対する満足度
＜がん経験者＞



注1：雇用者に対する設問。
注2：平均値は「満足している」を5点、「どちらかというと満足している」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかというと不満である」を2点、「不満である」を1点として得点化。

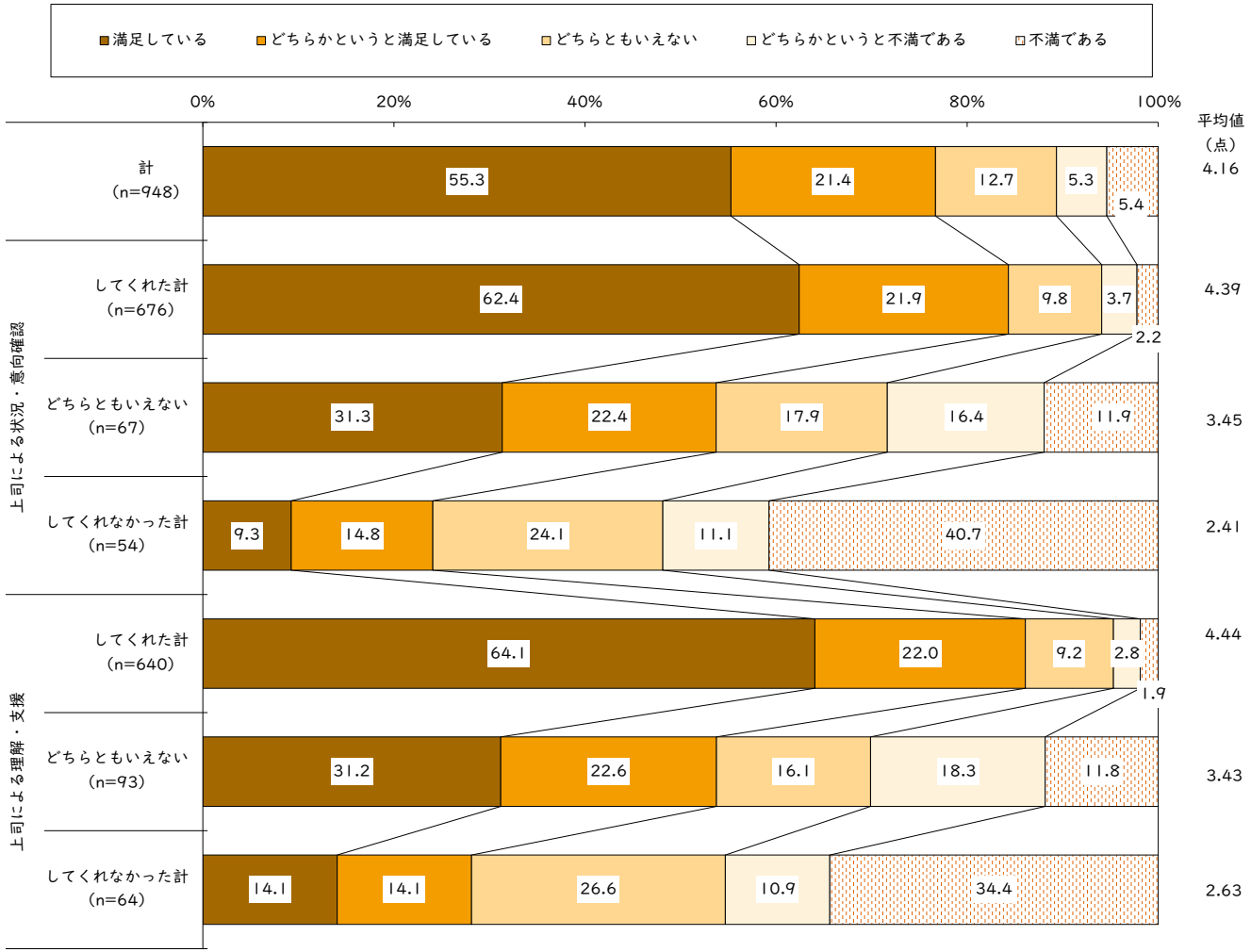
(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅲ. 調査結果のポイント　3.がんと診断された後の意思決定や働き方

- がん経験者（雇用者）について、上司による状況・意向の確認、状況・意向の理解・支援の有無別に、「結果として実現した働き方」に対する満足度をみると、確認や理解・支援を「してくれた」場合には満足度が高く、「してくれなかった」場合に満足度が低い傾向が顕著にみてとれる。
- 不満の割合（「不満である」と「どちらかというと不満である」の計）は、確認を「してくれなかった計」では51.9%、理解・支援を「してくれなかった計」では45.3%といずれも半数程度を占める。

がん経験者の働き方については、上司の影響力の強さゆえ、「結果として実現した働き方」に対する満足度も、上司の対応によって結果が大きく分かれている。
上司の対応に起因する満足度の低さが、その後の上司と本人の関係性に悪影響を及ぼしたことも懸念される。

上司の確認及び理解・支援別　実現した働き方に対する満足度
＜がん経験者＞



注1：雇用者に対する設問。「上司による状況・意向確認」及び「上司による理解・支援」は、がんのことを上司に報告した雇用者に関する集計結果。
注2：平均値は「満足している」を5点、「どちらかというと満足している」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかというと不満である」を2点、「不満である」を1点として得点化。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言～がんと共に働く

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　1.アンコンシャスバイアスとは

「がんと仕事に関する意識調査」の結果から、がんと仕事に対するさまざまなアンコンシャスバイアス（無意識の思い込み）が浮き彫りになった。最後に、調査結果をもとに、アンコンシャスバイアスの観点から、がんと診断を受けた人、その周囲の人それぞれに対して、“がんと共に働く”を応援するための提言を行いたい。

(1)アンコンシャスバイアスとアンコンシャスバイアス・マネジメント

【アンコンシャスバイアス（unconscious bias）とは？】

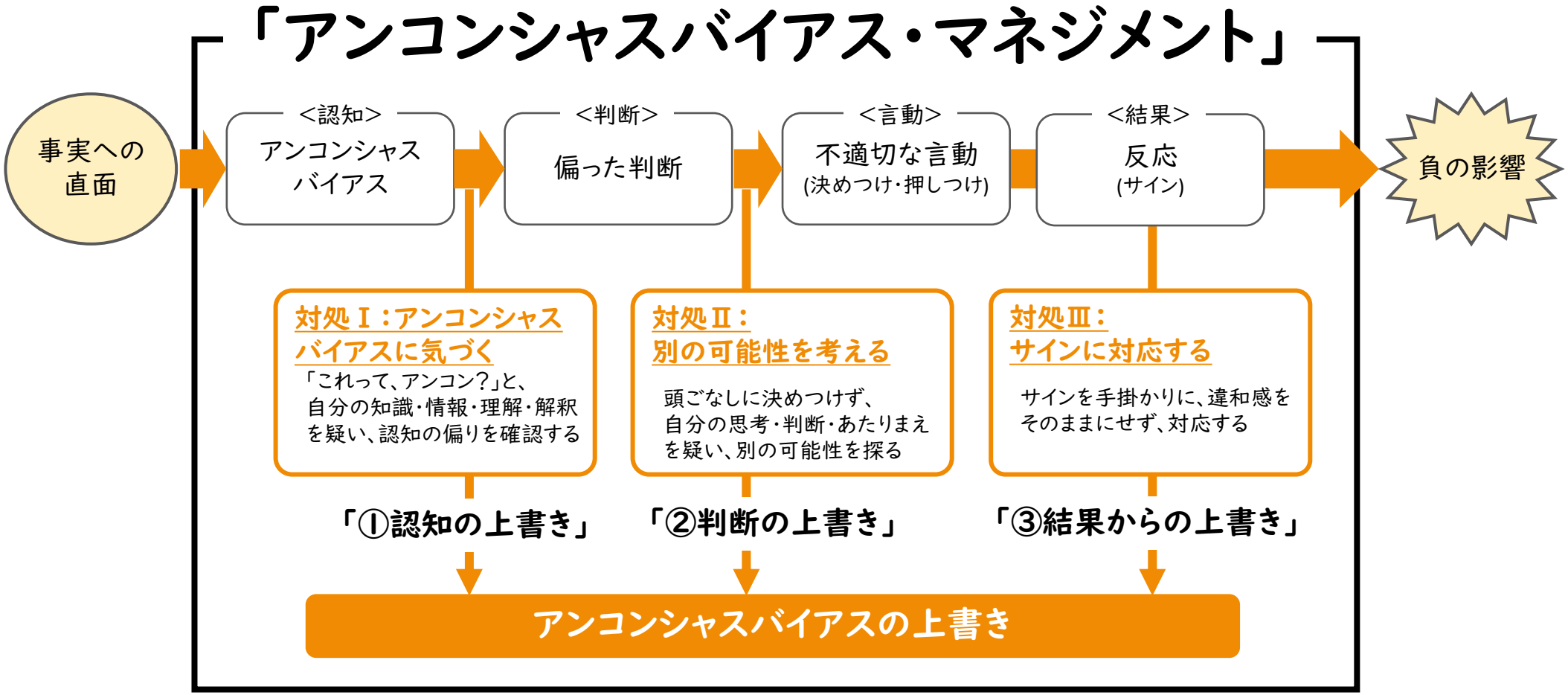
- アンコンシャスバイアス（略して、「アンコン」）とは、何かを見たり、聞いたり、感じたりするなどの「事実」に直面した際に、「無意識に“こうだ”と思う」こと。日本語では、「無意識の思い込み」、「無意識の偏見」、「無意識バイアス」等とも表現されている。
- アンコンシャスバイアスは日常にあふれていて、誰にでもあり、「相手」に対するものもあれば、「自分自身」に対するものもある。
- アンコンシャスバイアスは、過去の経験や見聞きしたことに影響を受け、形成される。
- 「がん＝死」といったアンコンシャスバイアスもあるかもしれないし、「がん治療をしながら働くのは難しい」といったアンコンシャスバイアスもあるかもしれない。

【アンコンシャスバイアス・マネジメント】

- アンコンシャスバイアスに気づかずにいると、偏った判断、不適切な言動（決めつけ、押し付け等）を誘発し、結果として負の影響をもたらすことも少なくない。この負の影響をもたらさないために、アンコンシャスバイアスに気づいて対処することを、「アンコンシャスバイアス・マネジメント」と呼ぶことにする（詳細はP60-62）。
- アンコンシャスバイアスは完全に無くすことはできないものの、認知・判断・言動・結果のそれぞれの段階で対処することによって、負の影響を軽減できる可能性がある。

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　1.アンコンシャスバイアスとは

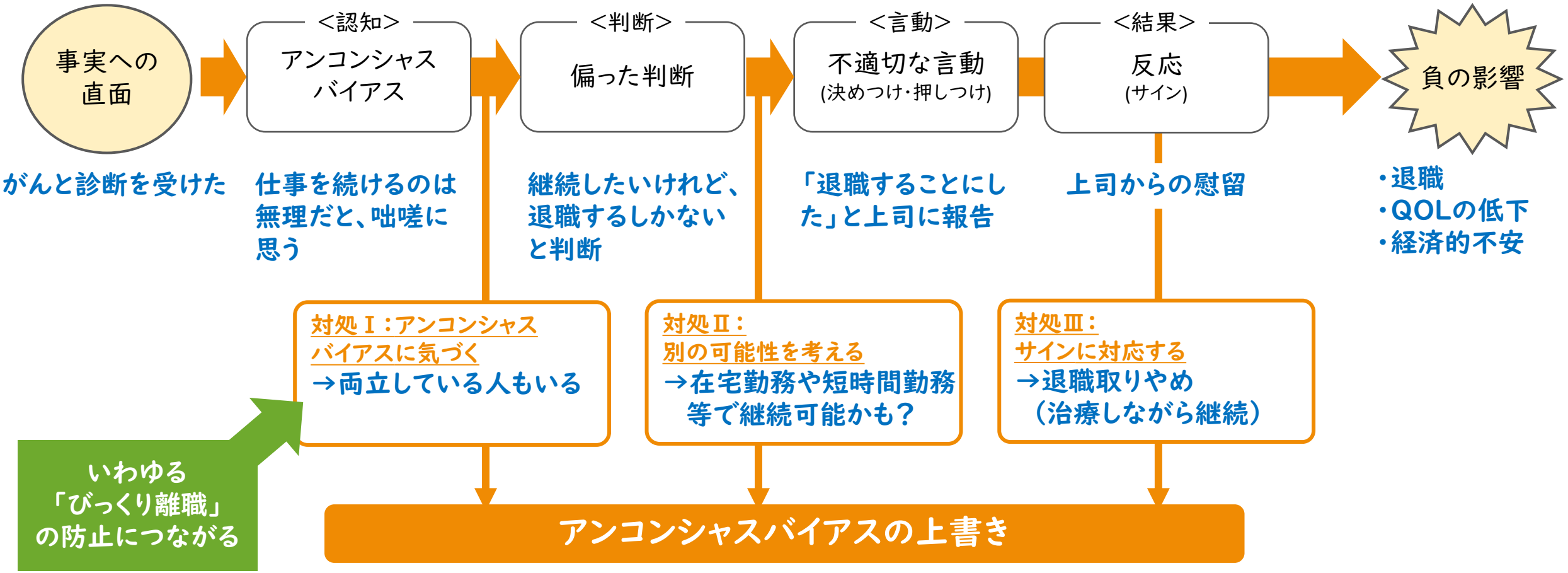


①認知の上書き　　：アンコンシャスバイアスに気づくことで、偏った判断に至らない
②判断の上書き　　：判断を検証することにより、不適切な言動（決めつけ・押しつけ）に至らない
③結果からの上書き：不適切な言動がおきても、その反応（サイン）に目を向け、対応することで、負の影響を軽減できる可能性がある

(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　1.アンコンシャスバイアスとは

(2)アンコンシャスバイアスの上書き事例:「がん」と診断を受けた本人の場合

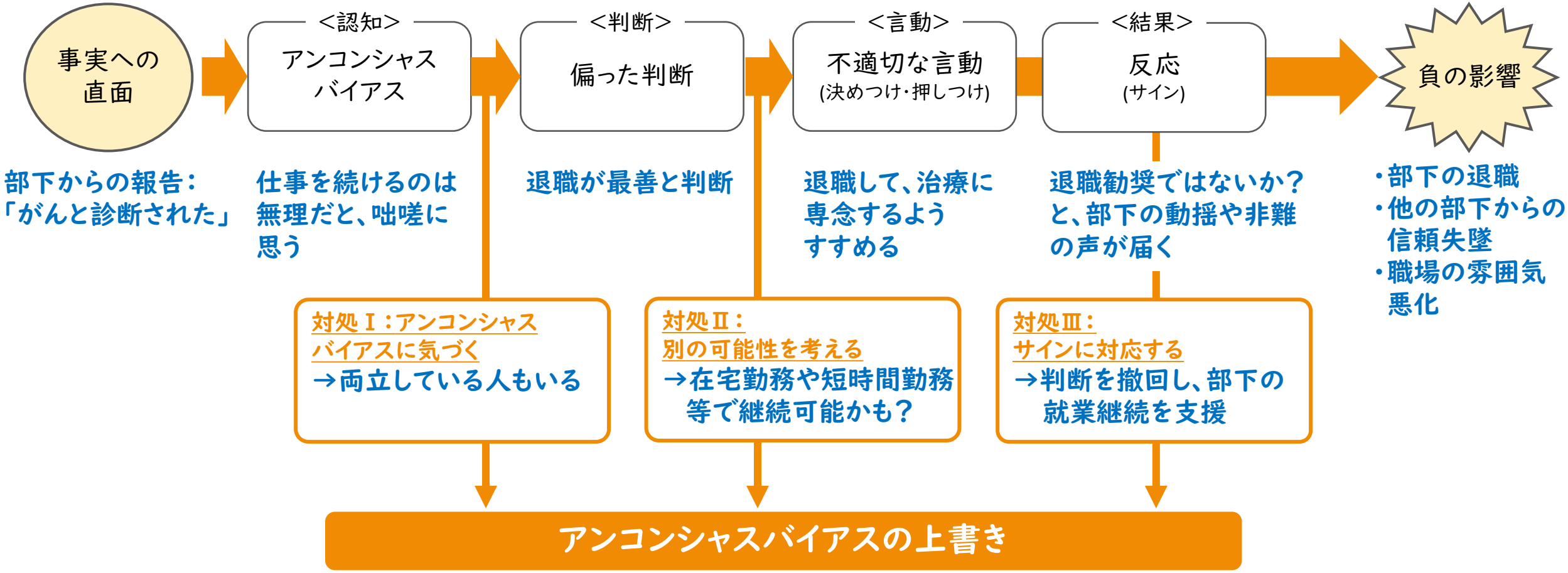


注1：青字部分が事例の内容。
注2：「びっくり離職」については明確な定義はないが、がんの疑いがあると言われた、あるいはがんと診断された人が、治療開始前など早い段階で退職・廃業してしまうことを、このように称することが多い。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　1.アンコンシャスバイアスとは

(3)アンコンシャスバイアスの上書き事例：部下から「がんと診断された」と報告を受けた上司の場合



注：青字部分が事例の内容。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

(1)がんと診断を受けた人への提言

提言①　**がん診断直後の「びっくり離職」を回避するために、仕事に関する意思決定までに、自分自身のアンコンシャスバイアスに気付き、「上書き」する期間を取る。**

国立がん研究センターの調査によると、がんと診断を受けて退職・廃業した人は就労者の19.8%で、そのうち診断確定前に退職・廃業した人は6.2%、初回治療までに退職・廃業した人は56.8%にのぼる。
一方、本調査で、がん経験者（雇用者）ががんと診断された後「最初にイメージした働き方」と「検討した上で希望した働き方」を比較すると、「これまでどおり働く」が大きく増加している。
つまり、「最初にイメージした働き方」におけるがん経験者のアンコンシャスバイアスが、その後「検討した上で希望した働き方」に「上書き」された可能性がある。
このため、「最初にイメージした働き方」で仕事に関する意思決定を行うと、その後「アンコンシャスバイアスの上書き」によって考え方が変わり、「びっくり離職」といわれるような拙速な判断を後悔することが懸念される。

がん診断後の退職・廃業の割合と、退職・廃業のタイミング

（%）

計	100.0
休職・休業はしたが、退職・廃業はしなかった	54.2
退職・廃業した	**19.8**
上記のようなことはなかった	26.0

【退職・廃業した人について】（%）

計	100.0	診断確定前
がんの疑いがあり診断が確定する前	6.2	**6.2　%**
がん診断直後	34.1	初回治療まで
診断後、初回治療を待っている間	16.5	**56.8　%**
初回治療中	11.6	
初回治療後から当初予定していた復職までの間	17.5	
一度復職したのち	10.8	
その他	3.1	

注1：診断時、収入のある仕事をしていたと回答したがん患者について。
注2：無回答、「わからない」を除外した集計結果。
資料：国立がん研究センター　がん対策情報センター（2020）「患者体験調査報告書　平成30年度調査」（厚生労働省委託事業）より。

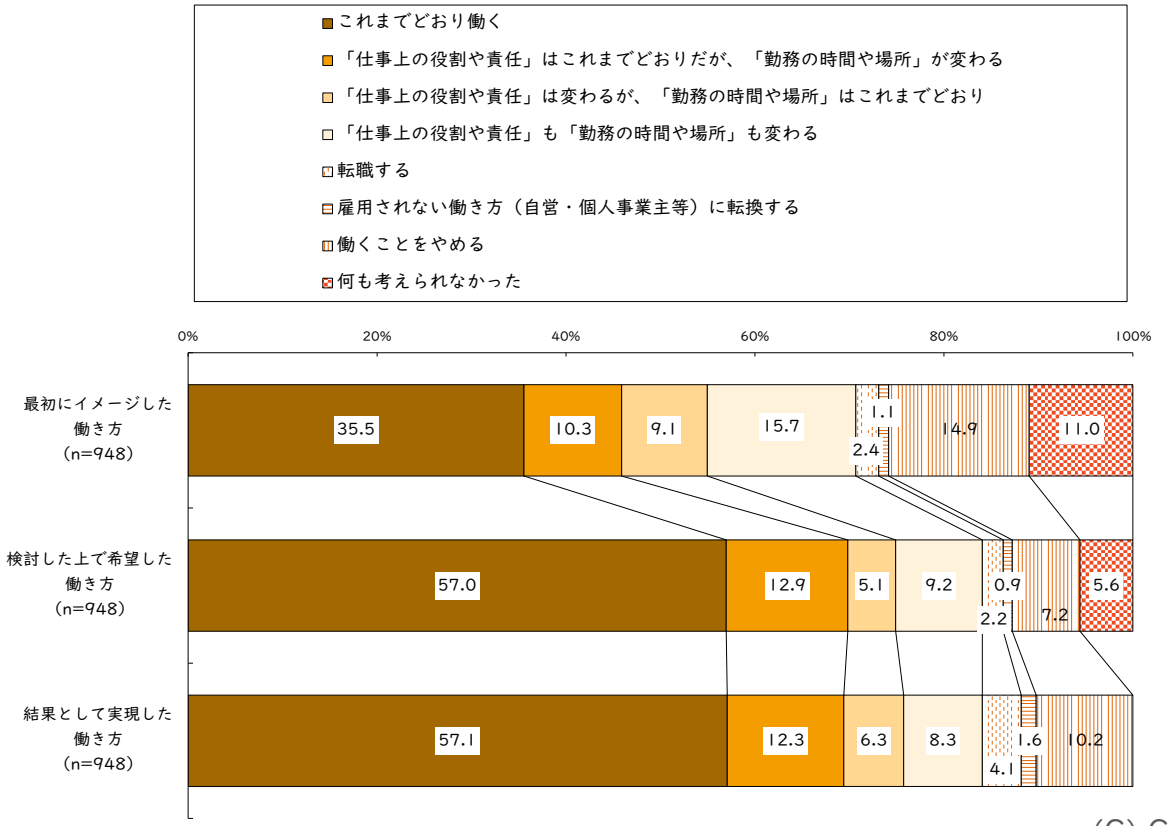
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

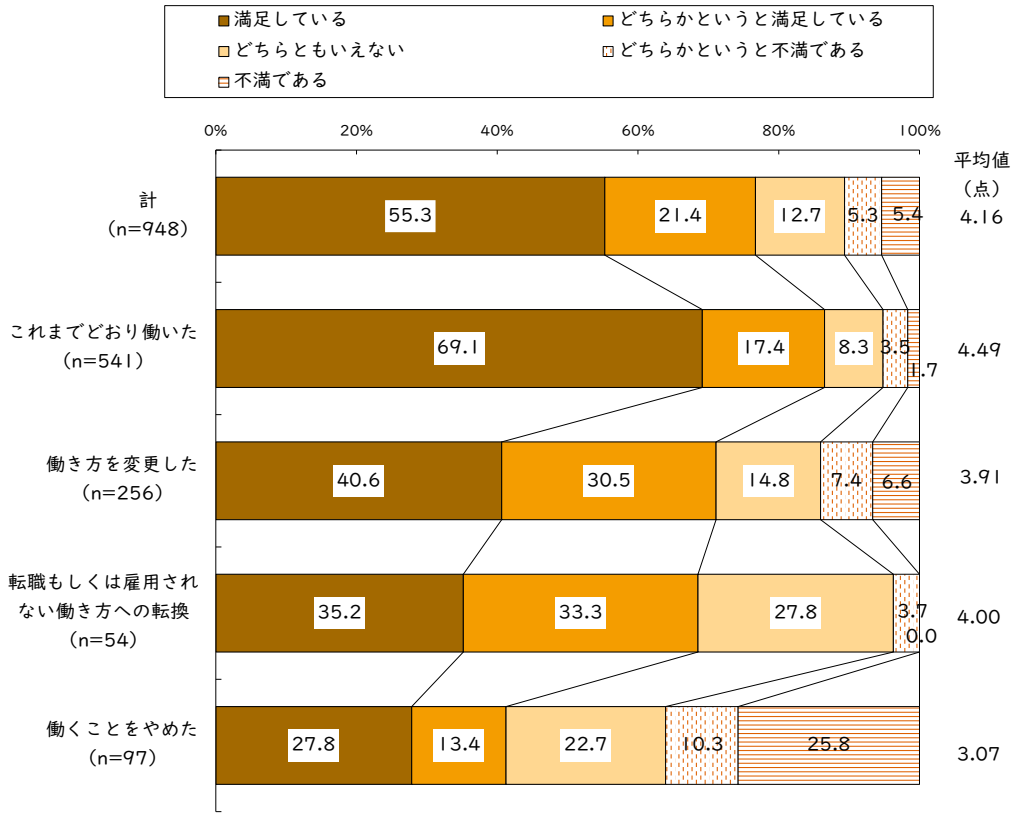
- がんと診断された当時、雇用者だったがん経験者に関する結果をみると、「検討した上で希望した働き方」では、「最初にイメージした働き方」に比べて「これまでどおり働く」が大きく増加し、逆に「『仕事上の役割や責任』も『勤務の時間や場所』も変わる」、「働くことをやめる」、「何も考えられなかった」は減少している。
- 「結果として実現した働き方」別に、その働き方に対する満足度をみると、「これまでどおり働いた」場合は9割弱が満足しているのに対し、「働き方を変更した」や「働き方の転換」は7割前後、「働くことをやめた」は4割強の満足にとどまっている。

【調査結果より】

イメージ・希望・実現した働き方
＜がん経験者＞（P45）



実現した働き方別　実現した働き方に対する満足度
＜がん経験者＞（P56）



(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

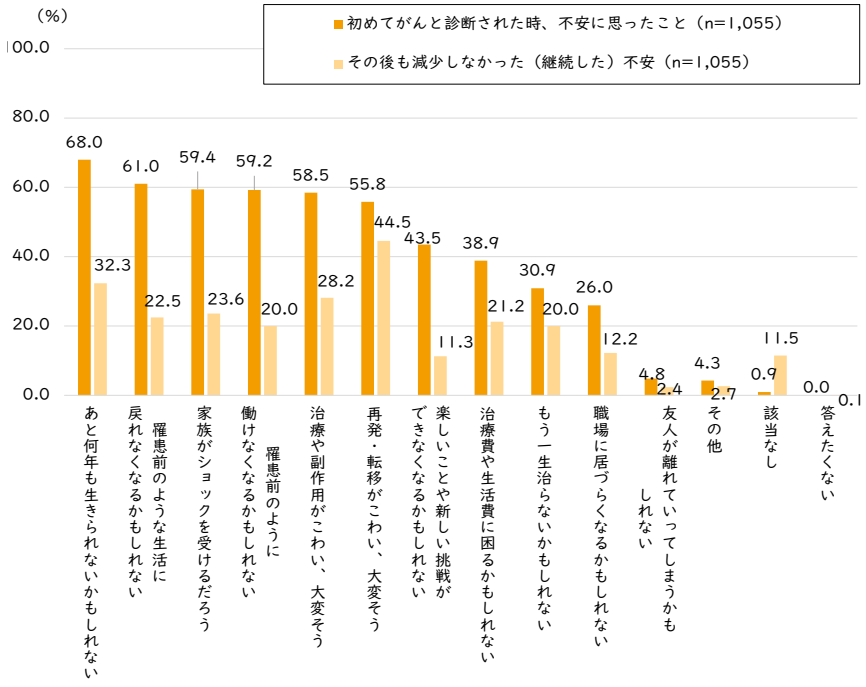
提言②　がんに対する「アンコンシャスバイアスの上書き」のためには、特定の情報源だけでなく、さまざまな情報にアクセスすることが重要。

初めてがんと診断された時にがん経験者が感じた「あと何年も生きられないかもしれない」、「罹患前のような生活に戻れなくなるかもしれない」等の不安は、それまで見てきた特定の情報源からもたらされた一種のアンコンシャスバイアスであり、その後「上書き」によって多くの不安が減少している。
特定の情報源だけでなく、さまざまな情報に意識的にアクセスし、自らの理解や解釈を検証することが、「アンコンシャスバイアスの上書き」につながる。

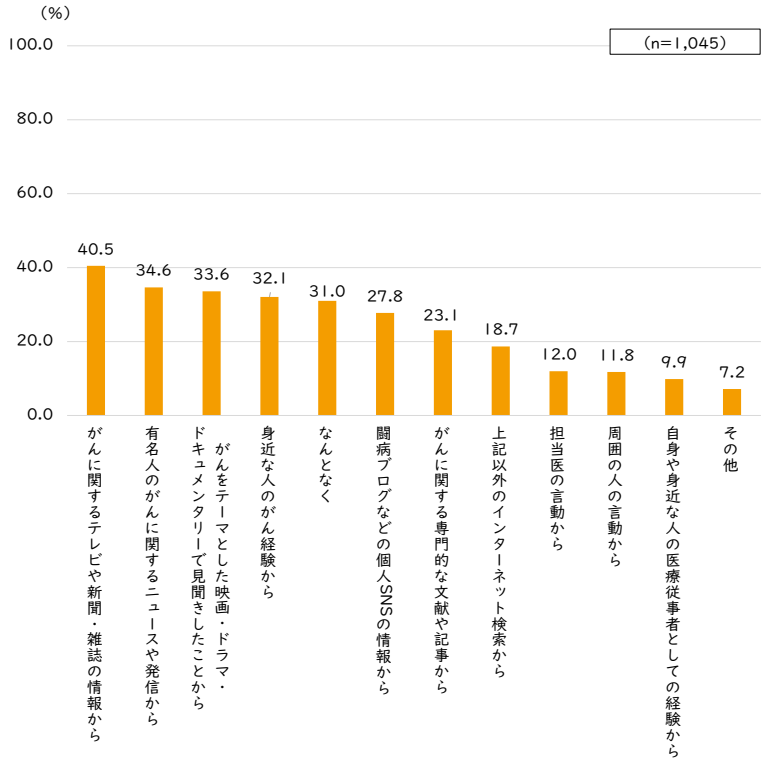
- がん経験者のがんに対する不安については、初めてがんと診断された当初に比べれば、その後大きく減少している。
- 不安の理由として、「がんに関するテレビや新聞・雑誌」、「ニュースや発信」、「映画・ドラマ・ドキュメンタリー」などが上位にあげられている。

【調査結果より】

初めてがんと診断された時不安に思ったこと、その後も減少しなかった（継続した）不安<がん経験者>（P13）



初めてがんと診断された時、がんについて不安に思った理由<がん経験者>（P15）



注：複数回答。設問では、「そのうち時間と共に軽減された不安」についてたずねているが、その回答率を不安とした回答率から差し引いて逆転させ、「その後も減少しなかった（継続した）不安」として表示している。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

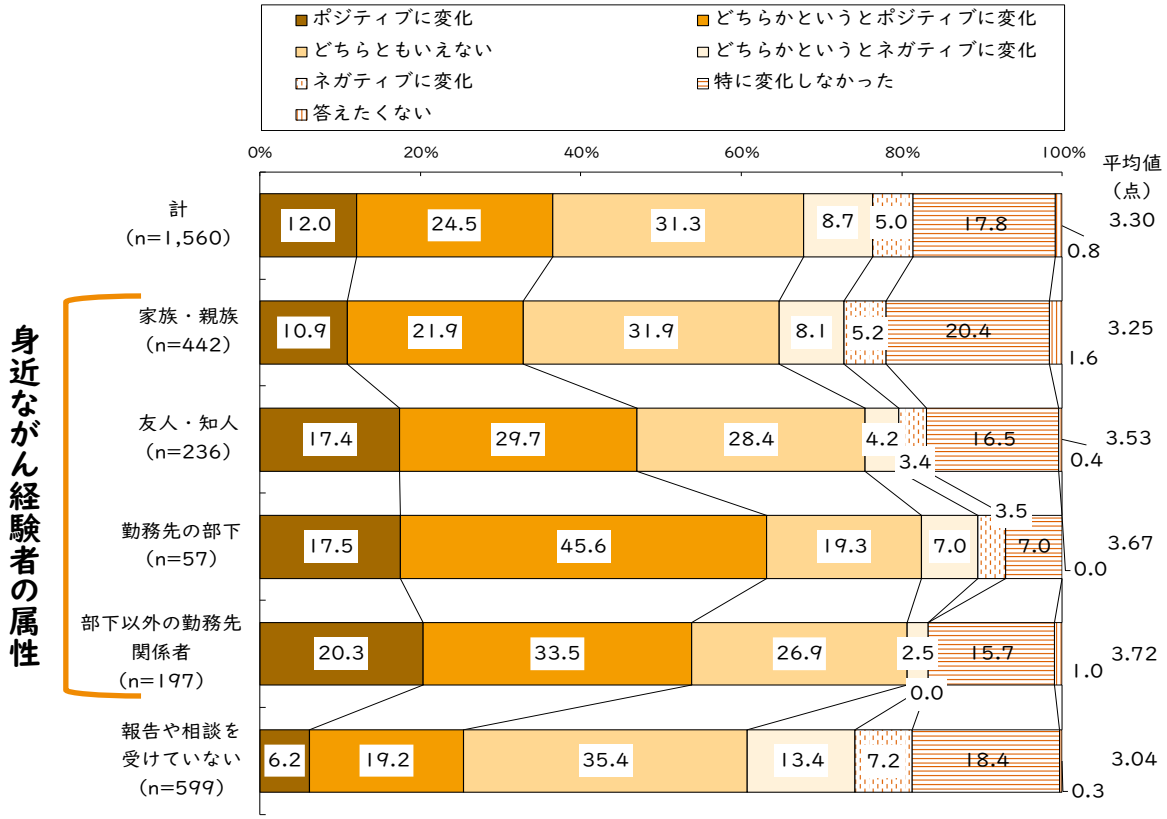
提言③　**がん経験者からの報告や相談は、周囲の人の「がんの治療と仕事の両立」に対するイメージをポジティブに変化させる可能性がある。**

身近ながん経験者（がんと診断された当時、働いていた方）からの、がんと診断されたことに関する報告や相談は、「がん治療と仕事の両立」に対する周囲の人のイメージを、ポジティブに変化させる傾向がみられる。
報告や相談をきっかけとして、周囲の人のがんに対するアンコンシャスバイアスが「上書き」された可能性がある。
一方、がん経験者はがんを周囲に報告するにあたり多くの懸念点（同情、噂、過度な配慮や特別扱い、詮索等）を抱えており、がんについて安心してカミングアウトできない現状も浮き彫りになっていることから、カミングアウトするかどうかは、周囲の状況やがん経験者本人の慎重な判断次第となる。

- 身近ながん経験者の存在は、当時の上司も含め、治療と仕事の両立のイメージをポジティブに変化させる効果がみてとれる。
- ただし、この効果は、身近ながん経験者から報告や相談を受けなかった場合には小さくなる。

【調査結果から】

身近にがん経験者がいたことによる、治療と仕事の両立に対するイメージの変化<がん経験者以外>（P20）



(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

(2)がんと診断を受けた人の周囲の人への提言

提言④

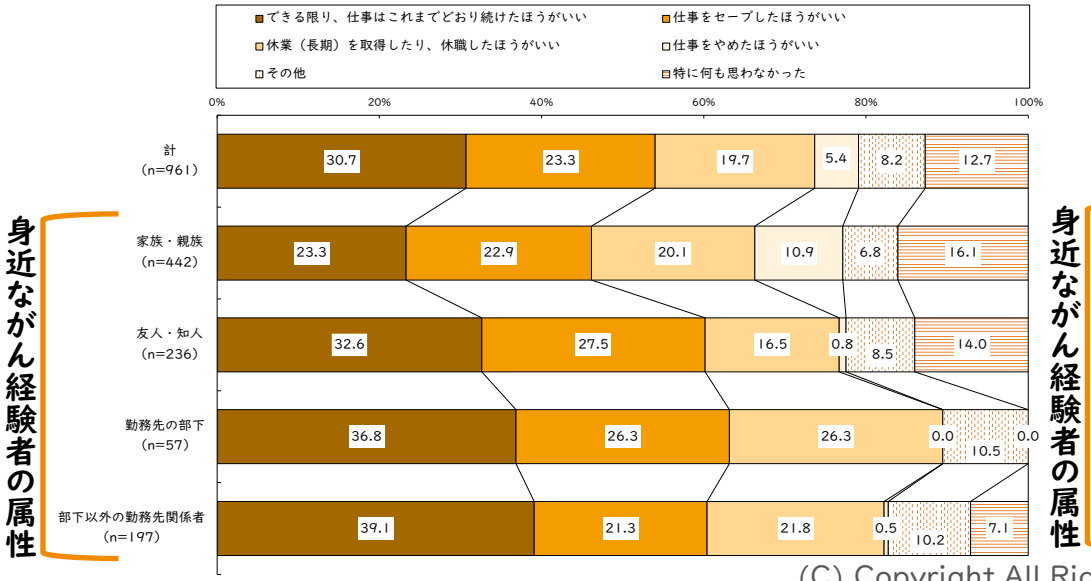
上司や家族等周囲の人は、がん経験者の仕事に関する意思決定に、負の影響を及ぼす可能性があることを自覚する。

がんと診断された際に、たとえば本人がこれまでどおり仕事を続けたいと思っていたとしても、上司や家族に「仕事をセーブしたほうがいい」、「休職したほうがいい」等のアンコンシャスバイアスがあると、報告や相談時などの上司や家族の言動によって、本人が不本意な決断をしてしまうことが懸念される。周囲のアンコンシャスバイアスが、本人の意思決定に負の影響を及ぼす可能性があることを、特に影響力が大きい上司や家族が自覚することが重要である。

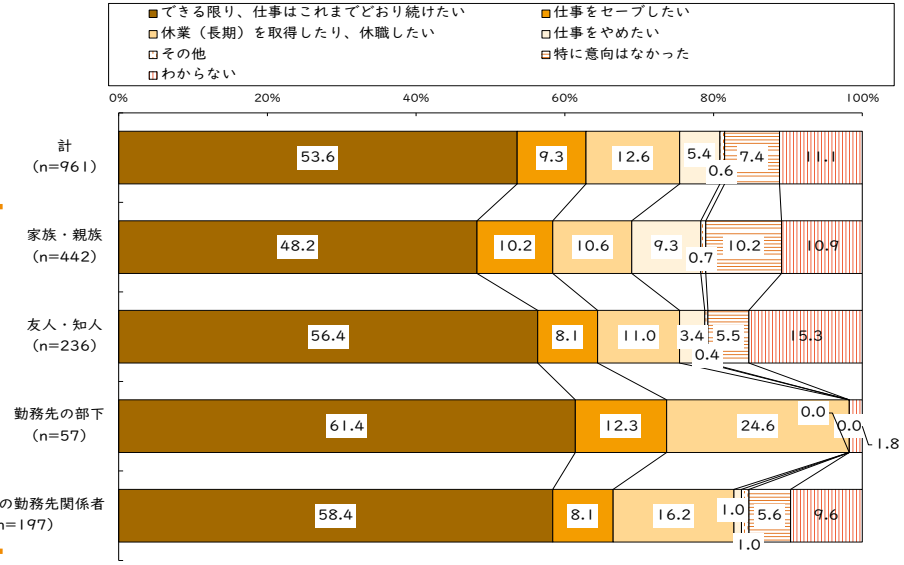
【調査結果より】

- がん経験者本人の意向としては「できる限り、仕事はこれまでどおり続けたい」が半数程度を占める。
- それに対して、家族や上司は「仕事をセーブしたほうがいい」、「休業を取得したり、休職したほうがいい」と考える傾向が強く、両者にギャップが生じている。

がんと診断されたことについて報告や相談を受けた時に、その方の仕事について最初に思ったこと<がん経験者以外>（P21）



がんと診断されたことについて報告や相談を受けた時の、その方の意向<がん経験者以外>（P21）



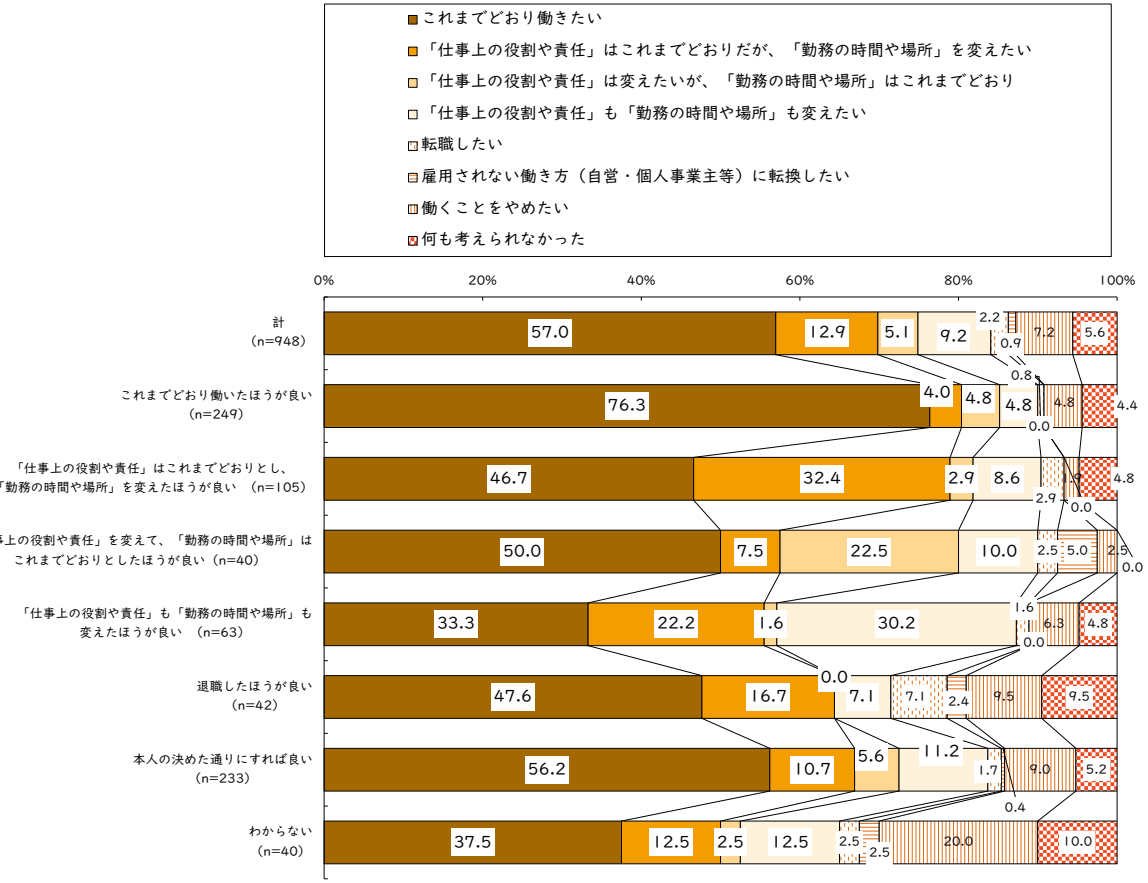
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

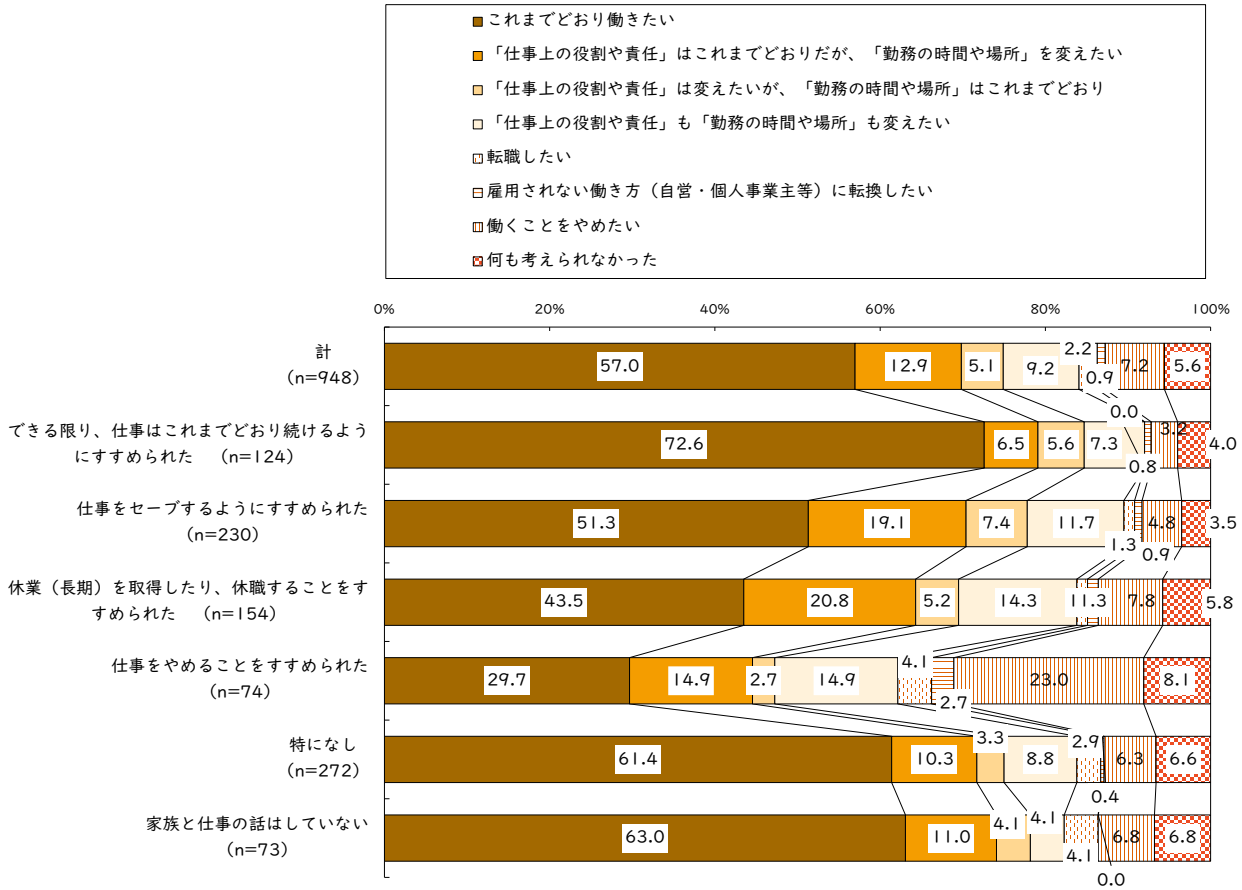
- 上司が「これまでどおり働いたほうが良い」と考える場合や、家族から「できる限り、仕事はこれまでどおり続けるようにすすめられた」場合には、「これまでどおり働きたい」とするがん経験者が多いなど、上司の意向や、家族からすすめられたことを受け入れるように、本人が希望する働き方を決定する傾向がみてとれる。

【調査結果より】

上司の意向別　検討した上で希望した働き方
<がん経験者>（P48）



家族にすすめられた内容別　検討した上で希望した働き方
<がん経験者>（P49）



(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

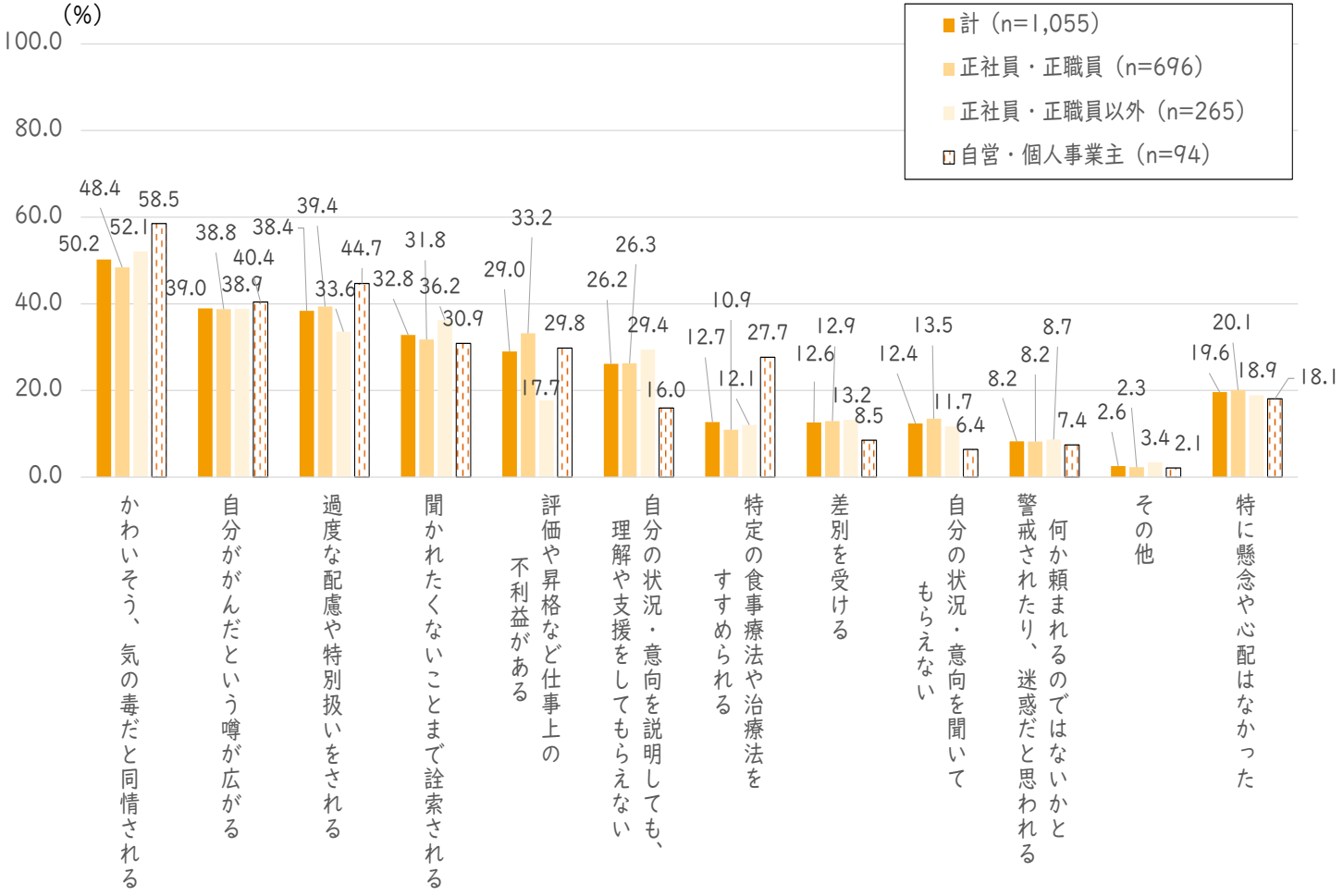
Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

がん経験者の多くは、がんと診断されたことをなるべく仕事関係者に報告したほうが良いと考えている。
しかしながら、周囲に報告するにあたっては、がん経験者から多くの懸念や心配があげられている。
同情、噂、過度な配慮や特別扱い、詮索等に対する懸念や心配は、周囲の言動に起因している可能性が高い。周囲のアンコンシャスバイアスによる良かれと思っての対応が、むしろ裏目に出ている可能性もある。
がん経験者が安心して、がんについて周囲に報告や相談ができるようにするためには、周囲の「アンコンシャスバイアスの上書き」が重要となる。

- がんと診断された時、そのことを誰かに報告する際の懸念や心配についてたずねたところ、「かわいそう、気の毒だと同情される」（約5割）、「自分ががんだという噂が広がる」（約4割）、「過度な配慮や特別扱いをされる」（約4割）、「聞かれたくないことまで詮索される」（約3割）といった多岐に亘る内容があげられた。

【調査結果より】

誰かに報告するにあたっての懸念や心配<がん経験者>（P44）



注：複数回答。

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

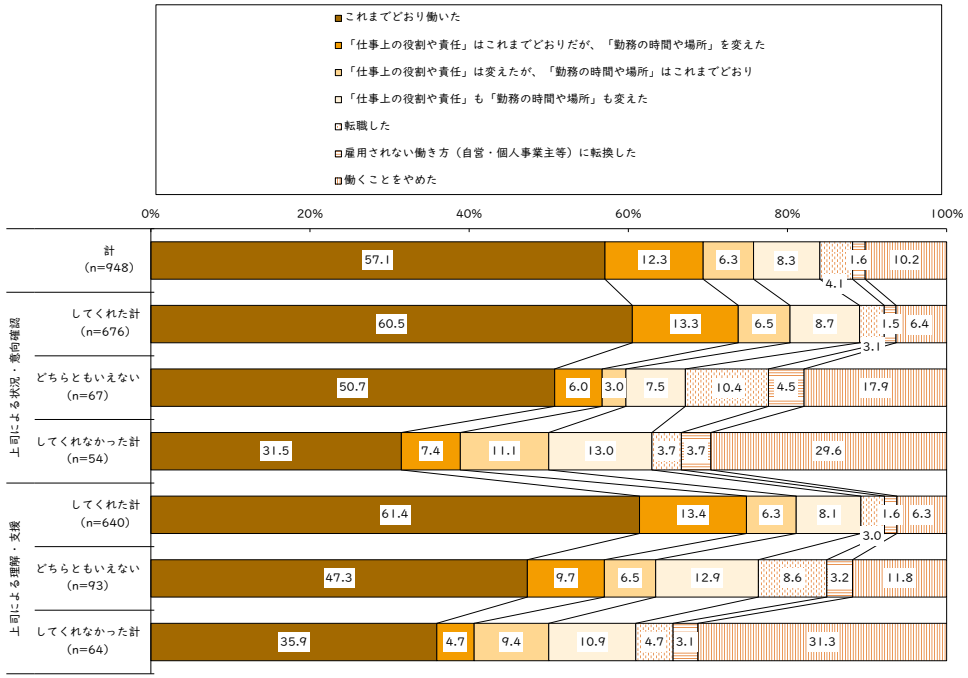
提言⑤　上司は、「働き方」に関する部下のアンコンシャスバイアスを「上書き」する支援者となり得る。

上司は、がんと診断された部下の状況や意向の確認、理解や支援を通じて、「働き方」に関する、上司自身のアンコンシャスバイアスを「上書き」するだけでなく、部下のアンコンシャスバイアスをも「上書き」することができる。

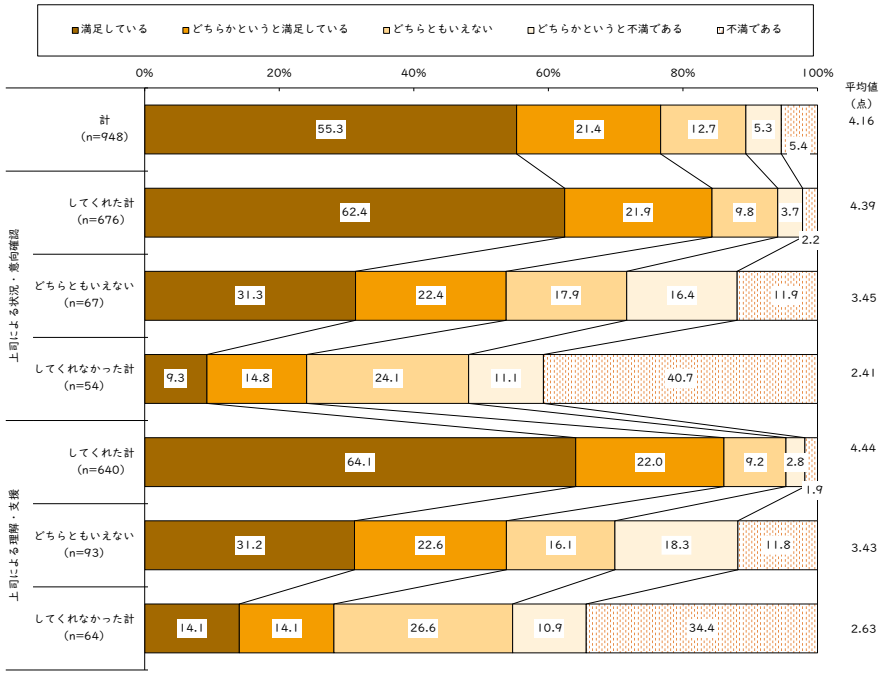
- がん経験者の状況や意向を確認し、理解や支援をしていた上司のもとでは、「これまでどおり働いた」とするがん経験者が多い。
- また、「結果として実現した働き方」に対する満足度も、上司が状況や意向を確認していた場合、理解・支援していた場合に高くなっている。
- 逆に、上司による状況や意向の確認、理解や支援がなかった場合には、「働くことをやめた」とする割合が高く、満足度も低くなっている。

【調査結果より】

上司の確認及び理解・支援別
実現した働き方<がん経験者>（P51）



上司の確認及び理解・支援別
実現した働き方に対する満足度<がん経験者>（P57）



(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

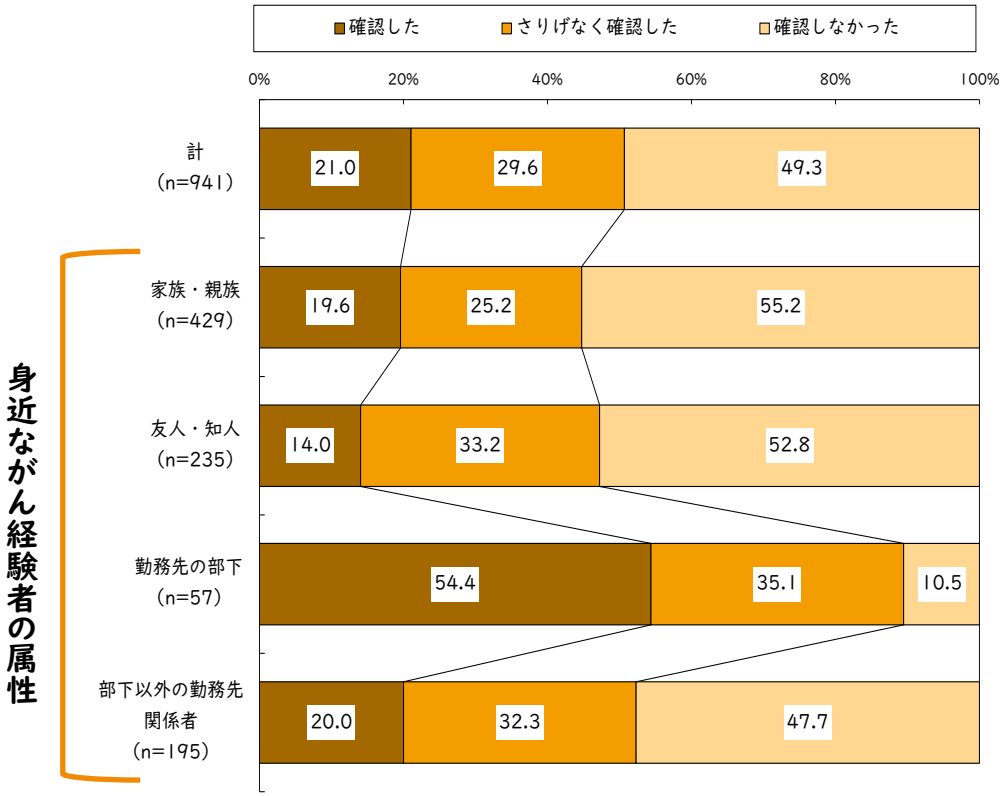
提言⑥　周囲の人は、がん経験者の働き方について、当事者不在で判断せず、意向を確認する。

職場で同じ対応を受けても、がん経験者がうれしいと感じる場合とそうでない場合があるため、配慮を行うにあたって本人の意向を確認することが有益だと考えられる。
しかしながら、身近ながん経験者が「勤務先の部下」である場合を除いて、周囲が本人の意向確認をするケースは半数程度にとどまっている。
また、「普段どおりに接する」は多くのがん経験者が求めている対応であり、多くの周囲の人も実施している配慮であるにもかかわらず、がん経験者に配慮として認識されていない懸念が大きい。上司などの周囲が、心配や気遣いを見せないように「普段どおりに接する」配慮をしているつもりが、がん経験者本人には単に心配も気遣いもされていないと受け取られるというボタンの掛け違いが、職場で起こっている可能性がある。

- 身近ながん経験者が「勤務先の部下」（1割強）である場合を除けば、がん経験者以外の半数程度は、本人に意向を確認せずに配慮を行っている。

【調査結果より】

配慮を行うにあたって、事前にその方本人の意向を確認したか
<がん経験者以外>（P28）



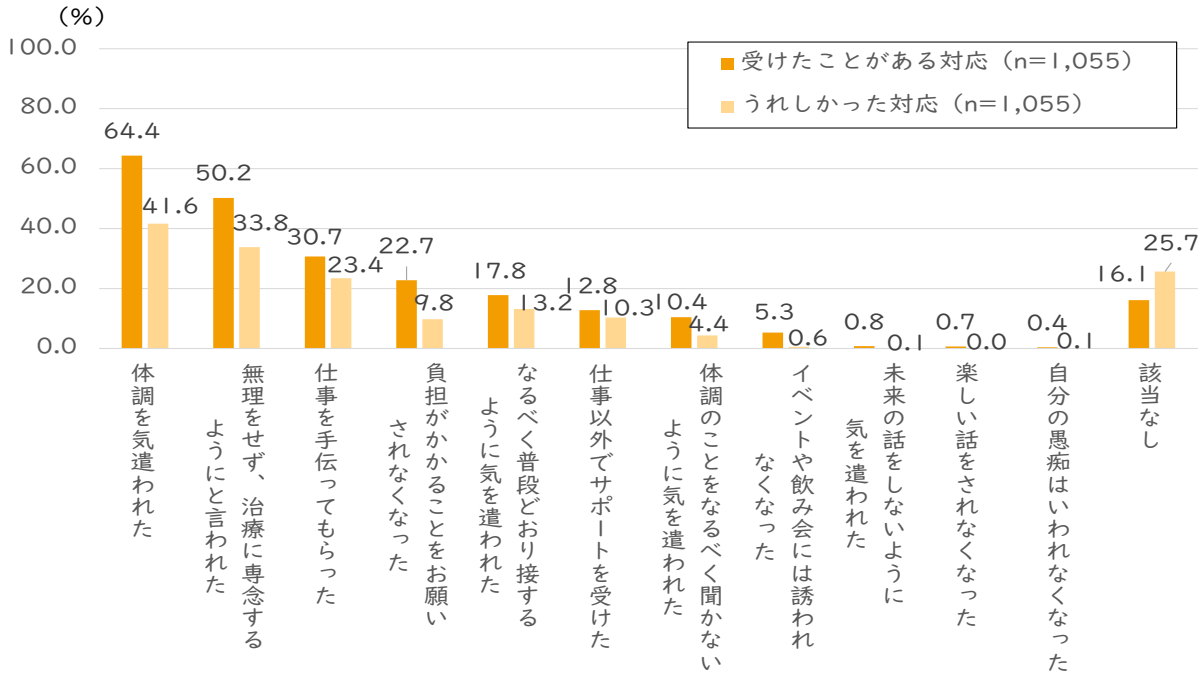
(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅳ. 提言　2.“がんと共に働く”を応援するために

- 「なるべく普段どおり接するようにした」は、がん経験者以外が行った配慮のトップにあげられているが、職場でがん経験者が受けた対応としては2割弱にとどまっている。
- がん経験者は職場で受けた対応の上位2位は「体調を気遣われた」、「無理をせず、治療に専念するように言われた」で、それぞれ2/3程度は、そうした対応がうれしかったと回答している。言い換えると、同じ対応であっても、うれしくなかった場合がそれぞれ1/3程度存在し、がんと診断された人にはこう対応すれば良い、という汎用的な対応を示すことは難しいことがうかがえる。

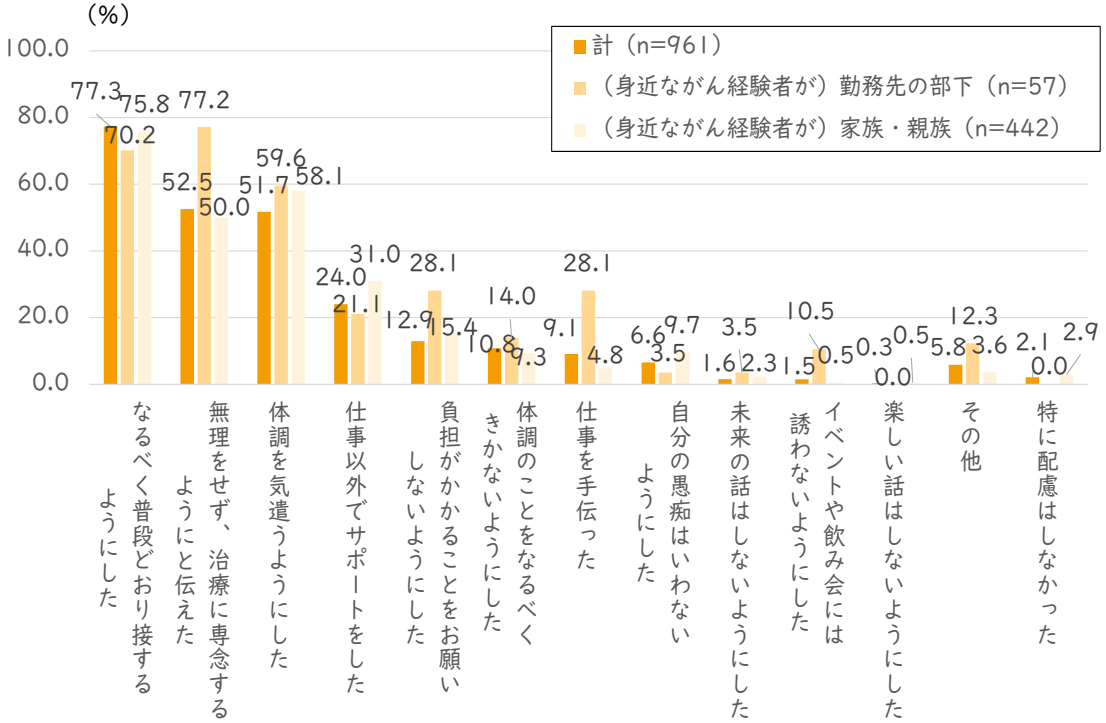
【調査結果より】

初めてのがんの治療と仕事の両立において、職場で受けたことがある対応、そのうちうれしかった対応
＜がん経験者＞（P25）



注：いずれも複数回答。

がんについて報告や相談を受けた時、その方に対して行った配慮
＜がん経験者以外＞（P27）



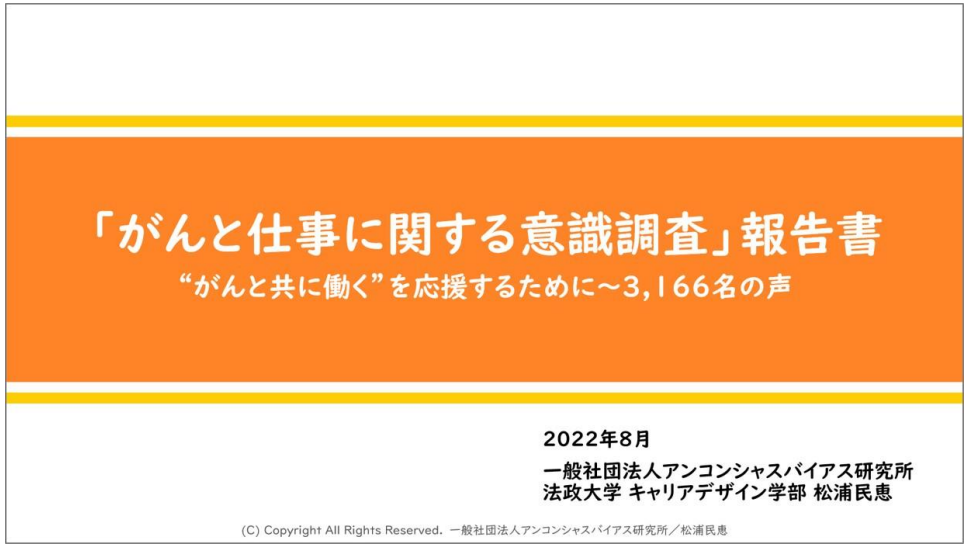
(C) Copyright All Rights Reserved.　一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵

Ⅴ. 本調査報告書についてのお問合せ

「がんと仕事に関する意識調査」報告書
“がんと共に働く”を応援するために～3,166名の声

【発行日】2022年8月

【発行者】一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所
法政大学　キャリアデザイン学部　松浦民恵



https://www.unconsciousbias-lab.org/cancer

【引用時のお願い】
調査結果を引用・転載する場合には、以下のとおり、出典を必ず明記してください。
出典：アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵「がんと仕事に関する意識調査」（2022年）

【取材など各種お問合せ】

一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所
HPより：https://www.unconsciousbias-lab.org/contact

(C) Copyright All Rights Reserved. 一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所／松浦民恵